

643

184

禁
複
写



* 0054608000 *

0054608-000

643-184

国民伝説類聚

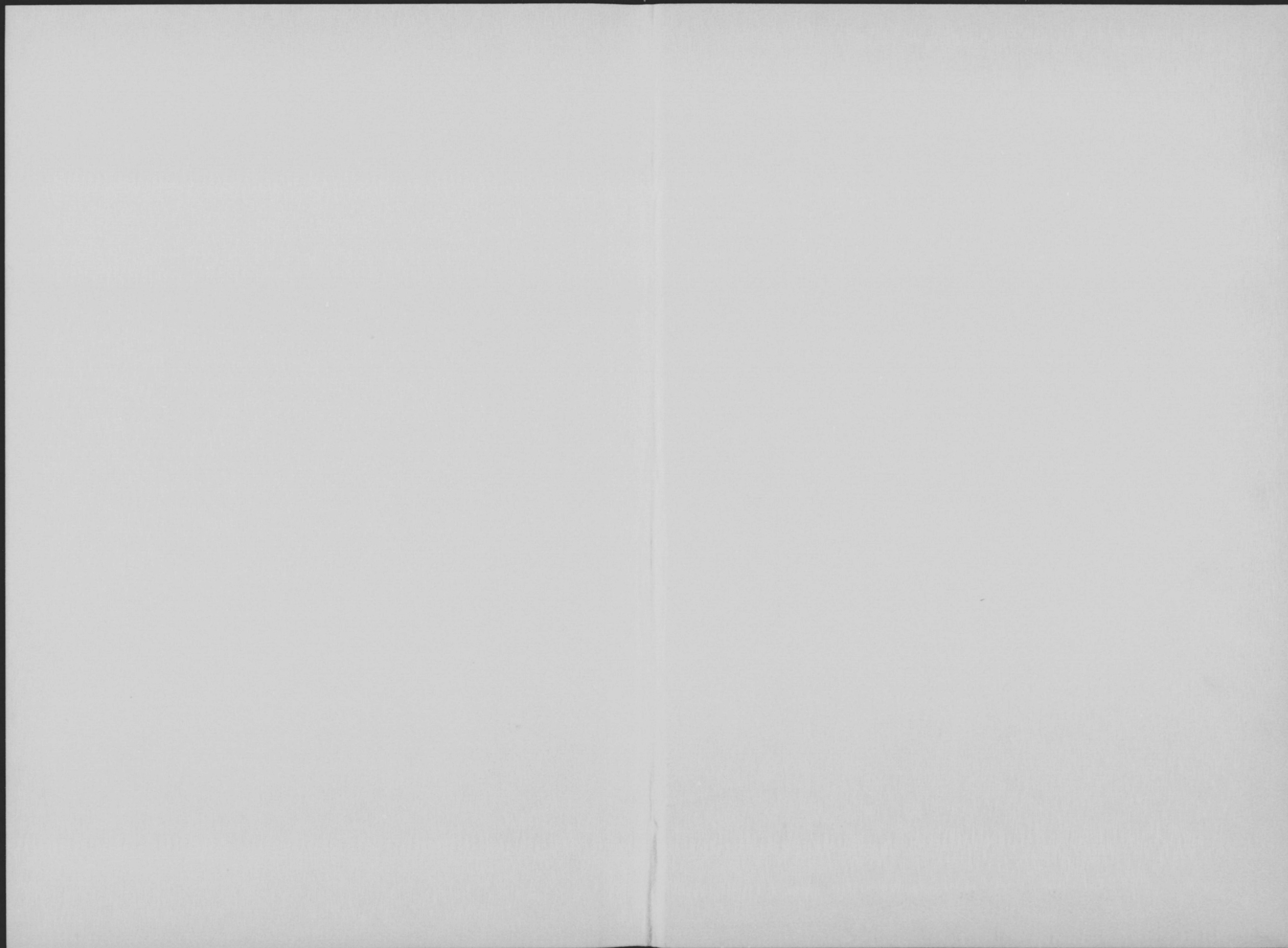
島津久基・著

大岡山書店

前輯

昭和8

AID



KG6E-64

1-3281

光



島津久基著

國民傳説類聚 前輯

東京 大岡山書店刊行



643-104

自序

國民傳説といふ稱呼は故芳賀矢一先生が好んで用ゐられたところのもので、私には特に、いつも思出深い懐かしい響を齎すのである。一見頗る明瞭な、併し實は概念がかなり曖昧な名辭のやうであるが、それだから尙面白い語だと私は思つてゐる。それは國民の傳説といふ意味に解せられてもよいし、國民的傳説といふ意味に解せられてもよい。否、この兩者を併せたところのもの——國民の傳説でそして國民的な傳説であること——こそ、却つて眞に國民傳説の定義として該當するのである。即ち我が國民傳説と言へば、對外的に異國民・異民族のそれと區分しての日本國民の傳説の謂であることは言ふまでもないと同時に、この術語は一面更に狹義には對内的に民間傳説と對稱をなすものであると言ひ得る。前者の場合でも、廣義に觀れば民間傳説をも含ませ得るのであるけれども、而も猶、國民的な傳説こそ所謂國民傳説の精粹であ

らねばならない。そして民間傳説を含ませる場合は、これと混同せぬ爲にも、日本傳説と呼ぶが妥當であらう。

斯くの如き意味の國民傳説はその成立の過程として又結果として國民總體のおのづからなる共同創作になる傳説であり、そして國民總體が共有し流布させてゐる傳説であり、随つて國民乃至民族全般の特性も思想も生活相も赤裸に無邪氣に投影してゐて、その國民自身の魂と姿とを最も如實に最も的確に且最も興味深く解明し描出し紹介する所以のものである。そしてその種の傳説は、發生並びに成形の機因は必ずしも常に同一であるとは言へなくとも、傳説本來の面目たる傳承に依る成長擴充作用と相關的な關係を保ちつゝ、概して國民的な敘事詩や大衆的な小説・戯曲等としての好箇の題材を有名無名の作家達に豊富に提供して——換言すれば、國民の間に漸次語り繼がれ移動させられながら斷えず改變添除を蒙ると共に、竟には何時か國民的な文學作品の形相にまで推し進められて行き——そしてそれによつて一層その傳説自身の國民的——或時には國際的にまでの——流布を促進させ擴大させ且その姿態に凝成した形に於ての恒久性を確保するのが一般で、これ又傳説がその播布及び進展の性能をこの方面でも自由に

發揮した極めて自然な展開現象に他ならないのである。

要するに傳説から文學への進展凝成——即ち傳説の文學作品化といふことは、結局、傳説の本性の中に既にその可能と未來とが大部分約束せられてあるかなり重要な特質であると言つても過誤ではない。傳説それ自體が大體に於て少くとも廣義には文學として許され得る場合が殆ど普通であるのみならず、素材としても形態・表現からしてもその具有する文學的性質の多分さは、これに或まとまつた文學形態と生命とを與へ得ることの比較的容易であることを、常に表明しそれを勧誘すらしてゐるかに見えるからである。實際、傳説と文學との限界は嚴密には劃線の引けないほど、互に混融しほかさ合つてゐる場合に餘りに屢々遭遇せしめられるのである。兎も角、斯うして作品化せられてそして弘布した傳説こそ、即ち國民傳説としての意義が判然と賦與せられた外證の保持者であると論定していゝのではなからうかと思ふ。勿論、作品化といふことが絶対必須の條件ではないし、それよりも國民的成長及び弘布といふことが唯一の重大な要件ではあるのだけでも、文學的凝成は流動斷え間なき個々の傳説をば各々その寫し出されたやうな姿態として國民的に印象づける役割を勤め、識認させる結果を生むこ

とだけは誤り無き事實である。少くとも實際的には、かういふ種類のものを國民傳説と目することには取扱の基準を置くことが利便であり、且甚だしい不當さは感ぜられないやうに思ふ。

もとより記録傳説、特に文學作品がそのまま説話研究資料として無條件無批判に採用せられることの危険さは十分以上に嚴戒せられねばならない。作品化せられたが爲に必然に或は有意的に附加せられて來た非傳説的成分の餘りにも多過ぎることは——極端に言へば、殆ど例外無しに——傳説の特質・本性を動もすれば攪亂しようとし、危く傳説そのものを消失せしめようとすらする。文學を通しての傳説研究の最大缺點と困難とは此處に存する。併しそれだからとて、文學を通しての傳説研究が蔑視せられ無用視せられ排斥せられねばならぬ必要は又毫も無いのである。傳説から生れた文學、文學から生れた傳説の二方面と緊密に連關して、それはやはり文學研究者の擔當すべき領域であらねばならない。

又、或特定の個人作家が意識的に創り出した獨立した文學的説話——藝術童話などはその一例である。——或は個人作家の手に成つた文學作品の一部としてその内に含まれる、その作家の創意による説話を、私は製作説話と名づけて、民衆の傳承による説話、即ち傳説的説話即ち

所謂傳説と區別してゐるが（尤も如何なる傳説・説話でも、發生の當初に於ては、完不完に關せず或無名の個人作家の製作説話でないものは有り得ないであらうが、傳説としての意義と性質とは寧ろその後の成長流移の過程に於て決定的となるのは無論であると共に、その最初の第一人たる無名の説話作家も實は民衆の代辯者たるに過ぎず、その意味では作家としての個性的色彩を要せず、否却つてそれが極度に拒否される。だから個性の強い文學的な作家の創作した所産、私の所謂製作説話——嚴密に言へば、製作といふ名辭は創作と撞著するやうにも聞えるが、上に述べるやうに、自然的野生的な説話と區別する爲の便宜上の稱呼であることを重ねて言ひ添へて置きたい——とはやはりおのづから區別されてよい、又區別され得る理由があるのである）、而も原形がそのやうな製作説話であつても、又は元來は一地方に偏在した民間口碑であつても、それがやがて國民全般に迎へられ擴がつて行くといふ限り、それらは個人的或は地方的色調や感興以上に、國民性の本質に觸れるものがあるからであるが故に、もはや立派な國民傳説としての資格を獲得した——そしてそれらは必ず又國民的弘布の間に既に多少とも原形からは轉化して來てゐると認められ得るのである——ものと言つて不可なきものである。

神話や童話も厳密には無論傳説とはおのづから區分せられねばならないが、元來國民的民族的なものであるところの神話、及び傳承による童話の中で國民的に流布してゐるもの等は又、同様に傳承による國民的説話であるといふ側からは、何れも明らかに一種の國民傳説である。つまり觀様によつては共に各々國民傳説の變種乃至特殊形態であるとも言へる。そしてそれらも亦文學的形態をとつて記載せられてゐるものが多いことは、他の一般の國民傳説に於けると全然同じである。故に場合によつては、これらをも廣く國民傳説乃至傳説(廣義の)の稱呼の下に便宜總括しても、大きな矛盾は無いのみならず、況んや神話・傳説・童話・製作説話、この四つのものは、性質上、事實に於て互に交錯し混融する場合が少なくなく、前述の製作説話の傳説化と同じく、神話の傳説化したもの、傳説の童話化したもの等多様多彩で、相互を細別し難い場合も時になしとせず、漠然たる嫌はあつても、すべての説話的國民傳承の汎稱としては、寧ろ最も自然なものとして許されねばなるまい。而も通俗的には却つて穩當に受容せられるであらう。本書の題號に國民傳説の名を用ゐたのは如上の理由に因るものである。

傳説・説話は常に固定することがなく、不斷に流動轉移を繼續して、その間分解・接合・吸

引・膠著・膨脹・派生等の作用を營みつゝ、變幻窮りなく玄妙自在で、その正體を捕捉するを容易に許さぬのが顯著な一特性である。それだけにこれを考察し分析し整理し究明する興味は一段と深からしめられる。が、この廣汎複雑な形相を成す事象を對象として研究しようとするにはいろ／＼の觀點があり、そしてその何れの一面からのみでも満足な解答は到底獲られないし、獲られても獨斷に偏倚する懼がある。互に自分の立場からの收穫のみを妄信的に固執したり、又他の立場を感情的に排撃したりすることなしに、須らくそれ／＼の持場々々を理解し合ひ、各々の長短を取捨拾補し、相助け相依り、以て正しい完全な論結への到達を目ざすべきでなければならぬと信ずる。民俗學や比較神話學や童話研究や諸方面に關しての私の知識は御恥しい程乏しい。唯、自分が平生國文學の事に携つてゐる爲に、説話文學の問題に關聯して、文學を通しての傳説考察、並びに傳説の文學へのはたらきかけ、乃至、説話を題材とした文學作品の論考といふことに多少の關心を有つてゐる。さうして國文學研究の傍ら觸目する文學の側から觀た傳説現象に就いての何等かでもの資料と報告とを、完全な傳説研究——言ひ換へれば、今なほ成長期にある説話學の完成、乃至日本傳説學の建設——といふ大きな作業の一小助手と

して些少なりとも獻與することが出來たい、同時に異なつた持場からの教導によつて、自分の假設や小論斷を是正し得る悦を期したいと、常に希つて止まぬのである。この類聚も實はもと自分自身の半ば研究の便と半ば好事の楽しみとの爲の座右備考の資料と覺書に過ぎぬものであつたのであるが、同好の人々に慫慂せられて俄に梓に上す氣になつたので、多少手は入れたが未だいろ／＼不備な點が多いに違ひない。幸に童心を愛するそして幻想に豊かな讀者と共に、我等の素朴な祖先達が天真のまゝに遊び戯れた懐かしい魂のふるさとに、何時でも我を忘れて逍遙神往することが出来るならば、そして又、國民文學と雙生兒である國民傳説の一つ一つに偽り無く映る己が姿影を凝視して、國民性を自省する契機を掴む善縁をも與へられ得るならば、縦ひ眞の傳説研究に致す所ものは猶言ふに足るものが無いとしても、本書の刊行も亦意義無しとせぬであらう。

例言

- 一、本類聚は前後二輯に分ち、前輯には 神話篇・童話篇・傳説篇(上)の部を、後輯には 傳説篇(下)の部を収めてある。
- 一、本類聚にはなるべく説話形態を有し、且、主に文學形態をとつて記載せられてある諸種の國民傳承中から、典型的なものを編輯類別した。
- 一、編輯した各説話は必ずしもその原形乃至本據を示すのを唯一の目標としたものではないが、なるべく國民傳説としての完型を保持するもので、而も最も古い文獻に現れた形に於て採録するを原則とした。所収文獻中には、戸隠山繪卷の如き未刊のものや、赤本の「舌切れ雀」「猿蟹合戦」「桃太郎」等、本類聚によつて初めて活字となつたものもある。
- 一、同一説話の異傳或は轉化で略同等の價值を有するものや、或は先後の俄に斷じ難いもの、又

は原話として意義深いもの等で、重要なものは特に題名を興へて准獨立項目とし〔「舌切雀」
「粟津冠者」の如きその例である〕、然らざるものは同じ名目下にⅠ・Ⅱ・Ⅲ等として對立的
に並出し、又その程度以下の類話や派生話或は本據說話として注意すべきもの等は〔附〕（二）
一種以上の場合には〔附イ〕〔附ロ〕等〕として掲げた。

一、記紀・風土記・萬葉集その他これらに准ずるものは便宜假字交り文に書き改めた。

一、一般讀者の理解と興味とに資せんが爲に、各說話の本文には平明を旨とした略註を施し、又
毎項簡単な解説を添へることにした。

一、各項紙面の餘白は、その項に關係した興味ある諸種の記録や文學等の拔萃を以て埋めてみた。
一面、本文及び解説を補ふ助けともなると思つたからである。

國民傳説類聚（前輯） 目次

神話篇

蛭 兒	一
解 說	二
千五百産屋	五
解 說	七
三柱の貴御子	九
解 說	二
目 次	一

保食神

解説

三

天岩戸

解説

一六

肥河上(大蛇退治)

解説

一九

内はほらく

解説

二〇

少彦名附久延毘古

解説

二七

雉の頓使

解説

二四

猿田彦

解説

三六

満珠・干珠(海幸山幸)

解説

四三

豊玉姫

解説

五〇

三勾の麻

解説

五四

霞壯夫と下氷壯夫

解説

五九

一言主

解説

六二

目次

童話篇

因幡の白兔…………… 六五
 解 説…………… 六五
 猿の生肝…………… 六九
 解 説…………… 六九
 鼠の嫁入…………… 七三
 解 説…………… 七三
 瘤 取…………… 七五
 解 説…………… 七五
 腰折れ雀附舌切雀…………… 七八
 解 説…………… 七八

福富長者…………… 九四
 解 説…………… 九四
 花 咲 爺…………… 一〇一
 解 説…………… 一〇一
 鉢 か づ き…………… 一〇八
 解 説…………… 一〇八
 一 寸 法 師…………… 一三六
 解 説…………… 一三六
 物 ぐ さ 太 郎…………… 一四二
 解 説…………… 一四二
 松 山 鏡…………… 一六〇
 解 説…………… 一六〇
 目 次…………… 五

かちく山	解 説	一六五
猿蟹合戦	解 説	一六八
桃太郎	解 説	一七〇
金太郎	解 説	一七三
文福茶釜	解 説	一七五
粘 桶	解 説	一八〇
	解 説	一八二
	解 説	一八九
	解 説	一九二
	解 説	二〇〇
	解 説	二〇一
	解 説	二〇二

傳説篇 (上)

英雄譚

猿神退治	解 説	二〇五
鬼神退治	解 説	二一〇
(一) 鈴鹿御前	解 説	二二二
(二) 酒頭童子(大江山傳説) 附土蜘蛛	解 説	二二三
(三) 茨 木(羅生門傳説・辰橋傳説)	解 説	二三五
	解 説	二五六
	解 説	二六四

目次

(四) 紅葉狩(戶隱傳說).....二六七

解 說.....二六七

怪物退治

(一) 依藤太(三上山傳說)附粟津冠者.....二八九

解 說.....二八九

(二) 鶴退治.....二九七

解 說.....二九七

怪賊說話

(一) 鬼同丸.....三〇四

解 說.....三〇四

(二) 袴垂.....三〇八

解 說.....三〇八

(三) 熊坂長範.....三一一

解 說.....三一一

力競說話

(一) 草摺引.....三三三

解 說.....三三三

(二) 鍛引.....三三四

解 說.....三三四

(三) 朝夷門破.....三三七

解 說.....三三七

英雄出生

(一) 鬼若丸附保昌生立.....三四二

解 說.....三四二

(三) 日吉丸 三四八
解 說 三四九

巡島説話

(一) 爲朝島巡り 三五二
解 說 三五六

(二) 朝夷島巡り 三五七
解 說 三六一

(三) 義經島巡り 三六三
解 說 三七八

義經傳説

(一) 大天狗僧正坊(鞍馬天狗傳説) 三六〇
解 說 三六三

(三) 虎の巻(鬼一法眼傳説) 三六五
解 說 四〇一

(三) 五條橋(橋辨慶傳説) 四〇一
解 說 四一〇

(四) 八艘飛 四一一
解 說 四一三

(五) 勸進帳(安宅傳説) 四一五
解 說 四二一

(六) 衣川(辨慶立往生傳説) 四三三
解 說 四三五

(七) 義經大明神 四三六
解 說 四四四

曾我傳説

(一) 由比ヶ濱……………四四六
 解説……………四四九

(二) 對面……………四五二
 解説……………四五九

(三) 十番斬……………四六〇
 解説……………四六五

美女丸(仲光傳説)……………四六六
 解説……………四七六

大島の一箭……………四八〇
 解説……………四八二

箆の梅……………四八四
 解説……………四八七

青葉の笛……………四八九
 解説……………四九三

ひくり退治(百合若傳説)……………四九五
 解説……………五〇〇

鉢の木……………五〇三
 解説……………五〇七

稻村ヶ崎……………五三三
 解説……………五三五

圖版目次

怪童丸	(錦繪) (口繪原色版)	二〇—三
紫金銅分福茶釜	(實物寫眞、茂林寺藏) (口繪)	九二—九三
大江山入	(香取本大江山繪卷、松浦伯爵家藏) (口繪)	二六二—二六三
橋辨慶と草摺引	(嚴島神社繪馬額) (口繪)	二八二—二八三
稻田姫と八岐大蛇	(伊吹童子繪卷所收)	二八二—二八三
雛豆本「桃太郎」と「舌切雀」	(實大圖)	二八二—二八三
山蜘蛛退治	(土蜘蛛雙紙、帝室博物館藏)	二八二—二八三
戸隱山惡鬼退治と凱陣	(戸隱山繪卷、戸隱神社藏)	二八二—二八三
ユリシイズの航海	(ターナー畫、ロンドン國立美術館藏)	五〇〇—五〇一

口繪「橋辨慶と草摺引」説明

「橋辨慶」の圖は嚴島神社内陣の繪馬額（豎三尺餘、横三尺五寸）で、天文二十一年壬子三月吉日、法眼元信筆 といふ。この額については頗る面白い藝術傳説があつて、

この繪馬よく世に人知るところにして甚だ不思議なり。元祿己前折々夜更けて戦ひの音して神前騒がしく、翌朝これを見れば、太刀長刀の綵色損じて、神前にちゝぐることも度々也。社司驚きて牛若・辨慶の中を隔て、餘の額を掲ぐ。それより事止みぬとぞ。是元信の筆妙感ずるに餘ありといひ傳へたり。

と嚴島繪馬鑿に見えてゐる。右の文中の「餘の額」といふのが又「草摺引」の圖の方（豎二尺五寸、横三尺餘）で、これも同書に「牛若・辨慶の間に掲ぐ」又「元祿八乙亥極月吉日細工木額、作者不知」と見える。國民傳説中の大立物義經物と曾我物とが三つ組みになつてゐるのも、偶然とはいへ、興味深いものがある。

挿圖目次

蛭 子（狂言面）……………二

西宮神社表大門……………三

稲田姫命木彫像（出雲大社藏）……………三

大國主神と鼠（小堀鞆音氏筆）……………二五

大黒天像（攝津甲山藏）……………二六

兒童劇「すくなびこな」……………三

出雲因佐濱……………三

猿田彦大神碑……………四

鶉葦草の産殿（吉川靈華氏筆）……………五

挿圖目次

二

三輪山……………五

白兔神社……………六

赤本「猿のいきぎも」(表紙)……………七

「宇治拾遺物語」板本挿繪……………八

赤本「したきれ雀」(表紙)……………八

同 (本文)……………八

「福富草子」繪卷……………九

赤本「枯木に花咲かせ親爺」(本文)……………一〇

鉢かづき姫(中村岳陵氏筆)……………一三

御伽草子「一寸法師」板本挿繪……………一七

同 「物ぐさ太郎」板本挿繪……………一四

赤小本「兎の手柄」(表紙)……………一六

同 (本文)……………一七

「黙太平記」挿繪……………一六

赤本「さるかに合戦」(本文)……………一七

桃太郎誕生地……………一七

山 姥(能面)……………一八

館林茂林寺……………一九

赤本「ぶんぶくちやがま」(表紙)……………一九

傳坂上田村曆所用「壺笠」(鞍馬寺藏)……………二〇

大江山千丈ヶ嶽……………二〇

土蜘蛛(謡)……………二四

「茨木」の鬼(新古演劇十種の内)……………二五

戸隠神社奥社……………二五

三上山……………二九

三井寺の鐘……………二九

挿 圖 目 次

鶴(能).....	二九八
熊坂長範(能樂圖繪).....	三二五
草摺引(元祿歌舞伎「兵根元曾我」).....	三七七
矢の根五郎(鳥居清元畫).....	三三〇
朝比奈と閻魔(「續狂言記」挿繪).....	三三八
板額門破(「歌舞伎年代記」所載).....	三三九
辨慶上使(文樂操芝居).....	三四三
豊公誕生井戸.....	三四九
「椿説弓張月」口繪.....	三五四・三五五
御伽草子「御曹子島渡り」板本挿繪.....	三六七
義經兵法場.....	三六一
鞍馬山奥の院大杉.....	三六三
「判官都話」板本挿繪.....	三九七

「義經記」板本挿繪.....	四〇七
九代目團十郎の「勸進帳」の辨慶(芝居繪看板).....	四二
安宅關址.....	四五
黄表紙「義經一代記」挿繪.....	四三四
「義經蝦夷勳功記」挿繪.....	四四〇・四四一
古淨瑠璃「切兼曾我」板本挿繪.....	四四八・四四九
一萬丸不動明王願文(下曾我村城前寺藏).....	四五五
歌舞伎「對面」の祐經の衣裳.....	四五二
曾我兄弟と虎御前の木像(下曾我村城前寺藏).....	四六一
源頼朝富士卷狩用陣太鼓(鎌倉建長寺藏).....	四六三
舞の本「滿仲」板本挿繪.....	四六九
一の谷敦盛塚.....	四九〇
青葉笛と敦盛の鎧(須磨寺寶物).....	四九一

若木櫻の制札と敦盛の和歌(須磨寺藏).....	四九三
舞の本「百合若大臣」板本挿繪.....	五二七
ユリシイズ像.....	五二二
「鉢の木」の常世(能).....	五二七
北條時頼自作木像(鎌倉建長寺藏 國寶).....	五二九

木曾街道六十九次之内

望 月 怪童丸

一勇齋國芳畫

——一八二頁「金太郎」參照——

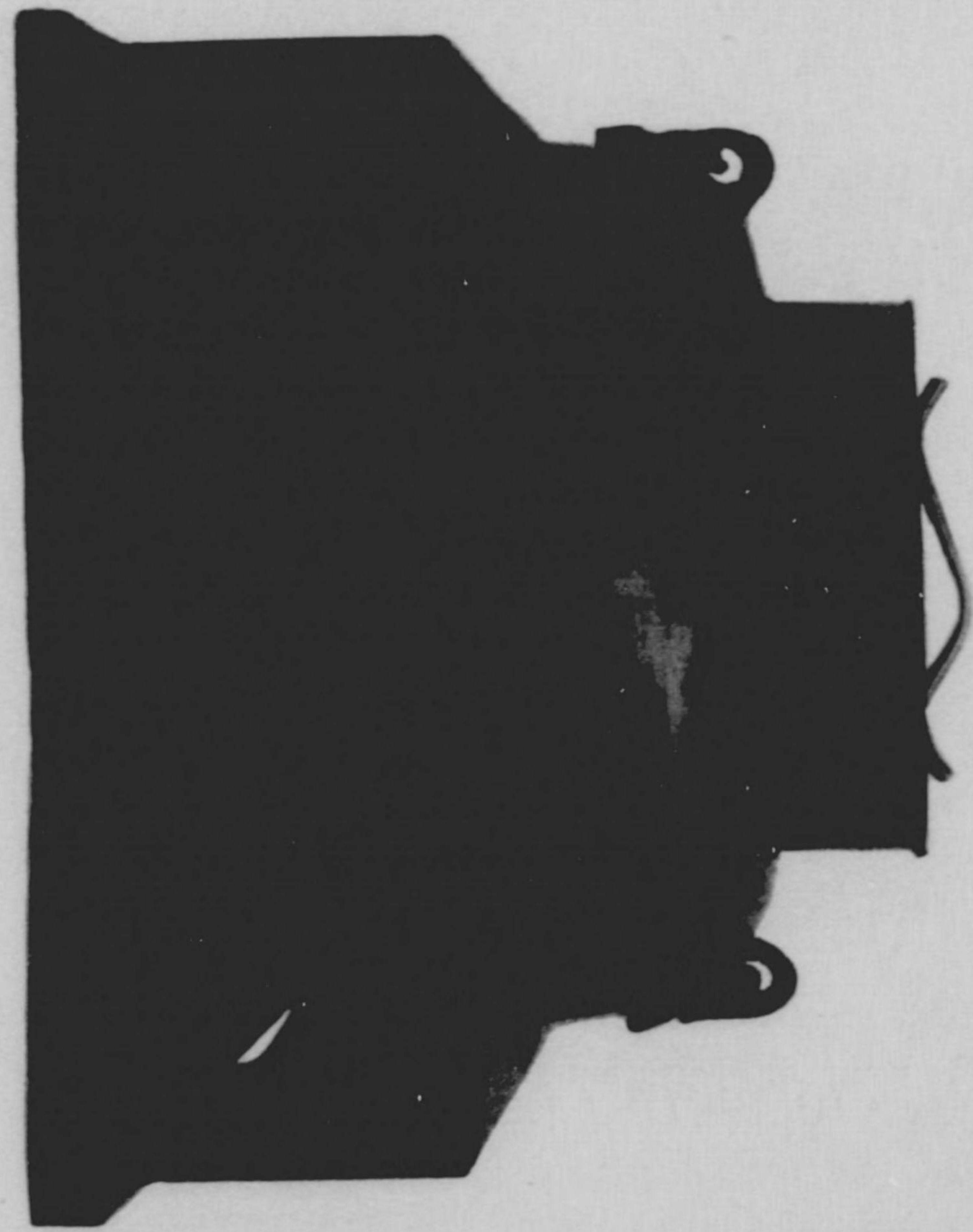


若木櫻の御札と敦盛の和歌(須磨寺藏).....	四九三
舞の本「百合若大臣」板木挿繪.....	五二七
ユリシイズ像.....	五二二
「鉢の木」の常世(舞).....	五七
北條時頼自作木像(鎌倉建長寺藏 國寶).....	五九
——一八二頁「金太浪」参照——	
望 月 狩童 火.....	
——一頁「源園」芝畫	
木曾御産六十式夫之内	

紫金銅分福茶釜

青龍山茂林寺藏

——一九二頁「文福茶釜」參照——



——式二頁「文圖茶釜」參照——

青龍山茲林寺藏
紫金贖食圃茶釜

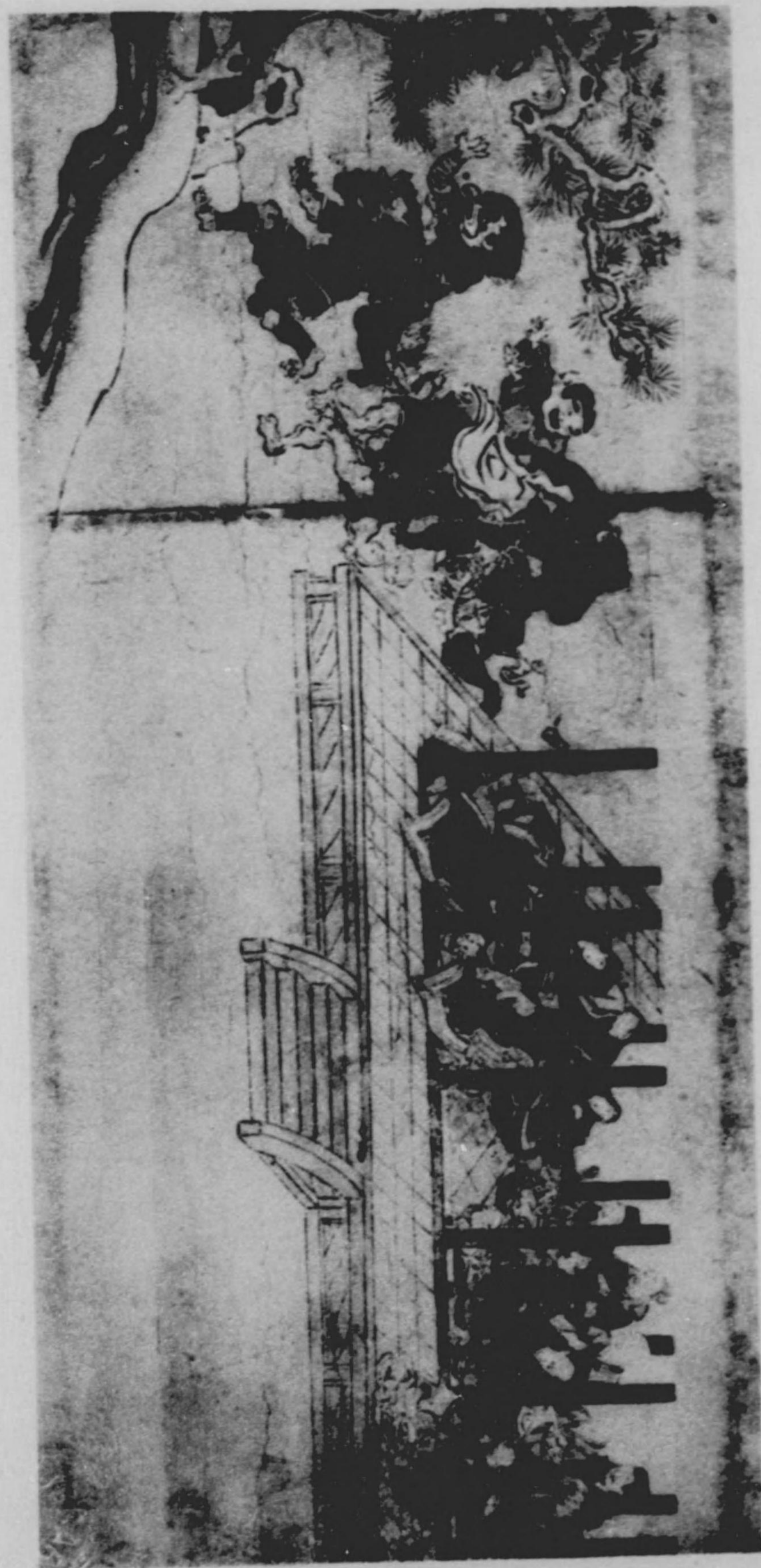
大江山入

大江山繪卷（香取神社大宮司舊藏、現松浦伯爵家藏、南

北朝頃のもの）の一部で、美女に化した鬼共が頼光に正

體を香破せられて逃げ失せる圖。

——二五三頁「酒類童子」解説参照——



—二五三頁「所願童子」種如参照—

錦さ香如から非了遊り天せる圖。

非時肥のよのの「流」が、美文の非了東共は陳次の五

大正山儲管「香見卿」大宮田著、異外前出霜志、南

大正山人

橋辨慶と草摺引

嚴島神社繪馬額

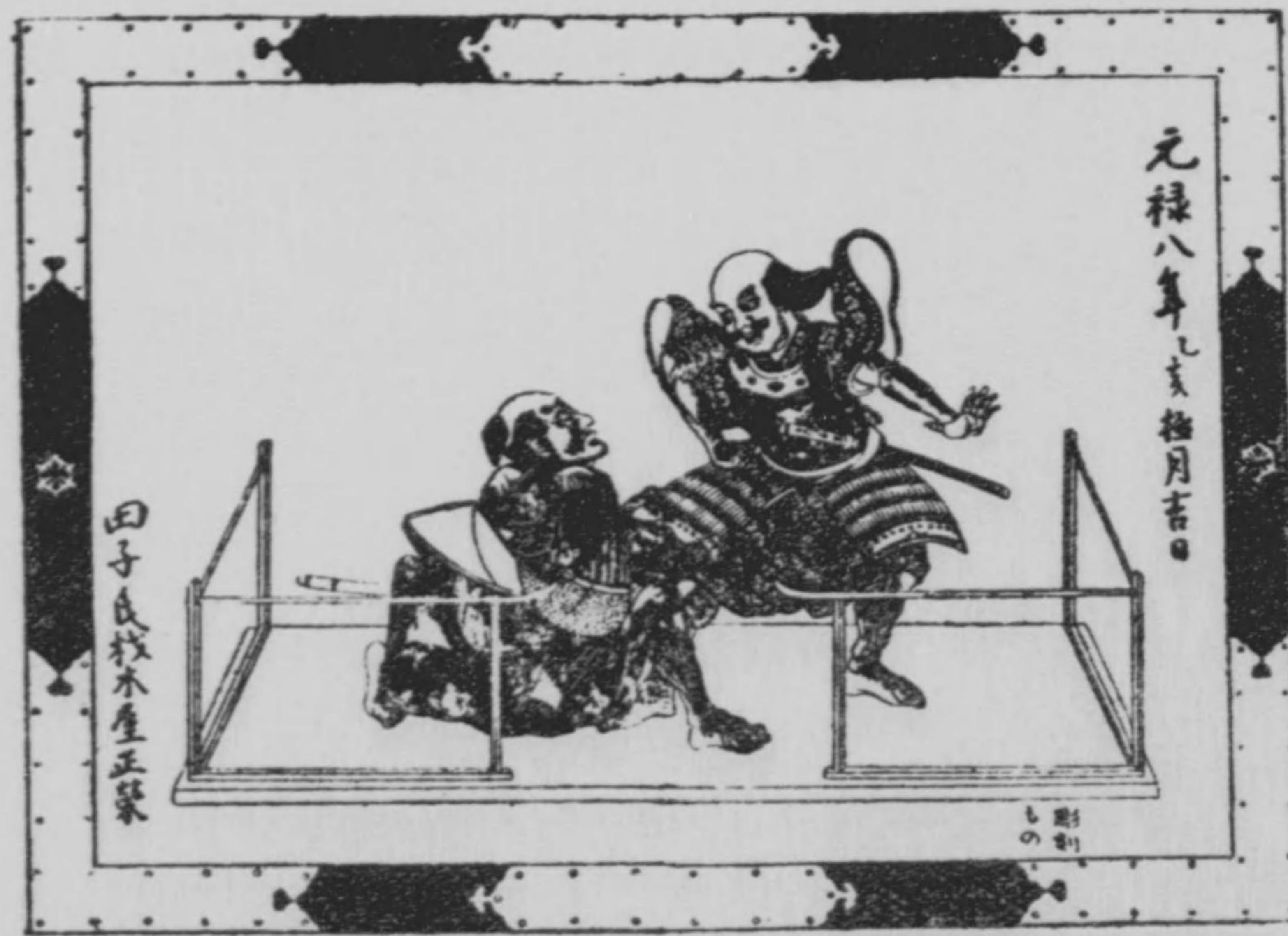
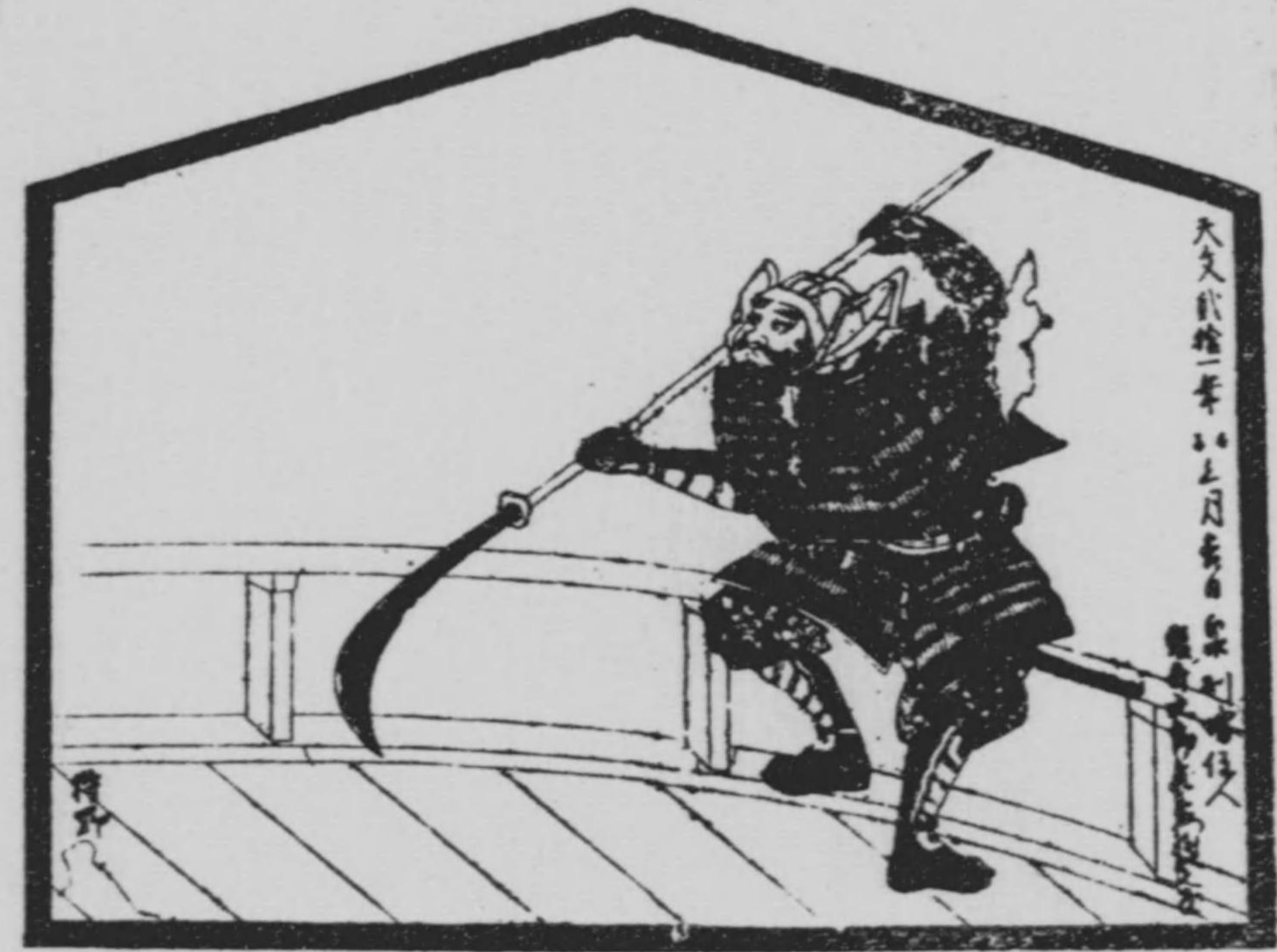
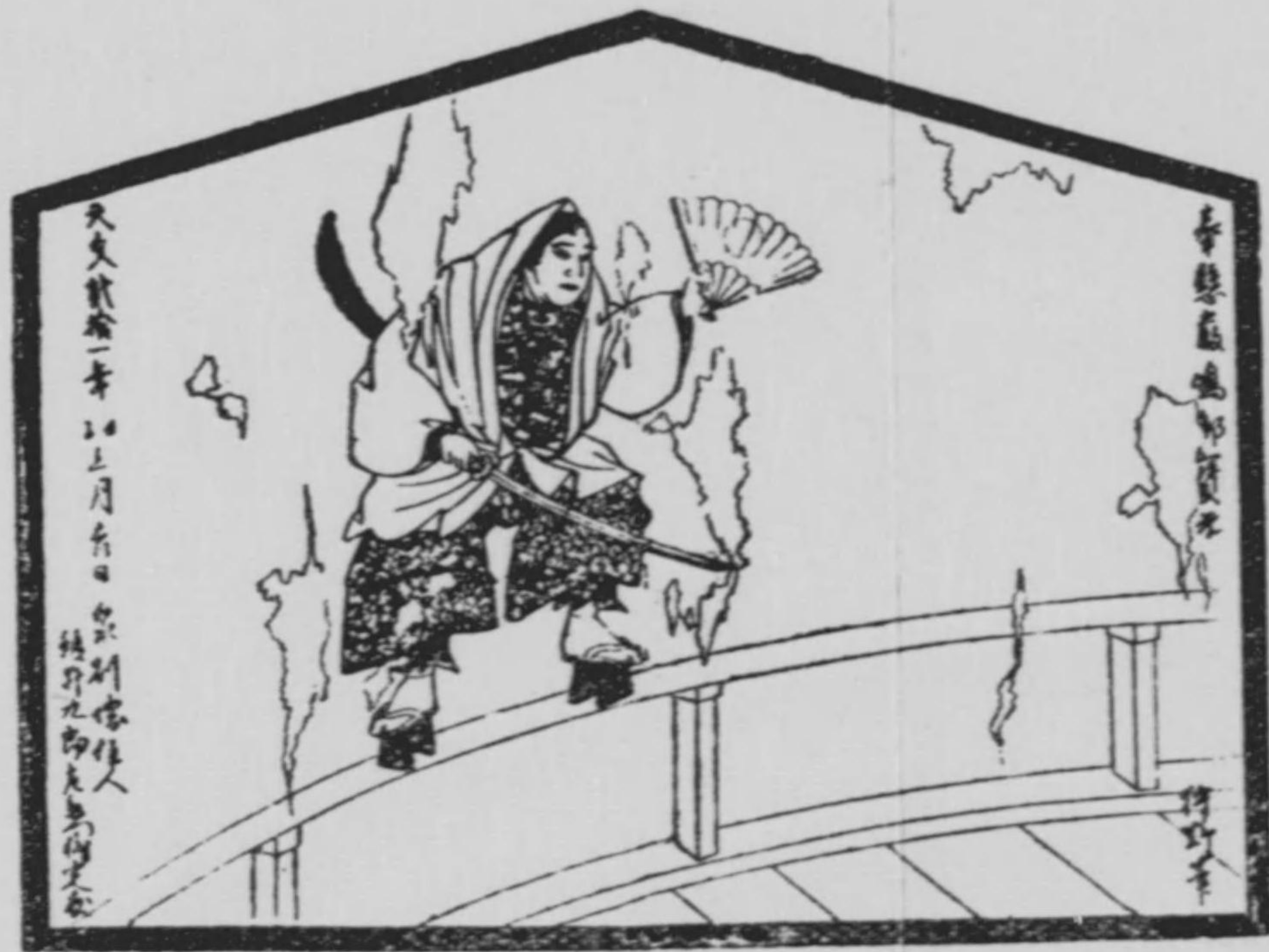
(圖版目次裏面)
「橋辨慶と草摺引」説明參看

—四〇二頁「五條橋」及び三二三頁「草摺引」參照—



又次歌繪一冊
 以上月台日
 宗利傳人
 繪師九郎左衛門

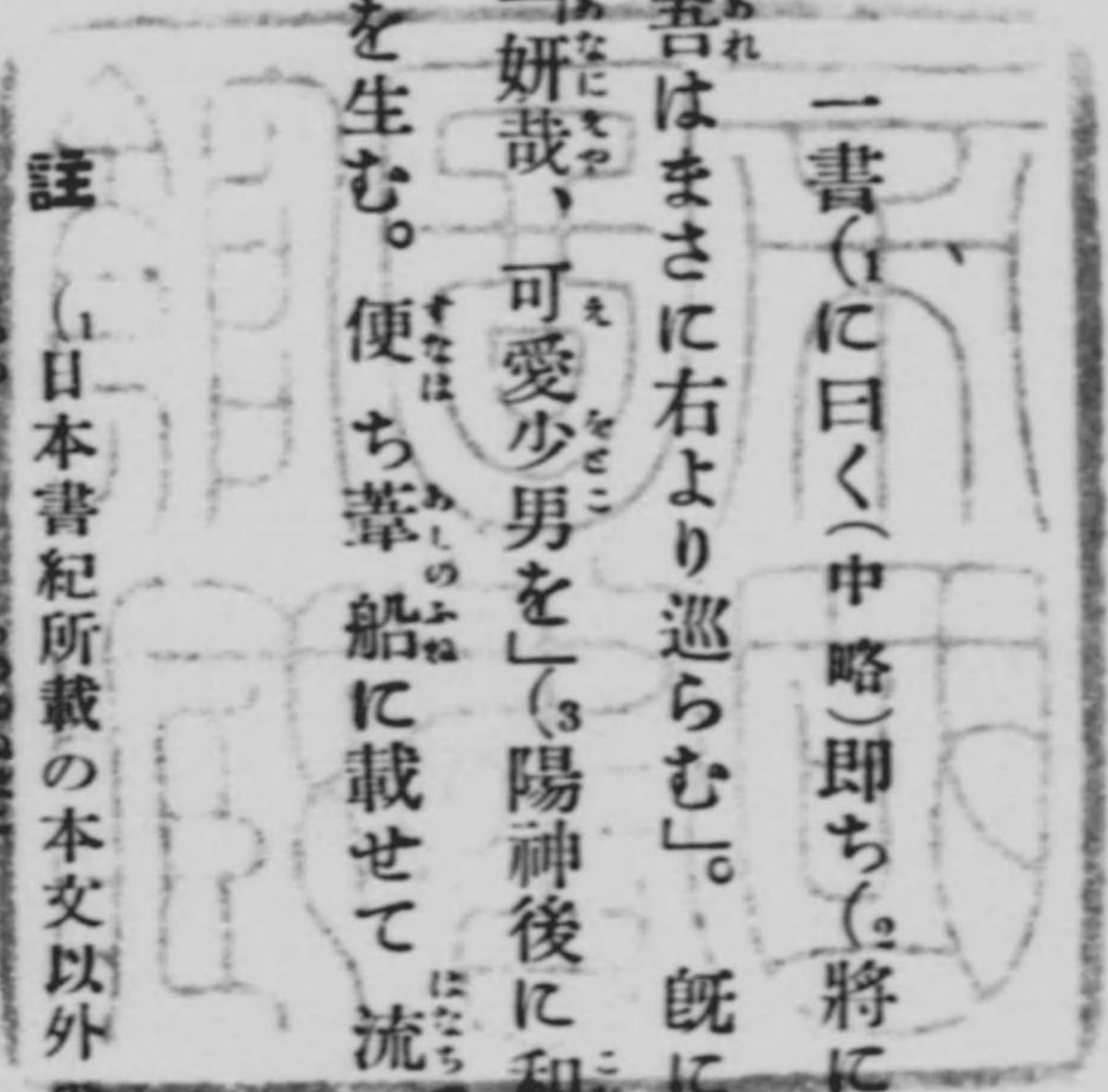
四〇二頁「玉翁翁」又乃三三三頁「草置氏」參照
 雜品轉錄書目
 謝書要之草置氏
 謝書要之草置氏
 謝書要之日夫裏面



神
話
篇

蛭ハル 兒こ

一書（一）に曰く（中略）即ち（二）將まさに天あめ柱はしらを巡らむとして、約束りて曰く、「妹は左より巡れ、吾はまさに右より巡らむ」。既にして分れ巡りて相遇ひたまひぬ。陰神乃ち先づ唱へて曰く、「妍哉、可愛少男を」。陽神後に和へて曰く、「妍哉、可愛少女を」。遂に爲夫婦して、先づ蛭兒を生む。便ち葦船に載せて流りき。次に淡洲を生む。此れ亦以て兒の數に充れず。



註 日本書紀所載の本文以外の別傳の一。（陽神、伊非諾・陰神、伊非冉二神の國土生成の時。即ち天浮橋から天瓊矛を指下して海中を探り、その鋒から滴り落ちて凝成した破馭虛島に降つて、國産みをしようとして、柱を巡り給うたのである。（古事記には「あなにやしえをとこを（美哉好少男）」とある。いづれも「あゝ美しい好い男よ」の意。

（日本書紀卷第一、神代上）

〔附〕

一書に曰く、日月既に生れたまひぬ。次に蛭兒を生みたまふ。この兒年三歳に滿るまで、

蛭 兒



蛭子(狂言面)

註 (*楠木で造られ、鳥の様に軽快な速力を有する船。)

脚尙立たざりき。初め伊弉諾尊、伊弉冉尊、柱を巡りたまひし時、陰神先づ喜ぶ言を發ぐ、既に陰陽の理に違へり。所以、今蛭兒を生む。次に素戔鳴尊を生みたまふ。この神性悪くして常に哭き悲くことを好み、國の民多に死に、青山は枯になりぬ。故れその父母母勅して曰く「假使汝この國を治らば、必ず残ひ傷る所多からまし。故れ汝は極めて遠き根國を馭るべし」とのりたまひき。次に鳥磐櫂樟船(*を生みたまふ。輒ちこの船を以て蛭兒を載せ、順流放ち棄てたまひき。)

(日本書紀卷第一、神代上)

【解説】

日本開闢神話の一節。古事記上卷にも見える。

日本の開闢神話は系圖型 (Genealogical type) 乃至、進化型 (Evolutional type) と呼ばれる種類に屬してゐて、獨化神から漸次對偶神へ、それから萬物國土の生誕へと進んで來てゐる。

そして右の陰陽二神の唱和は、國土生成の協力の希望、及び夫唱婦隨の道德律の主張と共に、藝術の始源をも併せ語つてゐる。畸形兒蛭兒の遺棄は、原始習俗を反映してゐるその一挿話。

一寸法師童話の本據の一部と目する事も許されるであらう

(童話篇、一寸法師参照)。これを詠じた大江朝綱の有名な

かぞいろは如何に哀れと思ふらん

三年になりぬ足立たずして

の歌は和漢朗詠集(卷下、雜、詠史)に出てゐるが、日本紀竟宴歌集所載の原歌は、上の句が「かぞいろは哀れと見すや蛭の子は」となつてゐる。

海中に放たれたと云ふ點と、蛭子の字面の類似聯想からか憐れなこの小神は、何時の間にか七福神の一たる惠比壽にまで進展して、同じく大國主神から轉化した大黒天(神

話篇、内はほら／＼参照)と並稱尊信せられるに至つてゐる。夷三郎の名は源平盛衰記(卷九、康頼熊野詣の條)に既に見え、東鑑(卷四十三、建長五年八月十四日庚申)には三郎大明神と記し、太平



西宮神社表大門(特別保護建造物)

記（卷三十五、自二伊勢一進ニ寶劍一事附黃梁夢事）には「蛭子と申すは今の西宮大明神にて坐す」とある。

四

蛭子「抑々伊邪那岐・伊邪那美尊、天の岩倉にて男女の御かたらひをなされ、日神・

月神・蛭子・素盞鳴尊を設け給ふ。蛭子とは某がことなり。天照太神より三番目

の弟なればとて、西の宮のえびす三郎殿と齋はれ、威光を現す。貧なる者には福を

與へ、富貴に守る事なり。何ぼうゆゑしきえびす三郎殿にてはなきか」

（狂言、蛭子大黒天）

千五百産屋

於是（一）その妹伊邪那美命を相見まく欲して、黄泉國（二）に追ひ往でましき。爾ち殿の騰戸（三）より出で向へます時に、伊邪那岐命語らひたまはく、「愛しき我が那邇妹命（四）吾汝と作れる國未だ作り竟へずあれば、還りまさね」と詔りたまひき。爾に伊邪那美命の答白したまはく、「悔しき哉、速く來まさせて。吾は黄泉戸喫（五）爲つ。然れども愛しき我が那勢命、入り來坐せる事恐れれば、還り欲むを。且く黄泉神と相論はむ。我を莫視たまひそ」如此白して、その殿内に還り入りませる間甚久しくて、待ち難ねたまひき。故れ左の御美豆良（六）に刺させる、湯津津間櫛（七）の男柱（八）一箇取り闕きて、一火燭して入り見ます時に、蛆集れ蓋ぎて（九）、頭には大雷居り、胸には火雷居り、腹には黒雷居り、陰には拆雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足には伏雷居り、并せて八の雷神成り居りき。於是伊邪那岐命見畏みて、逃げ還ります時に、その妹伊邪那美命、「吾に辱見せたまひつ」と

言したまひて、即ち黄泉醜女を遣はして追はしめき。爾、伊邪那岐命黑御鬘を取りて投げ棄てたまひしかば、乃ち(10)蒲生子りき。是を據ひ食む間に逃げ行でますを、猶追ひしかば、亦その右の御美豆良に刺させる湯津津間櫛を引き闕きて、投げ棄てたまひしかば、乃ち笋(11)生子りき。是を抜き食む間に、逃げ行でましき。且後には其の八の雷神に、千五百の黄泉軍を副へて追はしめき。爾ち御佩かせる十拳劍を抜きて、後手にふきつゝ(12)逃げ來ませるを、猶追ひて黄泉比良坂(13)の坂本に到る時に、その坂本なる桃子を三箇取りて、待ち撃ちたまひしかば、悉に逃げ返りき。爾に伊邪那岐命桃子に告りたまはく、「汝吾を助けしが如、葦原中國に所有現しき青人草(14)の、苦瀬に落ちて患惚しまむ時に助けてよ」と告りたまひて、意富加牟豆美命(15)といふ名を賜ひき。

最後にその妹伊邪那美命身自ら追ひ來ましき。爾ち千引石(16)をその黄泉比良坂に引き塞へてその石の中に置いて、各對き立たして、事戸(17)を渡す時に、伊邪那美命言したまはく、「愛しき我が那勢命如此爲たまはば、汝の國の人草一日に千頭絞り殺さむ」とまをしたまひき。爾に伊邪那岐命詔りたまはく、「愛しき吾が那邇妹命、汝然爲たまはば、吾はや一日に千五百産屋立ててむ」とのりたまひき。是を以て一日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人なも生まるゝ。故

れその伊邪那美命を、黄泉津大神と謂す。亦其の追ひ及しによりて、道敷大神とも號すと云へり。亦その黄泉坂に塞れりし石は道反大神とも號し、亦塞坐黄泉戸大神とも謂す。故れその所謂黄泉比良坂は、今、出雲國の伊賦夜坂(18)となも謂ふ。(古事記、上卷)

註 (1)最後に生みませる火の神の爲に身焼かれて終に黄泉國に往かれた女神伊邪那美命(伊弉冉尊)の後を男神伊邪那岐命(伊弉諾尊)が慕うて赴かれたのである。(2)夜見國・根國・根堅洲國と同意。死の國。(3)押上戸。女神が迎へられたのである。(4)汝妹の意。(5)黄泉國の竈で煮た物を食べた意。死の國の不淨な物を口にしたので再び現國即ち現世には歸れないといふ意。(6)角髮。上古男子の髮の結び方。(7)湯津は五百箇の意。津間は齒の密な意。齒の細かく多い櫛。(8)端の大きな齒。(9)女神の御身體に。(10)野葡萄。(11)竹の子。(12)振りつゝ。(13)死の國と現國の境にあると云はれてゐる坂。(14)現世に生存してゐる人民。(15)大神津實の意。(16)紀の一書に「千人所引磐石」とある。(17)紀の一書(18)に引いた同じ文)には「絶妻之誓」。(18)今の出雲國八束郡揖屋村の名に、その名を留めてゐる。

【解説】

書紀神代卷上「一書曰」にも見える。

火の神を産んだ爲に現世を去られた女神の後を追うての黄泉行で、世界大播布説話の一種、冥府行型 (Journey to Hell type) の神話であり、その前段は亦大播布説話の不開室型 (Forbidden Chamber type) —— 豊玉姫神話もそれであり (神話篇、豊玉姫参照)、後に安達ヶ原傳説後輯、高僧譯、法力説話、安達ヶ原参照) にも含まれてゐる。タブーの原始信仰から來てゐるものである——で、後段は普通勇者求婚型説話の末段に含まれる、同じく大播布説話の逃走説話 (Flight from Witchcraft type) の完全な形式を採つてゐる。桃の實の妖邪を拂ふ信仰は、根本は支那思想であらうが、桃太郎童話の發生の萌芽の一部をこゝに見る事が出来る。

本神話は現世と冥界との交通杜絶の緣因に關しての、上古人の民族的且民俗的信仰に依る解釋と言ふべきものであるが、黄泉戸喫の習俗と、千引石を中にしての呪誓とは、いづれも亦重要な意味を示してゐる。前者はエスキモーの神話などにも見出される思想で原始的な信仰であり、又、後者は人口増加の説明と、民族膨張の豫言の形に於て述べられてゐる。

南洋ニユージーランドにも、晝神タネが夜神ヒネを呼び戻しに冥府に赴く一層原始的な形の類話がある (神話傳説大系、インドネシア神話傳説集にも收められてゐる)。

三柱の貴の御子

是を以て (伊邪那岐大神詔りたまはく、「吾はいなしこめしこめき (穢き國に到りて在りけり故れ吾は御身の禊爲な」とのりたまひて、筑紫日向の橋小門の阿波岐原 (に到で坐して、禊祓ひたまひき。(中略)

於是左の御目を洗ひたまひし時に、成りませる神の名は天照大御神。次に右の御目を洗ひたまひし時に、成りませる神の名は月讀命。次に御鼻を洗ひたまひし時に、成りませる神の名は建速須佐之男命。(中略)

この時伊邪那岐命大歡喜ばして詔りたまはく、「吾は子生み生みて、生の終に三はしらの貴の子得たり」とのりたまひて、即ちその御頸珠の玉の緒もゆらに (取りゆらかして、天照大御神に賜ひて詔りたまはく、「汝が命は高天原を知らせ」と事依さし (賜ひき。故れその御頸珠の名を御倉板擧之神と謂す。次に月讀命に詔りたまはく、「汝が命は夜之食國を知らせ」と事依

さしたまひき。次に建速須佐之男命に詔りたまはく、「汝が命は海原を知らせ」と事依さしたまひき。

(古事記、上卷)

註

(1)火の神を産まれた爲崩御せられた女神の後を追うて、黄泉國へ往き歸りまして後のこと、即ち前項(千五百産屋)掲出の記の文に引續く一段。(2)厭醜醜き。厭ふべき醜き意。(3)九州、位置に關しては諸説有つて確證がない。(4)珠のゆらめく状。(5)依託する意。

〔附〕

一書に曰く、伊弉諾尊曰く、吾れ御寓之珍子を生まむとのたまひて、乃ち左の手を以て白銅鏡を持ちたまふとき、則ち化出づる神あり。是を大日靈尊(1)と謂す。右の手に白銅鏡を持ちたまふとき、則ち化出づる神あり。是を月弓尊(2)と謂す。又首を廻らして顧眄之間則ち化出づる神あり。是を素戔嗚尊(3)と謂す。即ち大日靈尊及び月弓尊は、並にこれ質性明麗、故れ天地を照し臨ましめたまひき。素戔嗚尊は是れ性殘ひ害ることを好みたまふ。故れ下して根國を治したまひき。

(日本書紀卷第一、神代上)

註 (1)大日靈尊。天照大御神の亦の御名。(2)月讀尊。

【解説】

三統治神の降誕と分領を語る神話。記の所傳が一層神話的で、且原始習俗と日本民族の清淨を愛する天性とを示してゐる。紀の一書(附)の方はその異傳と見てよく、左右の目の代りに左右の手の鏡を以て日月神の出現を象徴せしめられてゐる。紀の本文は頗る合理的で而も人間の、諾冉の陰陽神が大神・月神・蛭兒・素尊の順に御子を御産みになつた事になつてゐて、神話的の興味は少い。そして火の神の誕生によつて女神の崩れ給ふのは即ち、その後の事になつてゐる。

高天原・夜之食國・海原(紀は根の國)の分領は、天然神話的説明と見る事が出来る。

既にして伊弉諾尊・伊弉冉尊共に議りて曰く、「吾れ已に大八洲國及び山川草木を生めり。何ぞ天下の主たる者を生まざらむや」と。是に共に日神を生みます。大日靈尊と號す。此の子光華明彩、六合の内に照り徹らせり。故れ(一)神喜ばし(二)曰く、「吾が息多なれども、未だかく靈異なる兒はあらず。久しく此の國に留むべきにあらず。自らまさに早く天に送りて、授くるに天上の事を以てすべし」。

(紀、本文)

保食神

一書に曰く、伊弉諾尊三子に勅任して曰く、天照大神は以て高天の原を御すべし。月夜見尊は以て日に配べて天上の事を知すべし。素戔鳴尊は以て滄海之原を御すべし。既にして天照大神天上にまし、て曰く、葦原中國に保食神ありと聞く。宜しく爾月夜見尊就きて候せ。月夜見尊勅を受けて降ります。已にして保食神の許に到りたまふ。保食神乃ち首を廻らして國に嚮ひしかば、則ち口より飯出づ。又海に嚮ひしかば、則ち鰭の廣物、鰭の狹物、亦口より出づ。又山に嚮ひしかば、則ち毛の龜物、毛の柔物、亦口より出づ。夫れ品物悉く備へて、百机に貯へて、饗たてまつる。この時に月夜見尊忿然作色して曰く、穢らはしきかも。鄙しきかも。寧ろ口より吐れる物を以て敢て我れに養ふべけんや」とのたまひて、迺ち劍を抜いて保食神を擊殺したまひき。然して後に復命して、具にその事を言したまふ。時に天照大神怒りますこと甚だしうして曰く、汝はこれ惡しき神なり。相見じ」とのたまひて、乃ち月夜見尊

と一日一夜隔て離れて住みたまふ。

この後に天照大神復た天熊大人を遣して往いて看せたまふ。この時に保食神實に已に死れり。唯しその神の頂に牛馬化爲れり。顛の上に粟生れり。眉の上に鹽生れり。眼の中に稗生れり。腹の中に稻生れり。陰の中に麥及び大豆・小豆生れり。天熊大人悉く取持ち去いて奉進る。時に天照大神喜びて曰く、この物は則ち顯見蒼生⁽⁵⁾の食ひて活くべきものなり」とのたまひて、乃ち粟・稗・麥・豆を以て陸田種子と爲し、稻を以て水田種子と爲す。又因て天邑君⁽⁶⁾を定む。即ちその稻種を以て始めて天狹田及び長田に殖う。その秋の垂顛、八握に莫莫然甚だ快し。又口の裏に鹽を含み、便ち絲を抽くことを得たり。此より始めて養蠶の道あり。

(日本書紀卷第一、神代上)

註 (1)食物を掌る神。(2)大小種々の魚肉。(3)大小種々の獸肉。(4)山海の種々の食物を臺の上に雜ぜ供へる。(5)現世に在る人民。(6)田畑を耕す百姓の長。

〔附〕

又食物を大氣津比賣神⁽¹⁾に乞ひたまひき。爾に大氣都比賣、鼻口及尻より、種種の味物⁽²⁾を取出でて、種種作具⁽³⁾へて進る時に、速須佐之男命、その態を立伺ひて、穢汚奉るとおもほ

して、乃ちその大宜津比賣神を殺したまひき。故れ殺さえたまへる神の身に生れる物は、頭に蠶生り、二つの目に稻種生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麥生り、尻に大豆生りき。故れ是に神産巢日御祖命(茲を取らしめて、種と成したまひき。)(古事記、上卷)

註 (1)食物を掌る神。(2)美味の食物。(3)天地の初に際し、高天原に出現せられた造化三神の一。即ち三神とは、天中主神・高御産巢日神(高皇産靈神)・神産巢日神(神皇産靈神)で、いづれも獨化神。

【解説】

世界大播布説話の一種、檠古神話即ち巨人屍體化生説話に屬する天然神話。その本源は印度にありと云はれ、吠陀にも見える天地開闢神話で、特に支那では檠古氏の話として有名で、五運歴年記・述異記・三五曆記等に載せ、その死屍の兩眼は日月、四肢五體は四柱五嶽、毛髮は草木と成つたなどと傳へてゐる。我が開闢神話としても、幸若舞曲(日本記)に語る所のものは全然是で、記紀神話と異なつてゐる。恐らく中世頃にこの外來神話の移入を見たものであらう。

保食神の場合は開闢神話ではないが、穀類家畜等の始源を説いてゐ、又前段の體中各部から

食物を吐出すのも結局同一説話の變形で、何れにせよ檠古神話の轉化たるを否み難い。

又、この神は宇迦之御魂神(倉稻魂神)・豐受太神宮。俗には稻荷大明神)と同神と考へられたりしてゐるのは、五穀神といふ點からである。

記(附)の方は月讀尊でなくて素盞鳴尊、又保食神でなくて大氣津比賣であるが、同一神話の異傳たる事云ふまでもない。

又紀で天照大神が怒つて月讀尊と別居せられるのは、日月交替の現象を説明する天然神話と見る事が出来る。

さればにや乃ち、その空劫の以前には、天地開け始めず、今成劫の時を得、御子出現の身を分け、頭を須彌となし、髮鬚を本草とし、眼を日月とし、出で入る息を風とし、四つの肢を四州といふ。骨は金、涙は水、肉を土となし、青き色を東、赤きを南、白きを西、黒きを北と號けて、黄なる色を中央とするなり。中を土に司つて甘き味出で来る。北には黒き水あつて、鹹き味はひをなすとかや。西には白き金ありて、辛き味をなせり。南には赤き火を生じて、苦き味をなすとかや。東に青き木を生じて、酸き味をなせり。(舞曲、日本記)

天 岩 戸

故れ於是(1)天照大御神見畏みて、天石屋戸(2)を閉て、刺籠り坐しましき。爾ち高天原皆暗く、葦原中國悉に闇し。此に因りて常夜往く(3)。於是萬づの神の聲は狭蠅なす(4)皆満き萬づの妖悉に發りき。

是を以て八百萬の神天安之河原に集ひて、高御産巢日神(5)の子思兼神(6)に思はしめて、常世の長鳴鳥(7)を集へて鳴かして、天安河の河上の天堅石(8)を取り、天金山の鐵を取りて、鍛人(9)天津麻羅を求きて、伊斯許理度賣命(10)に科せて鏡を作らしめ、玉祖命(11)に科せて、八尺勾瓏の五百津の御須麻流(12)の珠を作らしめて、天兒屋命(13)布刀玉命(14)を召びて、天香山の眞男鹿の肩を内抜きに抜きて(15)天香山の天波波迦(16)を取りて、占合へまかなはしめ(17)て、天香山の五百津眞賢木を根こじにこじ(18)て、上枝に八尺勾瓏の五百津の御須麻流の玉を取り着け、中枝に八尺鏡を取り繫け、下枝に白丹寸手・青丹寸手(19)を取り垂て、この種種の物は、布刀

玉命太御幣(20)と取り持たして、天兒屋命太祝詞禱ぎ(21)白して、天手力男神戸の掖に隠り立たして、天宇受賣命(22)天香山の天之日影(23)を手次(24)に繫けて、天之眞拆(25)を鬘と爲て、天香山の小竹葉を手草に結ひて(26)、天之石屋戸に汗氣伏せて(27)、踏み轟こし、神懸して(28)胸乳を掛き出で裳緒を番登(29)に忍し垂れき。爾高天原動りて、八百萬の神共に啖ひき。

於是天照大神怪しと以爲ほして、天石屋戸を細めに開きて、内より告りたまへるは、「吾が隠り坐すに因りて、天原自ら闇く、葦原中國も皆闇けむと以爲ふを、何由以天宇受賣は樂し、亦八百萬神諸啖ふぞ」とのりたまひき。爾ち天宇受賣、「汝が命に益さりて貴き神坐すが故に、歡喜び啖樂ぐ」と言しき。如此言す間に、天兒屋命・布刀玉命其の鏡を指し出でて、天照大御神に示せ奉る時に、天照大御神逾奇しと思ほして、稍戸より出でて臨み坐す時に、其の隠り立てる天手力男神、その御手を取りて引き出しまつりき。即ち布刀玉命尻久米繩(30)をその御後方に控き度して、「此より内にな還り入りまし」と白言しき。故れ天照大御神出で坐せる時に、高天原も葦原中國も自ら照り明りき。

於是八百萬の神共に議りて、速須佐之男命に千位置戸(31)を負せ、亦鬘と手足の爪とを切り被へしめて、神やらひやらひ(32)き。

(古事記、上卷)

註 (1)素尊が己が御心の清明を示す爲の、御姉神天照大神との誓約に勝つたとして、それに乘じての暴行に。(2)岩戸、窟戸。(3)長い夜が續いた。(4)書紀神代卷下に「五月蠅」と見える。惡神が五月頃の蠅のやうに煩く騒ぎはじめたのをいふ。(5)造化三神の一。前項、保食神「附」の註(3)を見よ。(6)數多の人の思慮を兼ね具へた意。即ち智謀に富んだ意味の名。(7)常闇即ち長夜に曉を告げる爲に長鳴きをする鳥。雞のこと。(8)金床に用ゐる爲である。(9)鍛工。(10)書紀、一書には「石凝姥」。鏡を鑄る石型に囚んだ名。(11)玉造部の祖先。(12)五百津は五百箇。御は美稱、須麻流は統ぶる意で、多くの勾玉を緒で貫き連ねたものこと。(13)中臣氏の祖。(14)書紀には「太玉命」。太玉串を捧げた故の名。忌部氏の祖。(15)内は全。丸抜きにして。(16)朱櫻或は樺の二説がある。(17)占なひ處理する。(18)根こぎにして。(19)書紀に「青和幣・白和幣」。麻を原料として作つた幣帛と穀(楮)を原料として作つた幣帛。(20)太は美稱。(21)祈り願ふ。(22)書紀には「天鈿女命」。媛女君の祖。神話篇、媛田彦參照。(23)日蔭の葛即ち深山に生える蔓草(24)禊。(25)正木葛のこと。(26)手草は手に持つ物。手に持つに適當に束ねて。(27)空筥。空虚な桶。これを伏せて。その上に乗つたのである。書紀には「覆槽置」とある。(28)神が人間に乗り移つた様子。心靈學でいふ憑靈現象である。(29)陰部。(30)書紀に「端出之繩」とある。藁の端をその儘に編み残して置く繩。後の注連繩。(31)千の臺に載せた夥多の贖罪の拔物。(32)追放。

【解説】

日本神話中最も有名な神話。書紀神代卷上にも載せてある。

天然神話的成分も含まれてはゐるが、民族的意義を有する史的事實が中心をなしてゐる。上代祭祀の習俗も明瞭に投影してゐる。特に鈿女命^{ニギハヤヒ}は一面に於て巫女の原始民俗を體現し、他面に於て喜劇的舞踊——さるがう——の始祖をなしてゐ、神樂歌の阿知女^{アチメノメ}作法も爰に由來するとせられてゐる。(鈿女命を主人公とした後世文學には謡曲鈿女がある)

オーストラリア神話中の、地上の水を腹中に吸ひ收めた蛙を、鰻を初め諸動物が滑稽な踊姿によつて笑はせて、水を吐き出させようとする類話(神話傳説大系、オーストラリア神話傳説集には「洪水神話其の一」として收めてある)に比較すると、彼の原始的で童話的なのに對して、我が此の神話は著しく文化的・高級的である。又、彼の結末が洪水によつて全世界が死滅するに對し、我は光明と幸福とに結局するのは、明るさと喜ばしさを好む國民性の反映である。

岩戸出でし光もかくやあら玉の春に明け行く東雲の空

小澤 蘆 庵

肥河上

故れ避追はえて、出雲國の肥河上なる鳥髪とりかみの地に降りましき。この時しも箸その河より流れ下りき。於是須佐之男命、その河上に人有りけりと以爲して、尋覓まぎ上り往いでまししかば、老夫と老女と二人在りて、童女こごめを中に置すえて泣くなり。爾ち「汝等は誰ぞ」と問ひ賜へばその老夫「僕は國神大山津見神の子なり。僕が名は足名椎、妻が名は手名椎、女が名は櫛名田比賣と謂す」と答言す。亦「汝が哭く由は何ぞ」と問ひたまへば「我が女は本より八稚女在りき。是に高志の八俣遠呂智やまとのちなも、年毎に來て喫ふなる。今其來ぬ可き時なるが故に泣く」と答白す。「その形は如何さまにか」と問ひたまへば「彼が目は赤加賀智如して、身一つに頭八つ尾八つ有り。亦その身に蘿及檜相生ひ、その長さ谿八谷峽八尾を度りて、その腹を見れば、悉ことごとくに常血じょうち爛あれたり」と答白す。

爾速須佐之男命その老夫に、「是汝の女ならば、吾に奉らむや」と詔りたまふに、「恐けれど御

稻田姫と八岐大蛇

家藏伊吹童子繪卷(酒頭童子の生立を叙した御伽草子風の繪卷、伊吹山繪卷とは別のも)所收。

——二〇頁「肥河上」參照——

名を覺らず」と答白せば、「吾は天照大御神の同母男なり。故れ今天より降り坐しつ」と答詔へたまひき。爾に足名椎・手名椎神、「然坐さば恐し、立奉らむ」と白しき。爾速須佐之男命乃ちその童女を湯津瓜櫛に取り成し(6)て、御美豆良(7)に刺さして、その足名椎・手名椎に告りたまはく、「汝等八鹽折の酒(8)を醸み、且垣を作り廻し、その垣に八つの門を作り、門毎に八つの佐受岐(9)を結び、その佐受岐毎に酒船を置きて、船毎にその八鹽折の酒を盛りて待ちてよ」とのたまひき。

故れ告りたまへる隨にして、如此設け備へて待つ時に、其の八俣遠呂智信に言ひしが如來つ。乃ち船毎に己が頭を垂入れて、その酒を飲みき。於是飲み酔ひて留まり伏し寝たり。爾ち速須佐之男命その御佩かせる十拳劍を抜きて、その蛇を切り散りたまへば、肥河血に變りて流れき。故れその中の尾を切りたまふ時、御刀の双毀けき。怪しと思ほして、御刀の前以ちて刺し割きて見そなはししかば、都牟刈の大刀(10)在り。故れこの大刀を取らして、異しき物ぞと思ほして天照大御神に白し上げたまひき。是は草那藝の大刀なり。

故れ是を以てその速須佐之男命宮造作るべき地を出雲の國に求ぎたまひき。爾に須賀(11)の地に到り坐して詔りたまはく、「吾此地に來まして、我が御心須賀須賀し(12)」とのりたまひて、其

地になも宮作りて坐しましける。故れ其地をば今に須賀とぞ云ふ。茲の大神初め須賀の宮作らしし時に、其地より雲立ち騰りき。爾御歌作したまふ、その歌は、

やくもたつ出雲八重垣つまごみに(13)八重垣つくるその八重垣を (古事記、上卷)

註 (1)素盞鳴尊天岩戸の變を惹起し給うた罪により追放せられて。(2)肥河は今の斐伊川。船通山(古

名、鳥髮山)に發し宍道湖に入る。(3)尋ね。(4)出雲國神門郡古志郷に住む頭尾とも八つある大蛇。

書紀「八岐大蛇」(5)赤い醗漿の如く。(6)「千五百産屋」の註(7)参照。齒の細かい櫛にする。マジツ

クで姫を櫛に變化させての意。(7)角髮。(8)幾度も繰り返し醸した強い酒。(9)棧敷。(10)ツカリと切れ

る鋭く尖つた劍。(11)出雲國大原郡須我山と傳へる。(12)清々し。(13)夫婦こもる爲に。

【解説】

書紀神代卷上にも出てゐる。所謂八岐大蛇退治神話である。

出雲神話中の最も有名な英雄神話で、素盞鳴尊の人文的功業を語るものであるが、説話の形態から云へば世界大播布説話の一種、怪物退治型英雄譚 (Andromeda type 英雄の怪物退治といふ點だけからは、ヴントの Heraklestypus と呼ぶものと好く一致するが、特殊の型態といふ

側からいへば、アンドロメダ型に屬すると観るべきである。私は大蛇退治型と命名してゐる)

の典型的な形で、生贄モチーフを含む點も、

その生贄の處女との結婚に終末する點も具備し

てゐる。唯末段に草薙劍の由來を説明する寶劍

説話の要素と、三十一字詩形の起原傳説 (古今

集序にも述べられてある。)とを添加してゐる事は

注意すべきである。「清々し」と仰せられたので須賀と呼ぶといふのは地名傳説である。

この神話を題材とした文學には、謡曲に大蛇があり、近松にも日本振袖始があり、近くは武者小路實篤氏の「一日の素盞鳴尊」、坪内逍遙博士の「をろち退治」(家庭用兒童劇)もあるが、一般國民には里神樂の默劇の一場面として最も親しみ深いものの一つとなつてゐる。



田出 命大 木社 彫像 (稻雲)

素盞鳴はお祓箱をしよひ給ひ

神代にもだます工面は酒がいり

内はほらく

(上略) 御祖命(子)に告りたまはく、須佐能男命の坐します根堅洲國(に)参向てよ。必ずその大神謀りたまひなむ」と云りたまふ。故れ詔命の隨に須佐之男命の御所に参到りしかば、その女須勢理毘賣出で見て、目合して相婚ひまして、還り入りてその父に、「甚麗しき神まる來ましつ」と言したまひき。爾その大神出で見て、「こは葦原色許男」と謂ふかみぞ」と告りたまひて即て喚び入れて、その蛇の室に寝しめたまひき。於是その妻須勢理毘賣命、蛇の比禮(を)その夫に授けて云りたまはく、「その蛇咋はむとせば、この比禮を三たび擧りて打ち撥ひたまへ」とのりたまふ。故れ教の如したまひしかば、蛇自ら静まりし故に、平く寝ねて出でたまひき。亦來る日の夜は、吳公と蜂との室に入れたまひしを、且吳公・蜂の比禮を授けて、先の如教へたまひし故に、平くて出でたまひき。亦鳴鏑を大野の中に射入れて、その矢を採らしめたまふ。故れその野に入ります時に、即ち火以てその野を焼き廻らしつ。於是出でむ所を知らざ



小堀 綱音 氏 筆

る間に、鼠來て云ひけるは、「内は富良富良(、外は須夫須夫(」如此言ふ故に、其處を踏みしかば、落ち入りて隠りし間に、火は焼け過ぎぬ。爾にその鼠其の鳴鏑を咋ひ持ち出で來て奉りきその矢の羽はその鼠の子等皆喫ひたりき。於是その妻須世理毘賣は、喪具(を)持ちて哭きつゝ來まし、その父の大神は已に死せぬと思ほして、その野に出で立たせば、爾ち其の矢を持ちて奉る時に、家に率て入りて、八田間(の)大室に喚び入れて、その頭の虱を取らしめたまひき。故れ爾ちその頭を見れば、吳公多かり。於是その妻棕の木實と赤土とをその夫に授けたまふ。故れその木實を咋ひ破り、赤土を含みて唾き出したまへば、その大神、吳公を咋ひ破り

内はほらく

て睡き出すと以爲して、心に愛しく思ほして寝ましき。

爾にその大神の髪を握りて、その室の椽毎に結び着けて、五百引石をその室の戸に取り塞へて、その妻須世理毘賣を負ひて、即ちその大神の生大刀・生弓矢・及その天沼琴を取り持たして、逃げ出でます時に、その天沼琴樹に拂れて地動鳴きき。故れその寝ませる大神聞き驚かして、その室を引き付したまひき。然れども椽に結へる髪を解かす間に、遠く逃げたまひき。故れ爾ち黄泉比良坂(12)まで追ひ至でまして、遙に望けて、大穴牟遲神(13)を呼ばひて曰りたまはく、「その汝が持たる生大刀・生弓矢を以ちて、汝が庶兄弟どもをば、坂の御尾に追ひ伏せ、亦河の瀬に追ひ撥ひて、意禮(14)大國主神と爲り、亦宇都志國玉神と爲りて、その我が女須世理毘賣を嫡妻と爲て、宇迦能山(15)の山本に底津石根に(16)宮柱太しり、高天原に氷椽(17)高しりて居れ、是奴よ」とのりたまひき。故れその大刀・弓を持ちて其の八十神を追ひ避くる時に、坂の御尾毎に追ひ伏せ、河の瀬毎に追ひ撥ひて、國作り(18)始めたまひき。

(古事記、上卷)

註、(1)兄八十神達からの虐待に苦しめられる大國主神を母神が憐んで素盞鳴尊の許へと難を避けしめられるのである。八十神は八上比賣への求婚を拒絶せられ、而も弟の大國主神は白兔の豫言通りに比賣と婚せられたのを妬み怨んで、屢々弟神を殺さうと謀られるに至つたので、この段は即ち因幡

の白兔(童話篇、同項参照)の段の後の話である。(2)御母、刺國若比賣。(3)大國主命。(4)御母伊弉冉神の坐す根の國(黄泉國)で、素尊も其處へ赴かれた。(5)大國主神の亦の御名。(6)蛇を拂ひ除けス呪の領巾。(7)空虚。(8)入口の窄まつてゐること。(9)くはへてゐた。(10)葬送の具。(11)八つ間。大きな室。(12)現世と根の國との境にある坂。神話篇、千五百産屋参照。(13)大國主神の亦の御名。(14)賤しめ呼ぶ第二人称の代名詞。(15)杵築大社の東北に在る出雲御埼山がそれであるといふ。(16)地下の岩石の層まで底深く掘つて。(17)千木。(18)國土經營。

【解説】

書紀には載せてない。

出雲神話の中樞を成す大國主神話の一節で、最も童話的な興味に富む段である。大國主神話中でもこの段の前後を通じて世界大播布説話の一種、末子成功型説話を構成してゐる。この段はその一部である。即ち兄八十神達の迫害を避けての同神の根の國行で、諸神黄泉行の神話(神話篇、千五百産屋参照)と類種のものであるが、此には彼に於て見る逃走説話を缺き、代りに勇者求婚型説話とジャック型(Jack and Beanstalk type)の變種との融合した形を併せ、更に禽

内はほら〜

獸童話の要素を含んで來てゐる。

兎(童話篇、因幡の白兎参照)と鼠とが大國主神の助力者として重要な役割を勤めてゐる事は、大國主神話を著しく童話化してゐると共に、この神が印度神たる大黒天と合體して、七福神の第一位を與へられるに至つた民間信仰に關連して注意すべきものがある。即ち名稱の同音である上に、俗を負



(藏山甲津攝) 像天黒大

うた柔和慈悲の神たる事(童話篇、因幡の白兎参照)が相似た姿の印度食厨神との合體を容易ならしめ、又本神話に於て鼠族は早くもその神使たる位置を約束せしめられてゐる。

巨人素神の髪を室の椽木に結び付けて遁げるのは、南洋ニュージーランド童話のライオンと兎の話と同型である。求婚説話の一部として語られてゐる蛇・吳公・蜂の室の難題説話は中世の天稚彦の童話中にも移傳してゐる(神話篇、雉の頓使参照)。その蛇の比禮・吳公の比禮はマジツクの呪符である。又土中に隠れて火勢の焼け過ぎるのを避ける類話は、臺灣蕃族の烏と穿山

甲の童話にも見出され(穿山甲は穴を掘つて隠れ、烏は焼けて黒くなつた話)、それは穿山甲の習性と烏の羽毛色を説明する動物形態に關する天然傳説である。烏でなくて兎の話とする蕃社もあるが、それは兎が他人眞似の失敗をした寓話的な形になつてゐる。

又、「百足蟲の倉に籠めよ」と云ひて、蟻板に鐵をしてあり。百足蟲と云へば、常にもあらず、一尺餘り許りなるが、四五千許り集ひて、口を開きて食はむとするに目もくるゝ心地しながら、又この袖を振りて、「天稚彦の袖々」と云へば、隅へ集ひて側へも寄らず。七日過ぎて開けて見れば、事なくてあり。又蛇の城に籠めぬ。それも先のまゝにしたれば、蛇一つも寄り來ず。又七日過ぎて見れば、たゞ同じやうにて生きたり。

(御伽草子、天稚彦物語)

少彦名附久延毘古

I

故れ大國主神出雲の御大之御前(1)に坐す時に、波の穂より天之羅摩船(2)に乗りて、鵝(3)の皮を内剝(4)に剝ぎて衣服に爲て、歸り來る神有り。爾その名を問はすれども答へず、且所從の諸神に問はすれども、皆「知らず」と白しき。

爾に多邇具久(5)白言さく、「此は久延毘古(6)ぞ必ず知りたらむ」とまをせば、即ち久延毘古を召して問はす時に、「此は神産巢日神(7)の御子少名毘古那神なり」と答白しき。故れ爾に神産巢日御祖命に白し上げしかば、「此は實に我が子なり。子の中に、我が手候よりくきし(8)子なり。故れ汝葦原色許男命と兄弟と爲りて、その國作り堅めよ」と答告りたまひき。

故れ爾より大穴牟遲と少名毘古那と二柱の神相並ばして、この國作り堅めたまひき。然て後

には、その少名毘古那神は常世國(9)に度りましき。故れその少名毘古那神を顯し白せりし所謂久延毘古は、今に山田の曾富騰(10)といふ者なり。この神は足は行かねども、天下の事を盡に

知れる神になもありける。(古事記・上卷)

註 (1)鳥根郡美保郷。(2)羅摩は葡萄科の蔓草の一種。白薇

その細長い莢を二つに割つて片割を船に造つたのである

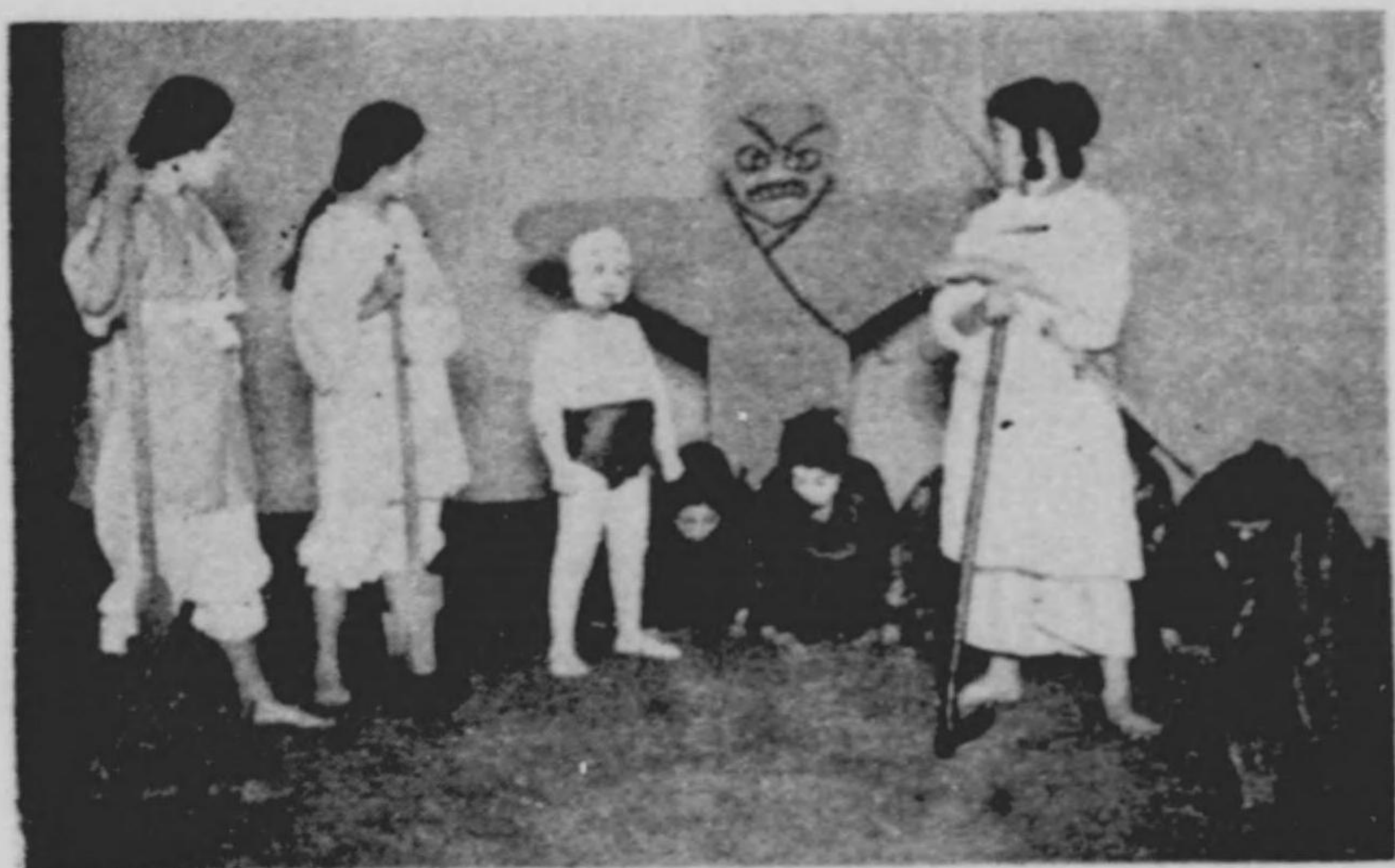
(3)蛾のことかといふ。(4)丸剝ぎにする。(5)谷津。蟻。蝮

(6)案山子のこと。(7)造化三神の一。神話篇、保食神〔附〕

の註(8)を見よ。(9)漏れる意。(10)外國。海外。(11)雨に濡れ

そぼつ意。

II



なこびなくす 劇童兒

初め大己貴神(1)の平國(2)しとときに、出雲國の五十狹狭の小汀(3)に行到まして飲食せんとす。この時に海の上に忽ちに人の聲あり。乃ち驚きて求むるに、都に見ゆる所なし。頃時ありて一箇の小男あり、白薇の皮(4)を以て舟に爲り、鷓鴣の翅

を以て衣と爲し、潮水のまに／＼浮び到る。大己貴神即ち掌中に取り置き、翫びたまひしかば、則ち跳りてその頬を嚙ふ。乃ち其の物色を怪しみて、使を遣して天神にまをす。時に高皇産靈尊(5)聞しめして曰く、「吾が産める兒凡て一千五百座あり。その中に一兒最悪くして、教養に順はず。指間より漏墮(6)ちにしは必ず彼ならむ。宜愛みて養せ」。此れ即ち少名彦命是れなり。
(日本書紀卷第一、神代上)

註 (1)大國主神。なほ、これは「一書曰」の文である。(2)國土治定。(3)因佐濱ともいふ。(4)Iの註(3)を見よ。(5)造化三神の一。記(I)では神皇產靈神になつてゐる。



出雲因佐濱

【解説】

出雲神話の大國主神話の一節。少彦名神は醫療の祖神として尊信せられる神であり、これを文化史的に見れば兩神の國土經營の神話であるが、大と小との對照は神名に依つても示されてゐる如く、巨人と小人との對立及び提携といふ童話的の形

を有してゐる。特に兩神會見のこの場面は最も童話的で、一寸法師童話の本據とも見る事が可能である。紀の一書(II)の方が殊に然うである。

少彦名は一寸法師型乃至親指太郎型の小人で、且神皇產靈神の指間から漏れたといふ事實に於て、指と大きさが比較せられる點が面白い(童話篇、一寸法師参照)。播磨風土記(神前郡)には大國主と少彦名の兩神が荷を擔ふと、尿を堪へるとの滑稽な競争をした神話を載せてある。又書紀神代卷上「一書曰」には少彦名命が粟莖(あはぐら)に上つて彈かれて常世郷(とこよ)に渡つた事を傳へてゐる(神話篇、三勾の麻参照)が、類話は臺灣生蕃の神話中にも見出される。

案山子の人格化は、中世の化物草紙に三輪山型怪婚説話(神話篇、三勾の麻参照)として見出される所であるが、記の神話で早く、透視的な偉力を持つ博識の神として語られてゐるのが興味深い。

この神話に取材したものに、坪内逍遙博士作「すくなびこな」(兒童劇)がある。T.O

大なむち少彦名のいましけむ志都の石室は幾代經ぬらむ

(萬葉集卷三・生石村主真人)

雉の頓使

天照大御神の命以ちて、「豊葦原之千秋長五百秋之水穗國(1)は我が御子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命(2)の知らさむ國」と言因さし賜ひて、天降したまひき。於是天忍穗耳命天浮橋に立して詔りたまはく、「豊葦原之千秋長五百秋之水穗國はいたく擾ぎて有りなり(3)」と告りたまひて、更に還り上らして、天照大御神に請したまひき。爾高御産巢日神(4)天照大御神の命以ちて、天安河の河原に、八百萬の神を神集へに集へて、思金神(5)に思はしめて詔りたまはく、「この葦原中國は我が御子の知らさむ國と言依さし賜へる國なり。故れこの國に道速振る荒振る國神等の多なると以爲すは、是何れの神を使はしてか言趣け(6)まし」とのりたまひき。爾に思金神及八百萬の神議りて、「天菩比神これ遣はしてむ」と白しき。故れ天菩比神を遣はしつれば、乃て大國主神(7)に媚び附きて、三年に至るまで復奏さざりき。是を以て高御産巢日神・天照大御神、亦諸の神等に問ひたまはく、「葦原中國に遣はせる

天菩比神久しく復奏さず。亦何れの神を使はしては吉けむ。爾に思金神答白しけらく、「天津國玉神の子天若日子を遣はしてむ」とまをしき。故れ爾に天之麻迦古弓・天之波波矢(8)を天若日子に賜ひて遣はしき。於是天若日子其の國に降り到きて、即ち大國主神の女下照比賣を娶とし、亦その國を獲むと慮りて、八年に至るまで復奏さざりき。故れ爾に天照大御神・高御産巢日神、亦諸の神等に問ひたまはく、「天若日子久しく復奏さず。又曷れの神を遣はしてか、天若日子が淹留る所由を問はしめむ」とひたまひき。於是諸の神及思金神答白さく、「雉名鳴女を遣はしてむ」とまをす時に詔りたまはく、「汝行きて天若日子に問はむ狀は、「汝を葦原中國に使はせる所以は、その國の荒振る神等を言趣け和せとなり。何八年に至るまで復奏さざる」ととへ」とのりたまひき。

故れ爾に鳴女天より降り到きて、天若日子が門なる湯津楓(9)の上に居て、委曲に天神の詔命の如言りき。爾に天佐具賣(10)この鳥の言ふことを聞きて、天若日子に語げて言はく、「この鳥は鳴く音甚惡し。故れ射殺したまひね」と云ひ進むれば、即ち天若日子天神の賜へる天之波矢(11)を射殺しつ。爾にその矢雉の胸より通りて、逆さまに射上げらえて、天安河の河原に坐します天照大御神・高木神の御所に逮りき。この高木神は高御産巢日

神の別名なり。故れ高木神その矢を取らして見そなはずれば、その矢の羽に血著きたりき。於是高木神、「この矢は天若日子に賜へりし矢ぞかし」と告りたまひて、即ち諸の神等に示せて詔りたまへらくは、「或し天若日子、命を誤へず惡神を射たりし矢の至つるならば、天若日子に中らざれ。或し邪心有らば、天若日子この矢に麻賀禮」と云りたまひて、その矢を取らして、その矢の穴より衝き返し下したまへば、天若日子が胡床に寝たる高胸坂に中りて死せにき。此還矢恐るべしといふ本なり。亦其の雉還らず。故れ今に諺に雉の頓使と曰ふ本是なり。

(古事記、上卷)

註

(1) 日本國の美稱。農業に依り永遠に繁榮する意。(2) 天照大神と素盞鳴尊とが天安河を中にして宇氣比(誓)をなされた時、大神の八尺勾繩に成りませる神。(3) 騒擾してゐて平靜でない。(4) 造化三神の一。神話篇、保食神(附)の註を見よ。(5) 高御産巢日神の子。神話篇、天岩戸及び同註を見よ(歸順させる)。(6) 大國主神の國土經營は前項少彦名の條に見える。(7) 書紀には「天鹿兒弓・天羽々矢」とある。鹿を射る弓、即ち狩獵の弓と、大きく廣い羽を附けた矢。(8) 枝葉の茂つた楓。(9) 天若日子の從婢。書紀には「天探女」。(10) 天楯弓・天鹿兒矢。前に天鹿兒弓・天羽々矢とあると同一物。(11) 禍あれ。呪の語。(12) 仰臥してゐる胸先に。(13) 往つたきり歸らない使の意。

【解説】

天孫降臨に先だつての出雲平定の經過を語る神話の一節。記紀共に載せてある。禽獸童話の分子を含む應報説話で、一面俚諺の由來説話の形を成してゐる。即ち「雉の頓使」は後世の「梨の飛礫」と同義、「還矢恐るべし」も「天に向つて唾す」と略々同義の古代俚諺である。

天若日子の名は、後世では降下の天童の稱呼に用ゐられ、宇津保物語(後藤卷)や狭衣物語(卷一上)に見受けられ、中世の御伽草子天稚彦物語の主人公となつては、七夕の由來譚の童話を形成せしめてゐる。同童話はエロスとプシケ型(Cupid and Psyche type)の神婚説話で、それに大國主神話の影響をも認め得るものである。(神話篇 内はほらく参照)

又この神話の雉は、恐らく桃太郎童話に關係有るべく、天探女(天佐具賣)は民間信仰に於ける天邪鬼——本體は佛法を妨げる邪神で、毘沙門天の踏まへてゐる小鬼であらう——と合體する可能性を示してゐる。

已にして降りまさんとする間に、先駈者還りて白く、「一神あり。天八達之衢に居り、その鼻の長さ七咫、背の長さ七尺餘り、(まさ)に七尋といふべし)且口尻明り耀れり。眼八咫鏡の如くにして、絶然赤酸漿(2)に似たり」即ち從の神を遣はして往いて問はしむ。時に八十萬神あり。皆目勝ちて相問ふことを得ず(3)。故れ特に天鈿女(4)に勅して曰く、「汝は是れ人目勝つ者なり、宜しく往いて問ふべし」。

天鈿女乃ちその胸乳を露に搔き立て、裳帯を臍の下に抑垂れ、笑囃ひて向ひ立つ。この時に衢の神問ひて曰く、「天鈿女、汝かく爲ることは何の故ぞや」對へて曰く、「天照大神の子の幸す道路に、この如くにして居るは誰ぞ。敢て問ふ」衢の神對へて曰く、「天照大神の子今降りすべしと聞きまつる。故れ迎へ奉りて相待つ。吾が名はこれ猿田彦大神」時に天鈿女復た問ひて曰く、「汝將に我に先ちて行かんや。將抑我れ汝に先ちて行かんや」對へて曰く、「吾れ先ちて啓

き行かむ」天鈿女復た問ひて曰く、「汝は何處に到りまさんぞや。皇孫何處に到りまさんぞや」對へて曰く、「天神の子は則ち當に筑紫の日向の高千穂の穗觸の峯に到りますべし。吾は則ち伊勢の狹長田の五十鈴の川上に到るべし」。因て曰く、「我を發顯しつるは汝なり。故れ汝以て我を送りて致るべし」。

天鈿女還りて詣で報狀す。皇孫是に天磐座(5)を脱離ち、天八重雲を排分け、稜威の道別に道別きて(6)天降ります。(日本書紀卷第二、神代下)

註 (1)天孫瓊々杵尊の降臨。なほ、これは「一書曰」の文である。(2)赤いほづき。(3)臆せずして進み問ふことを敢へてする神が無かつた。(4)神話篇、天岩戸參照。(5)高天原の御座所。(6)鋭い勢で道を別け行く。

〔附〕

故れ爾に天宇受賣命に詔りたまはく、「この御前に立ちて仕へ奉りし(1)猿田毘古大神をば、専ら顯し申せる汝、送り奉れ。亦その神の御名は、汝負ひて(2)仕へ奉れ」とのりたまひき。是を以て、猿女君等その猿田毘古の男神の名を負ひて、女を猿女君と呼ぶ事是なり。故れその猿田毘古神、阿邪訶(3)に坐しける時に、漁して比良夫貝にその手を咋ひ合さえ

て、海鹽に沈溺れたまひき。故れその底に沈み居たまふ時の名を底度久御魂と謂し、その海水つぶ立つ(4)時の名を都夫多御魂と謂し、その沫さく(5)時の名を阿和佐久御魂と謂す。

於是猿田毘古神を送りて(6)、還り到りて、乃ち悉に鰭の廣物・鰭の狭物(7)を追ひ聚めて「汝は天神の御子に仕へ奉らむや」と問ふ時に、諸の魚ども皆「仕へ奉らむ」と白す中に、海鼠白さす。爾天宇受賣命海鼠に謂ひけらく、「此の口や答せぬ口」と云ひて、紐小刀以ちてその口を拆きき。故れ今に海鼠の口拆けたり。是を以て御世島の速贄(8)獻る時に、猿女君等に給ふなり。

(古事記、上卷)

註 (1)天孫降臨の御先導をした。(2)猿田彦神の名をこの度の記念として鈿女が譲り受けて。猿女君等は即ち天鈿女命の子孫。(3)伊勢國壹志郡阿坂村にその名を残す。(4)ぶく／＼音を立てる。(5)咲く。美しく泡立つを云つたのである。(6)鈿女命が伊勢まで。(7)大小の魚。(8)志摩國から奉る御饌の料の初物。

【解説】

天孫降臨神話の一挿話。記・紀(一書曰)共に載せてある。

鈿女命の容姿は岩戸神話(神話篇、天岩戸参照)に於けると同然である。この巫女神にして且猿がうの濫觴を爲した面白い女神に對する猿田彦も、トーテムズムから來てゐる動物神——赤面の猿——の進化したものと見るべく(天孫の御先導者たる名譽は、桃太郎童話に於ける鬼ヶ島征伐の御供の一員たる事を暗示してゐるやうに見えて興味がある。又この神話に於けるこの役



猿田彦大神
大彦大神
神(原ヶ西川野瀧下府京東)

目からして、同神が後世道祖神として信仰せられたのは極めて自然である)、更にその異形の鼻は、後世天狗の觀念の具象化に大なる寄與をなしてゐる。この神も田樂等に屢々役割を與へられ、舞踊の發達に亦相當關係が淺くない。この兩男女神の會見が既に喜劇の一場面である。後世の民間信仰に於ても、お多福と天狗とのそれ／＼の完成に少からず交渉がありはせぬかと考へたい點も、面色の赤白と鼻の高低との對比に見て一段と興趣が深い(鈿女の方はその面貌が特記せられてはないが、その想像は可能である)。

記の猿田彦が貝に苦しめられるのは、南洋セレベス島の猿と貝の童話(神話傳説大系にも、イン
ドネシア神話傳説集に「猿とウエリス鳥」の童話として収めてある)と同型で、兩者偶然の一致として
は餘りに酷似し過ぎてゐる。又海鼠の話はその形態に關する天然傳説である。

内大臣實守公の、節會の内辨を勤めさせ給はむとて、威儀正しく繕はせて給うて、
參り給ふ道にて、紀の國より初めて參りける武士共行き逢ひ奉りて、「あな恐ろし、
山伏とも見えず、まして人にはあらず。天狗の類にてあるらむ」と云ひけるを聞か
せ給ひて、

天狗とも云はば云はなむ云はずとて鼻低からぬわが身ならねば
極めて御鼻の高く渡らせ給ひけるを、云ひ當てにけりと、後まで可笑しがらせ給へ
りけり。

(吉野拾遺下卷、鼻の高き狂歌の事)

猿田彦雲の中から鼻を出し

満珠・干珠

故れ火照命(はてるひのみこと)は海佐知毘古(うみさちびこ)と爲て、鰭(はた)の廣物(ひろもの)・鰭(はた)の狭物(せまもの)を取りたまひ、火遠理命(はえりのみこと)は山佐
知(やまさち)と爲て、毛(け)の麤物(こもの)・毛(け)の柔物(なごもの)を取りたまひき。爾(こゝ)に火遠理命(はえりのみこと)その兄(あに)火照命(はてるひのみこと)に、「各(各自)に佐
知(さち)を相易(あひか)へて用(もち)ゐてむ」と謂(い)ひて、三度(さんど)乞(こ)はししかども許(ゆる)さざりき。然(しか)れども遂(つい)に纒(むす)に得相
易(あひか)へたまひき。爾(こゝ)に火遠理命(はえりのみこと)海佐知(うみさち)を以(も)ちて魚釣(いさづ)らすに、都(みやこ)で一魚(ひとつ)も得(と)たまはず。亦(また)その釣(つり)を
さへ海(うみ)に失(な)ひたまひき。於是(こゝ)にその兄(あに)火照命(はてるひのみこと)その釣(つり)を乞(こ)ひて、「山佐知(やまさち)も己(おの)が佐知(さち)々々、海佐知(うみさち)も
己(おの)が佐知(さち)々々、今は各(各自)佐知返(さちかへ)さむ」と謂(い)ふ時に、その弟(いもうと)火遠理命(はえりのみこと)答(こた)へりたまはく、「汝(みま)の釣(つり)は
魚釣(いさづ)りしに一魚(ひとつ)も得(と)ずて、遂(つい)に海(うみ)に失(な)ひてき」とのりたまへども、その兄(あに)強(つよ)ちに乞(こ)ひ徴(たが)りき。
故(ゆゑ)れその弟(いもうと)御佩(みか)の十拳劍(じゅうけんけん)を破(やぶ)りて、五百鈎(いほひかり)を作りて償(つぐな)ひたまへども取(と)らず。亦(また)一千鈎(せんか)を作りて
償(つぐな)ひたまへども受けずて、猶(なほ)其(その)正本(もと)の鈎(かぎ)を得(と)むとぞ云(い)ひける。

於是(こゝ)にその弟(いもうと)海邊(うみべ)に泣(な)き患(うれ)ひて居(ゐ)ます時に、鹽椎神(しほづちのかみ)來(き)て問(と)ひけらく、「何(なに)にぞ虚空津日高(こゝろかづひたか)の

泣き患ひたまふ所以は」ととへば、答へたまはく、「我兄と鉤を易へてその鉤を失ひてき。是てその鉤を乞ふ故に、多の鉤を償ひしかども受けずて、猶その本の鉤を得むと云ふなり。故れ泣き思ふ」とのたまひき。爾に鹽椎神「我汝が命の爲に善き議せむ」と云ひて、即ち無間勝間の小船を造りて、その船に載せまつりて、教へけらく、「我其の船を押し流さば、差暫し往てませ。味御路有らむ。乃ちその道に乗りて往ましなば、魚鱗の如造れる宮室、其綿津見神の宮なり。その神の御門に到りましなば、傍の井の上に湯津香木有らむ。故れその木の上に坐しまさば、その海神の女見て相議らむ者ぞ」とをしへまつりき。

故れ教の隨に少し行でましけるに、備にその言の如くなりしかば、即ちその香木に登りて坐しましき。爾に海神の女豊玉毘賣の從婢、玉器を持ちて水酌まむとする時に、井に光あり。仰ぎて見れば、麗しき壯夫有り。甚異奇しと以爲ひき。爾火遠理命その婢を見たまひて、「水を得しめよ」と乞ひたまふ。婢乃ち水を酌みて、玉器に入れて貢進りき。爾に水をば飲みたまはずして、御頸の瓊を解かして口に含みて、その玉器に唾き入れたまひき。於是その瓊（器に著きて、婢瓊を得離たず。故れ瓊著けながら豊玉毘賣命に進りき。爾その瓊を見て婢に、「若し門の外に人ありや」と問ひたまへば、「我が井の上の香木の上に人坐す。麗甚しき壯夫にます。

我が王にも益さりて甚貴し。故れその人水を乞はせる故に奉りしかば、水をば飲まさずて、この瓊をなも唾き入れたまへる。是得離たぬ故に、入れながら將ち來て獻りぬ」と答白しき。爾豊玉毘賣命奇しと思ほして、出で見て乃ち見感でて、目合して、その父に「吾が門に麗しき人有す」と白したまひき。爾に海神自ら出で見て、「この人は天津日高の御子、虚空津日高にませり」と云ひて、即ち内に率て入れまつりて、美智（の皮の疊八重を敷き、亦繩疊八重をその上に敷きて、その上に坐せまつりて、百取の机代の物を具へて（御饗爲て、即ちその女豊玉毘賣を婚せまつりき。故れ三年といふまでその國に住みたまひき。

於是火遠理命その初の事を思ほして、大きな歎一つしたまひき。故れ豊玉毘賣命その歎を聞かして、その父に白したまはく、「三年住みたまへども恒は歎かすことも無かりしに、今夜大きな歎一つ爲たまひつるは、若し何の由故有るにか」と言したまへば、その父の大神その聲に問ひまつらく、「今日我が女の語を聞けば、三年坐しませども、恒は歎かすこともなかりしに、今夜大きな歎爲たまひつ」と云せり。若し由有りや。亦此間に到ませる由は奈何にぞ」ととひまつりき。爾その大神に、備にその兄の失せにし鉤を罰れる状を語りたまひき。是を以て海神、悉に海之大小魚を召び集へて、「若しこの鉤を取れる魚有りや」と問ひたま

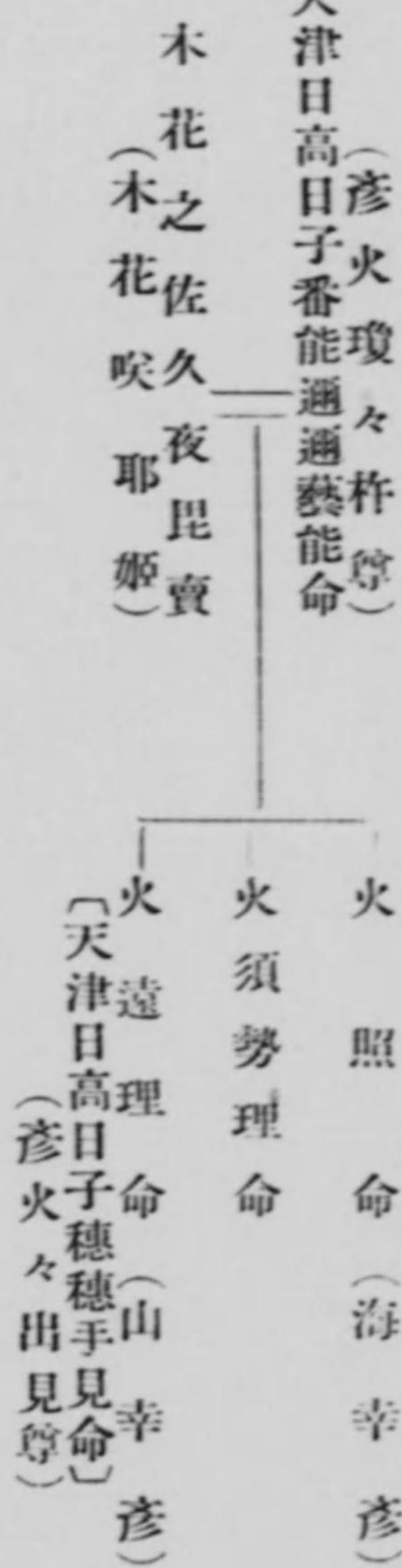
ふ。故れ諸の魚ども白さく、「頃者赤海鯉魚(13)なも喉(14)に鯁(15)ありて、物得食はずと愁ふなれば必ず是れ取りつらむ」とまをしき。於是赤海鯉魚の喉を探りしかば鉤有り。即ち取り出でて清洗して、火遠理命に奉る時に、その綿津見大神誨へまつりけらく、「この鉤をその兄(16)に給はむ時に、言りたまはむ状は、『この鉤は淤煩鉤(15)須々鉤(16)貧鉤(17)宇流鉤(18)』と云ひて後手に賜へ。然してその兄高田を作らば、汝が命は下田を營りたまへ。その兄下田を作らば、汝が命は高田を營りたまへ。然爲たまはば、吾水を掌れば、三年の間必ずその兄貧窮しくなりなむ。若し其然爲たまふ事を恨怨みて攻戦めなば、鹽盈珠を出して溺らし、若し其愁ひ請さば、鹽乾珠を出して活し、如此して惣苦めたまへ」と云して、鹽盈珠・鹽乾珠并せて兩箇を授けまつりて、即ち悉に和邇魚どもを召び集へて問ひたまはく、「今天津日高の御子、虚空津日高、土國に出幸でまさむとす。誰は幾日に送り奉りて覆奏さむ」とひたまひき。故れ各己が身の尋長の隨に日を限りて白す中に、一尋和邇「僕は一日に送りまつりて還り來なむ」と白す。故爾その一尋和邇に、「然らば汝送り奉りてよ。若し海中を渡る時に、な惶畏ませまつりそ」と告りて、即ちその和邇の頸に載せまつりて、送り出しまつりき。故れ期が如、一日の内に送り奉りき。その和邇返りなむとせし時に、佩かせる紐小刀を解かして、その頸に著けてなも返したまひける。

故れその一尋和邇をば、今に佐比持神とぞ謂ふなる。

是を以て備に海神の教へし言の如くして、其の鉤を與へたまひき。故れ爾自以後稍愈貧しくなりて、更に荒き心を起して迫め來。攻めむとする時は、鹽盈珠を出して溺らし、其愁ひ請せば、鹽乾珠を出して救ひ、如此して惣苦めたまふ時に、稽首み白さく(19)、「僕は今より以後、汝が命の夜晝の守護人と爲りてぞ仕へ奉らむ」とまをしき。故れ今に至るまで、その溺れし時の種種の態絶えず仕へ奉るなり。

(古事記、上卷)

註 (彦火瓊杵尊) 天津日高日子番能邇邇能命



(2) 海の獲物を得る人。(3) 大小種々の魚。(4) 大小種々の獸。(5) 漁獵の具。(6) 潮路を掌る航海神。(7) 日の御子の尊稱。(8) 紀には「無目籠」。竹籠に獸皮を張つた上代の小舟。(9) 枝葉の繁つた桂。湯津は五百箇。(10) 「い」は主格を示す助詞。(11) 紀の一書には「海驢」。海馬(アジカ)のこと。(12) 机上に結納の品を山積して獻じたのである。(13) 鯉。(14) 喉に刺さつた魚骨。(15) 以下四語、鉤にかけての呪の詞。淤煩

は鬱氣の晴れぬ意。(16) 奇立つ意。(17) 貧乏の意。(18) 愚鈍の意。(19) 平伏して謝罪する。

【解説】

書紀神代卷下にも載せてある。所謂海幸山幸神話である。

海宮神話で、童話的の興趣にも富み、又浦島傳説(後輯、民俗譚、浦島子参照)の先縦をなしてゐる。兄弟に依つて代表せられる山の狩獵族と海の漁獵族との軋轢で、弟の勝利に終局する型は末子成功説話、且、春と秋との争の神話と同型(神話篇、霞壯夫と下水壯夫参照)。海宮行は一種の仙界淹留説話で、神婚説話的要素を含み、豊玉姫は浦島傳説の展開に伴ひ、所謂龍宮の乙姫にまで進展せしめられた。干満珠は一種の如意寶珠で、海宮の龍神が寶珠を愛藏する思想は佛説にも共通し、印度説話としては名高い大施太子龍宮行の宗教傳説がある。神話時代以後でも、神功皇后が如意珠を海中から獲給うた事(書紀卷八、仲哀紀)や、玉取傳説(後輯、美人譚、玉取附老松若松参照)が有名である。

神話の末段は隼人族の歸伏を暗示し、同時に隼人舞の起原傳説を構成し、岩戸神樂(神話篇、天岩戸参照)と共に舞踊演劇の始源を説明する資料として貴重視せられてゐる。

南洋神話中に本神話と酷似する諸説話を見出すことは頗る注目し得る。即ちケイ島のヒアンとパルパラ兄弟の神話(神話傳説大系、インドネシア神話傳説集には「釣針探し」の神話として收めてある)を初め、パラウ島・スマトラ島・セレベス島等に類話が分布してゐる。相互及び日本神話との關係は興味深い研究題目である。(これら諸説話の内容は、松本信廣氏著「日本神話の研究」中、「豊玉姫傳説の一考察」の項に、詳細な研究と共に掲げられてある。)

本神話に取材した文學は、古く謡曲玉井が有り、近時では山本有三氏の戯曲「海彦山彦」及び坪内逍遙氏の戯曲「人と波」(兒童劇)がある。

延喜集人式ニ、凡踐祚大嘗日、分陣ニ應天門左右一、其群官初テ入トキ發レ吠。愈紀ノ

入ルニ、官人并彈琴、吹笛、擊百子、拍手、歌儺人等、從ニ興禮門ニ參ニ入御座所ノ扉

外一、北向ニ立テ奏ニ風俗歌儺一、主基ノ入亦准レ此。

(歌儺品目卷之一、隼人歌儺)

龍宮は釣師をとかく筈にする

豊玉姫

於是(1)海神の女豊玉毘賣命自ら參出て白したまはく、「妾已くより妊身めるを、今産むべき時に臨りぬ。此を念ふに、天神の御子を海原に生みまつるべきにあらず。故れ參出到つ」とまをしまひき。

爾即ちその海邊の波限(2)に、鶉の羽を茸草に爲て、産殿を造りき。於是その産殿未だ葺き合へぬに、御腹忍へがたくなりたまひければ、産殿に入り坐しき。爾に産みまさむとする時に、その日子(3)に白したまはく、「凡て佗國の人(4)は、産む時に臨れば、本つ國の形になりてなも産生むなる。故れ妾も今本の身になりて産みなむとす。願はくは妾を勿見たまひそ」とまをしまひき。

於是その言を奇しと思ほして、その方(5)に産みたまふを竊伺みたまへば、八尋和邇に化りて匍匐ひ委蛇ひ(6)き。即見驚き畏みて、遁げ退きたまひき。爾に豊玉毘賣命その伺見たまひし事

を知らして、心恥づかしと以爲して、乃ちその御子を生み置きて、「妾恒は海道を通して往來はむとこそ欲ひしを、吾が形を伺見たまひしが甚忤づかしきこと」と白して、即ち海坂(7)を塞ぎ

て返り入りましき。

是を以て、その産れませる御子の名を、天津日高日子波限建鸕草葺不合命と謂す。(古事記、上卷)

註 (1)前項に引き続き神話。(2)渚。(3)夫。即ち彦火火出見尊。(4)他國人。(5)眞盛。眞最中。(6)うねりまはる。のたくる。(7)海境。

〔附〕

一に云く、(中略)是より先に豊玉姫天孫に謂して曰く、「妾已に有娠めり。天孫の胤豈海中に産みまつるべけんや。故れ産まむ時に、必ず君の處に

就でん。如し我が爲に産屋を海邊に造りて、以て相待ちたまへ。是れ所望なり」。故れ彦火々出見尊已に郷に還りて、即ち鸕鷀の羽を以て産屋を葺爲る。屋葺未だ及合はせぬに、豊玉姫



吉川靈華氏筆

自ら大龜に馭り、女弟玉依姫を將ゐて海を光らして來到る。時に孕月已に満ちて、産期方に急りぬ。此に由りて葺合するを待たずして徑に入り居す。

已にして從容天孫に謂して曰く、「妾方に産まん、請ふな臨ましそ」。天孫心にその言を惟みて竊に規ひたまふ。則ち八尋の大鰐に化爲りぬ。而も天孫視其私屏したまふことを知りて、深く慙恨みまつることを懷く。既に兒生まして後に、天孫就きて問ひて曰く、「兒の名は何に稱けば可けん」對へて曰く、「彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊と號けたまふべし」と、言ひ訖りて乃ち海を涉りて徑に去りぬ。

(日本書紀卷第二、神代下)

【解説】

海幸山幸神話に連続する海宮神話の一節。神婚説話の一種型たる世界大播布説話の一 (Melusina type) に屬する典型的な形であるが、同時に同じく大播布説話の不開室型 (Forbidden Chamber type) にも屬する。産屋に近づくを禁止するタブーの原始習俗として、民俗學的にも好資料である。

書紀の所傳も大同小異であるが、その中の「一云」とある一異傳(附)の、豊玉姫が大龜に乗つて妹玉依姫を伴ひ、海宮から海邊の産屋に來られる事になつてゐるのが、浦島傳説の龜比賣、乃至乙姫の姿を暗示してゐる點は注目すべきである(後輯、民俗譚、浦島子參照)。又、紀の一書の別傳では、此のタブーの犯された事が、海陸來往の杜絶した緣因であると説明してゐるが、これは諸神黄泉行神話が現世と冥界との交通杜絶を説明する神話であるのと同斷で、或は同神話の影響とも看られ得る(神話篇、千五百産屋參照)。

古事記中卷、垂仁天皇の條に見える肥長比賣の神婚説話も類種で、本神話と交渉があると思はれるが、寧ろそれは日高川傳説の先行説話であらう(後輯、怪異譚、怨念化生説話、道成寺參照)。

波を分けわが日の本をたづねこし聖の御代のおやにぞありける

(天慶六年日本紀竟宴和歌、得豊玉姫、藤原俊房)

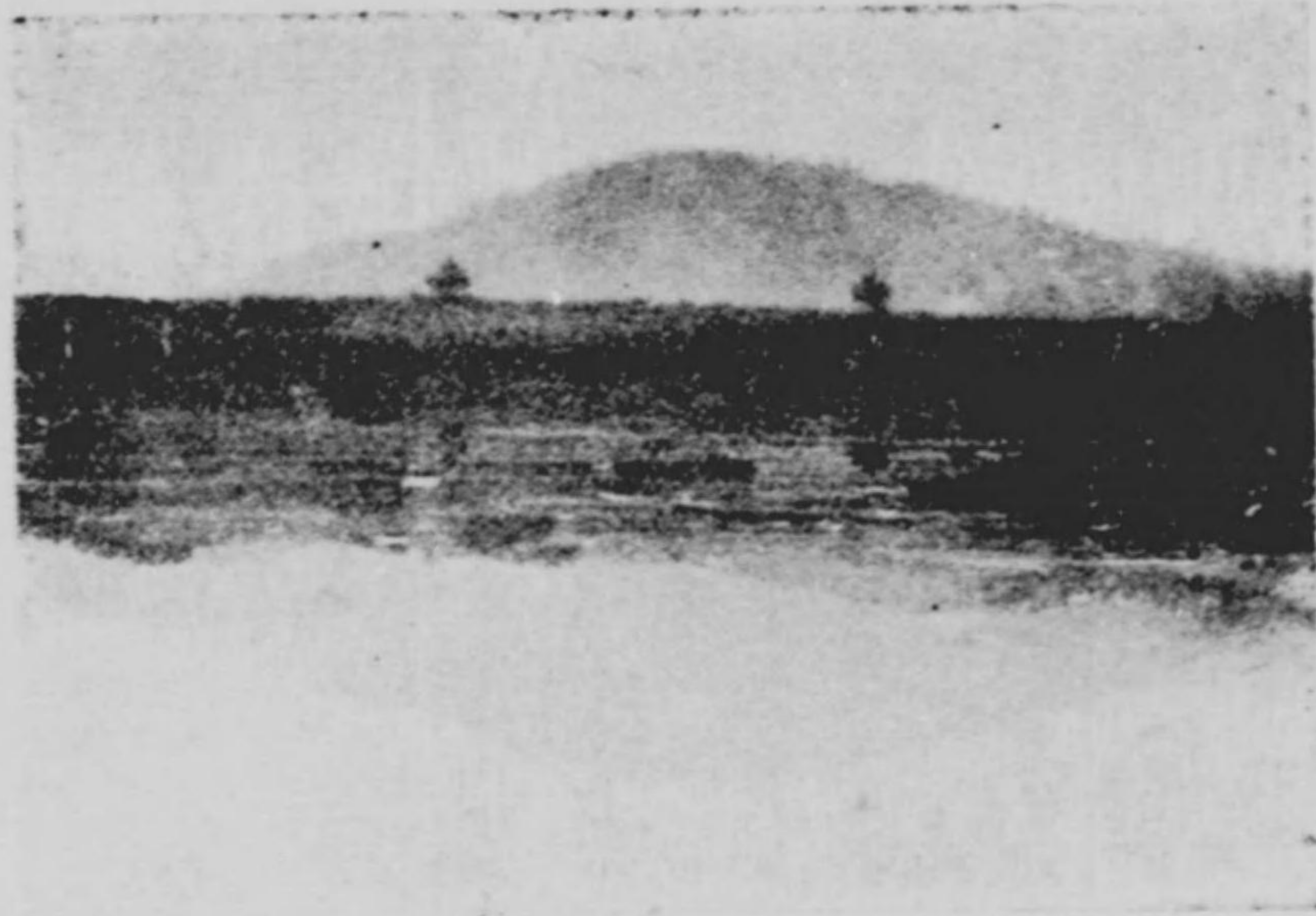
三勾の麻

この意富多多泥古(1)と謂ふ人を神の子と知れる所以は、上に云へる活玉依毘賣(2)其容姿端正
 かりき。於是神壯夫有(3)りて、その形姿威儀時に比無きが夜半之時に倏忽來つ。故れ相感でて共婚
 供住之間に、幾時(4)もあらねばその美人妊身みぬ。爾に父母その妊身める事を怪しみて、その女に
 「汝は自ら妊めり。夫無きに何由にしてかも妊める」と問へば、答へけらく、「麗美しき壯夫
 のその姓名も知らぬが、夕毎に來て供住之間に、自然懷妊みぬ」といふ。是を以てその父母そ
 の人を知らまく欲りて、その女に誨へつらくは、「赤土を床前に散らし、閑蘇紡麻(5)を針に貫き
 て、その衣の欄に刺せ」とをしふ。故れ教へし如して且時に見れば、針著けたりし麻は戸の鈎穴
 より控き通り出でて、唯遺れる麻は三勾(6)のみなりき。即爾に鈎穴より出でし狀を知りて、糸
 の從に尋ね行きしかば、美和山(7)に至りて神社に留まりき。故れその神の子なりとは知りぬ。
 故れその三勾遺れるに因りてなも、其地を美和とは謂ひける。この意富多多泥古命は、神君・鴨君

の祖なり。

(古事記、中卷)

註 (1)第十代崇神天皇の御代疫病流行した時、大物主神の託宣に依つて國中に求め探し、命じて同神を
 祭らしめられた人。(2)陶津耳命の女。(3)續んだ麻を丸く卷いたもの。(4)三卷き。(5)三輪山。



三輪山

〔附イ〕

この後に(1)、倭迹々日百襲姫命(2)、大物主神の妻と
 爲る。然るにその神、常に晝は見えたまはずして、夜の
 み來す。倭迹々姫命夫に語りて曰く、「君常に晝は見え
 たまはねば、分明にその尊顔を視まつることを得ず。
 願はくは暫し留りたまへ。明旦、美麗之威儀を仰ぎ
 て觀たてまつらむ」。大神對へて曰く、「言理灼然たり。
 吾明旦に汝が櫛笥に入りて居らむ。願はくは吾が形に
 な驚きましそ」。爰に倭迹々姫命心の裏に密に異しむ。
 明くるを待ちて以て、櫛笥を見れば、遂に美麗しき小蛇
 有り。その長さ大さ衣紐の如し。則ち驚きて叫啼ぶ。時に大神恥ぢて、忽ちに人の形に化り

たまふ。その妻に謂りて曰く、「汝忍びずして吾に令羞つ。吾還りて汝に令羞む」といひて、仍りて大虚を踐みて御諸山に登ります。爰に倭迹々姫命仰ぎ見て悔いて急居。則ち箸にて陰を撞きて薨せぬ。乃ち大市に葬る。故れ時の人その墓を號けて箸墓と謂ふ。この墓は日は人作り、夜は神作る。故れ大阪山の石を運びて造る。則ち山より墓に至るまで、人民相踵ぎて以手遞傳運ぶ。時の人歌ひて曰く、

大阪に踵ぎ登れる石群を手ごしに越さば越しがてむかも

(日本書紀卷第五、崇神天皇)

注 (1)武埴安彦の亂後。(2)孝靈天皇皇女、崇神天皇大伯母。(3)蹲る。(4)大和國城上郡大市郷。

〔附 口〕

その後(1)少彦名命行いて熊野の御碕に至りて、遂に常世郷に適でましぬ。亦曰く、淡嶋に至りて粟莖に縁りしかば、則ち彈かれ渡りまして、常世郷に至りましき。自後、國の中に未だ成らざる所をば、大己貴神獨り能く巡り造る。遂に出雲國に到りて、乃ち興言(2)して曰く、「夫の葦原中國は本より荒茫びたり。磐石草木に至及る迄、威能く強暴。然れども吾已に摧き伏せて、和順は(3)すといふことなし」遂に因て言く、「今この國を理むるは、唯吾一身の

みなり。それ吾と共に天下を理むべきもの蓋しありや。時に神光海を照し、忽然に浮び來るものあり。曰く、「如し吾在らずんば、汝何ぞ能くこの國を平け(4)まし。吾在るに由ての故に、汝その大造之績(5)を建つることを得たり」。この時に大己貴神問ひて曰く、「然らば汝はこれ誰ぞ」對へて曰く、「吾はこれ汝が幸魂奇魂(6)なり。大己貴神の曰く、「唯然なり。迺ち汝はこれ吾が幸魂奇魂なりけりと知りぬ。今何處にか住まむと欲ふや」。對へて曰く、「吾日本國の三諸山に住まむと欲ふ」。故れ即ち宮を彼處に營りて、就きて居しませしむ。これ大三輪の神なり。

(日本書紀卷第一、神代上)

注 (1)大己貴神即ち大國主神と國土經營の後(神話篇、少彦名 附久延毘古參照)。なほ、これは「一書曰」の文である。(2)言揚。特に言ひ立てること。(3)歸服。(4)平定。(5)功績。(6)幸魂は人に幸福を與へる靈魂。奇魂は奇しき徳を具へて事物を識別する力を有する靈魂。

【解説】

所謂三輪傳説として知られてゐる神話である。

是も神婚説話であるが、前者とは異型の、エロスとプシケ型(即ち天稚彦型)神話篇、雄の頓使

解説参照)に依つて代表せられる世界大播布説話の一種、その特殊型即ち三輪山型で、是では苧環モチーフが重心を成し、且その遺つた麻が三勾であつたと謂ふ點に地名傳説を形成してゐる。紀(附イ)はその異傳で、是は苧環モチーフではない代りに禁止モチーフで、且蛇身と謂ふ點では却つて緒方(尾形)傳説などに關係がある。大三輪の神の本體に就ては、〔附ロ〕の書紀の説明で明らかであるが、

我が庵は三輪の山もと戀しくばとぶらひ來ませ杉立てる門 (古今集卷十八、雜下)

の古歌が三輪明神の神詠とせられ、標の杉の歌物語が新たに展開してからは(俊祕抄卷上・諸曲三輪)、この神婚説話は更に轉化して(和歌童蒙抄第七、雜)、葛の葉傳説(後輯、怪異譚、怪説話、葛の葉參照)の系統に影響を與へてゐる。猶原傳説は後世、史的にも地方的にも種々の形に轉化流布してゐるが、就中代表的なものは即ち緒方惟義の祖先に關する神婚傳説(平家物語卷八・源平盛衰記卷二十三・諸曲小環)で、記・紀兩者を併せたやうな形をなしてゐる。

この神話から取材した文學で最も有名なのは、近松半二の妹背山婦女庭訓である。入鹿誅伐の史實に基づく作で、三輪は戯曲中の可憐な鄙の一女性の名となつてしまつてゐる。

霞壯夫と下氷壯夫

故れ茲の神(イ)の女、名は伊豆志袁登賣神(坐せり。故れ八十神是の伊豆志袁登賣を得むとすれども皆得婚す。於是二の神あり。兄を秋山之下氷(壯夫と號ひ、弟を春山之霞壯夫とぞ名ひける。故れその兄その弟に謂ひけらく、「吾伊豆志袁登賣を乞へども得婚す。汝この嬢子を得てむや」といへば、「易く得てむ」と答曰ふ。爾にその兄の曰く、「若し汝この嬢子を得て有らば、上下の衣服を避り、身の高を量りて、甕に酒を醸み、亦山河の物を悉に備へ設けて、宇禮豆玖(をこそ爲め」と云ふ。爾にその弟兄の言へる如、具に母に白せば、即ちその母藤葛を取りて、一宿の間に衣・禪・襪・沓まで織り縫ひ、亦弓矢を作りてその衣禪等を服せ、その弓矢を取らせて、その嬢子の家に遣りしかば、その衣服も弓矢も悉に藤の花とぞ成れりける。於是その春山之霞壯夫、その弓矢を嬢子の厠に繫けたるを、伊豆志袁登賣その花を異しと思ひて、將ち來る時に、その嬢子の後に立ちて、その屋に入りて、即ち婚しつ。故れ一子生みたりき。

爾にその兄に、「吾は伊豆志袁登賣を得たり」と曰ふ。於是その兄い、弟の婚つることを慄懐み(5)て、其の宇禮豆玖の物を償はず。爾その母に愁ひ白す時に、御祖(6)の答白へらく、「我が御世の事能くこそ神習はめ、又うつしき青人草習へや、その物償はぬ(7)」といひて、その兄なる子を恨みて、乃ちその伊豆志河(8)の河島(9)の節竹(10)を取りて、八目之荒籠を作り、その河の石を取り、鹽に合へてその竹の葉に裹み、詛(11)言はしめけらく、「この竹葉の青むが如、この竹葉の萎むが如青み萎め。又この鹽の盈ち乾るが如盈ち乾よ。又この石の沈むが如沈み臥せ」如此詛ひて烟の上に置かしめき。是を以てその兄八年の間干き萎み病み枯しき。故れその兄患ひ泣きてその御祖に請へば、即ちその詛戸を返さ(12)しめき。於是その身本の如くに安平ぎき。

(古事記、中卷)

註 (1)出石の大神。なほ、これは第十五代應神天皇の條に見える文である。(2)出石の大神の靈が現男となつて顯れ或女に生ませた女神。(3)秋木の葉の紅葉して耀り映える意。(4)賭物を約する意。(5)歎く意。(6)母。(7)能く神の行爲に做つて正直にすべきである、然るに償ふべき約を果さないのは現世の人間の行爲に做つてか。(8)但馬國の出石川。(9)河中の島。(10)單に竹のこと。(11)呪ひ。(12)呪咀を解く事。

【解説】

春と秋との争の神話。即ち霞壯夫は春の、下水壯夫は秋の人格化である。又兄弟が妻を争つて弟が勝つ點では大國主神話と同型(童話篇、因幡の白兔、及び神話篇、内はほら／＼註(1)参照)、一兄弟の軋轢と弟の勝利といふ點では海幸山幸神話と同型(神話篇、滿珠干珠参照)で、何れから云つても末子成功説話の型である。説話の筋立は全く違ふが、安南地方には山の精と海の精とが女を争ふ神話がある。妻争の天然神話といふ點では同じである。

春と秋、花と紅葉といふ自然美の對立を考へ、その優劣を判定する事に常に關心を持つのは、天然の風光に恵まれた我が國民性である。萬葉集(卷一)の額田女王の御歌、源氏物語の春秋の定め(薄雲卷・若菜下卷等)を始め、詩歌や物語等にも古くから屢々見える。

藤の花に變じて異性に接近する神婚神話的形式のマジックは、大物主神話(古事記中卷、神武天皇の條)や、或は賀茂神話(山城風土記・謠曲賀茂)に於ける丹塗矢と類型。賭の不履行に就いての責罰は一種の咒術の民俗を示し、且海幸山幸神話の結末と相類してゐるものがある。

又一時、天皇(葛城山に登り幸でませる時、百官の人等、悉紅紐著ける青摺の衣を給はりて服たりき。彼の時にその所向の山の尾より、山の上に登る人有り。既に天皇の鹵簿に等しく、その装束の状及人衆も相似て傾れず。爾に天皇望らして問はしめたまはく、「茲の倭國に吾を除きて亦王は無きを、今誰人ぞ如此て行く」と問はしめたまひしかば、答へ曰せる状も亦、天皇の命の如くなりき。於是天皇、皇大く忿らして矢刺したまひ、百官の人等も悉に矢刺しければ、其の人等も皆矢刺せり。故れ天皇亦問はしめたまはく、「然らばその名を告らさぬ。各名を告りて矢弾たむ」とのりたまひき。於是答へ曰さく、「吾先づ問はえたれば、吾先づ名告爲む。吾は雖惡事而一言、雖善事而一言、言離(之神、葛城之一言主之大神なり」とまをしたまひき。於是天皇、皇惶みて白したまはく、「恐し、我が大神宇都志意美(有さむとは覺らざりき」と白したまひて、大御刀及弓矢を始めて、百官の人等の服たる衣服を脱がしめて、拜

みて獻りき。爾その一言主大神手打ちて、その捧物を受けたまひき。故れ天皇の還幸ります時、その大神、山の末を降りまして、長谷の山口に送り奉りき。故れこの一言主大神はその時にぞ顯れませる。(古事記、下卷)

註 (第二十一代雄略天皇。(凶事でも吉事でも我が一言で解決する意。(現大身。形を現した神。

【解説】

反響傳説である。筈の物理現象を神靈視し、是を人格的行動と認めようとする原始民族通有の解釋で、小兒の考へ方と軌を一にする。この神話では聽覺に訴へる所謂反響の現象のみならず、それを視覺に翻轉した形——鏡の映像現象と同様な——をも併せ含んでゐる(童話篇、松山鏡参照)。一言主大神の名が亦反響説話たる事を自ら説明してもゐるとも言へる。又この神は醜貌である事及び役の行者に使役せられた事等の傳説がある(後輯、高僧譚、法力説話、役行者参照)。

雄略天皇の狩獵を好み給うた事、並びに是に關聯して同じ葛城山で大猪を射給うた事、或は美和河の引田部の赤猪子の話が古事記に見え、丘邊に菜を摘む少女に賜うた有名な御製は萬葉

集卷頭に載せてある。

この神話に取材した謡曲に一言主がある。

又一時、天皇葛城の山上に登り幸でましき。爾に大猪出でたりき。即ち天皇
鳴鑼を以ちて、その猪を射たまへる時に、その猪怒りて、うたぎ依り來。故れ天
皇そのうたぎを畏みて、榛の上に登り坐しき。爾歌曰したまはく、

安見しし わが大君の 遊ばしし 猪の惱猪の うたぎ畏み 朕が逃げ登り
し 在丘の 榛の木の枝

(古事記、下卷)

童
話
篇

因幡の白兔

故れこの大國主神の兄弟八十神坐しき。然れども皆、國は大國主神に避りまつりき。避りまつりし所以は、その八十神各稻羽の八上比賣を婚ばはむの心有りて、共に稻羽に行きける時に、大穴牟遲神に俗を負せて、從者と爲て率て往きき。於是氣多之前に到りける時に、裸なる菟伏せり。爾に八十神その菟に謂ひけらく、「汝爲むは、この海鹽を浴み、風の吹くに當りて、高山の尾上(4)に伏せれ」といふ。故れその菟八十神の教ふる從にして伏しき。爾にその鹽の乾く隨に、その身の皮悉に風に吹き拆かえし故に、痛苦みて泣き伏せれば、最後に來ませる大穴牟遲神、その菟を見て、「何由汝泣き伏せる」と言ひたまふに、菟答言さく、「僕淤岐島(5)に在りてこの地に度らまく欲りつれども、度らむ因無かりし故に、海の和邇(6)を欺きて言ひけらく、「吾と汝と族の多き少きを競べてむ。故れ汝はその族の在りの隨(7)率て來て、この島より氣多前まで皆列み伏し度れ。吾その上を踏みて走りつゝ讀み度らむ。於是吾が族と孰れ多きとい

ふことを知らむ』如此言ひしかば、欺かえて列み伏せりし時に、吾その上を踏みて讀み度り來て、今地に下りむとする時に、吾『汝は我に欺かえつ』と言ひ竟れば、即ち最端に伏せる和邇



白兔神社 (因幡國内海)

我を捕へて、悉に我が衣服を剥ぎき。此に因りて泣き患ひしかば、先へちて行でませる八十神の命以ちて、『海鹽を浴みて、風に當りて伏せれ』と誨へたまひき。故れ教の如爲しかば、我が身悉に傷はえつ』とまをす。於是大穴牟遲神その菟に教へたまはく、『今急くこの水門に往きて、水を以て汝が身を洗ひて、即ちその水門の蒲黄（きよ）を取りて、敷き散らしてその上に輾轉びてば、汝が身本の膚の如、必ず差え（なむものぞ）とをしへたまひき。故れ教の如爲しかば、その身本の如くになりき。此稻羽の素菟といふ者なり。今に菟神となも謂ふ。故れその菟、

大穴牟遲神に白さく、「この八十神は必ず八上比賣を得たまはじ。倍を負ひたまへれども、汝命ぞ獲たまはむ」とまをしき。

(古事記、上卷)

註 (1)御兄弟は皆服して國を讓られた。(2)大國主神の亦の御名。(3)因幡國氣多郡にその名を遺す。(4)嶺の頂。(5)隱岐國。(6)鰐魚。(7)あらん限り悉く。(8)蒲の花粉。(9)癒える。

【解説】

書紀には見えてゐない。

大國主神話に附帶する禽獸説話。小動物が大動物を服する、即ち智力の勝利を説く説話型に屬するものであるが(童話篇、粘補参照)、本章話では欺計を用ゐた勝者の驕慢と油断とが、最後の瞬間に失敗を招いて、却つて報復を受けしめられた教訓を含んでゐる。

この童話の本據は、本生譚中の猿と鱷の印度説話、所謂猿の生肝取り(次項参照)で、その原説話に各種の異傳がある中の一つから變形したものと推定せられてゐるが、別にその原形とも見られ得るものが南洋西ボルネオにある。これは小鹿と鰐の童話(神話傳説大系、インドネシア神話傳説集にも「だまされ鰐」として収めてある)で、肝取りとは全然關係なく、寧ろ之を直接我が兎と鰐の本據と目する方が一層自然と言ひ得る。或は日本のは印度説話の影響をも併せ受けてゐるかもしれない。

猶この童話は大國主神話に吸合せられては大國主命の仁慈を説明する説話となり、同時に兎は命の成功の豫言者たる役を勤めさせられてゐる（神話篇、内はほら／＼参照）。

森治藏氏はこの童話が近世では辨慶生立物語に結び附いたらしいと推定し、同じ出雲地方の辨慶島の傳説、即ち辨慶が幼時亂暴な爲、島に棄てられたのを、小石を一つ／＼海に投げ入れつゝ、その上を飛石を傳ふやうに數へ渡つて出雲へ歸つたとの話は、これの轉化であらうと論じてゐる。

本童話に取材したものに、坪内逍遙博士の兒童劇「因幡うさぎ」がある。

これは色黒く、せい低く、頭巾うち著、大袋を打ちかたげ、手には槌を持ち給へるが、肥え太りたる有様にて立たせ給へり。何處よりと尋ね奉れば、我は西天に住むなる大黒天と云ふ者なり。汝心素直にて慈悲深き人と聞けば、宿として住まん爲、西天より來れりとて、庭の内へ入り給ふ。（御伽草子、梅津長者物語）

猿の生肝

今ハ昔、天竺ノ海邊ニ一ツノ山有リ。一ツノ猿有リテ、菓ヲ食シテ世ヲ過ス。ソノ邊ノ海ニ二ツノ龜有リ、夫妻也。妻ノ龜夫ノ龜ニ語リテ云ハク、「我汝ガ子ヲ懷妊セリ。而ルニ我レ腹ニ病有リテ、定メテ産ミ難カラシ。汝我ニ藥ヲ食セバ、我ガ身平ラカニテ汝ガ子ヲ生ジテム」ト。夫答ヘテ云ハク、「何ヲ以テ藥トハ可爲キゾ」ト。妻ノ云ハク「我レ聞ケバ、猿ノ肝ナム腹ノ病ノ第一ノ藥ナル」ト云フニ、夫海ノ岸ニ行キテ、彼ノ猿ニ値ヒテ云フ様、「汝ガ栖ニハ萬ノ物豊ナリヤ否ヤ」ト。猿答ヘテ云ハク、「常ニハ乏シキナリ」ト。龜ノ云ハク「我ガ栖ノ近邊ニコソ、四季ノ菓不絶廣キ林ハ有レ。哀レ汝ヲソノ所ニ將テ行キテ、飽ク迄食セバヤ」ト、猿ヲ謀ルヲバ不レ知シテ、喜ビテ「イデ、我レ行カム」ト云ヘバ、龜「然ラバ、イザ給ヘ」ト云ヒテ、龜ノ背ニ猿ヲ將テ行キテ、龜ノ猿ニ云ハク「汝不レ知ズヤ。實ニハ我ガ妻懷妊セリ。而ルニ腹ニ病有ルニ依ツテ、猿ノ肝ナムソノ藥ナルト聞キテ、汝ガ肝ヲ取ラムガ爲ニ、謀リテ將テ來レル也」

ト。猿ノ云ハク、「汝甚ダ口惜シ、我ヲ隔ツル心有リケリ。未ダ不聞ヤ、我等ガ黨ハ本ヨリ身ノ中ニ肝无シ。只、傍ノ木ニ懸ケ置キタル也。汝彼處ニテ云ハマシカバ、我が肝モ亦他ノ猿ノ肝モ取リテ進セテマシ。譬ヒ自ラヲ然シ給ヒタリトモ、身ノ中ニ肝ノ有ラバコソ、ソノ益ハ有ラメ。極メテ不便ナル態カナト云ヘバ、龜、猿ノ云フ事ヲ實ト信ジテ、「然ラバイザ將テ還ラム。肝ヲ取リテ得給ヘト云ヘバ、猿「ソレハイト安キ事也。有リツル所ヘダニ行キ着キナバ、事ニモ非又事也」ト云ヘバ、龜前ノ如ク背ニ乗セテ本ノ所ニ至リヌ。打チ下シタレバ、猿下ル、ママニ走リテ木ノ末ニ遙ニ昇リヌ。見下シテ猿龜ニ向ヒテ云ハク、「龜墓无シ(*ヤ。身ニ離レタル肝モヤ有ル」ト云ヘバ、龜早ク謀リツルニコソ有リケレト思ヒテ、可爲キ方无クテ、木ノ末ニ有ル猿ニ向ヒテ可云キ様无キマ、ニ、打チ見上ゲテ云ハク、「猿墓无シヤ。何ナル大海ノ底ニカ菓ハ有ル」ト云ヒテ海ニ入りニケリ。昔モ獸ハカク墓无クゾ有リケル。人モ愚癡ナルハ此等ガ如シ。カクナム語り傳ヘタルトヤ。

(今昔物語卷五、亀爲レ猿被レ謀語第廿五)

註 (*果敢無シの當字。)

〔附〕

沖つ鳥 鴨つく島の 大海の 宮の乙姫 病して 臥せる時に 八百萬 千萬魚の 集ひつ

つ 謀りけらくは 山に棲む 猿と云ふ物の 生膽を 取りてまたさば(1) すむやけく(2)
 癒えなんものぞと 百重波 千重波 凌ぎ 龜行きて 猿を欺罔り 我が國の 常世の島の
 旨し物 にづらふ(3) 柿 得しめんと 脊にかき乗せて 海坂を(4) 伴ひ歸り しどくしろ(5)
 美し小濱の 門の邊に 暫し立ち待て 我れ行きて 導べしてんと 門内に 龜は入りにき
 門守の 海月云へらく 猿まろい(6) 藥作ると 己が緒(7)を 盗まく知らに(8) 遙々に 欺
 かえ來し 哀れさと 涙落せば 驚きて 悔い歎かへど せん術の 其處に無ければ 引け
 鳥(9)の 引かれて終に 宮内に 侍ひつゝ 我が肝は 古りにしからに 落ち滾ち 流るゝ
 水の 清き瀬に 濯ぎ洗ひて 松が枝に 懸け置きつれば 腹の内に 今しは無し よしゑ
 やし(10) 今しは無けど よしゑやし 道は遠けど 君が爲 い取り來ましと 明星の あか
 め(11)鯛めの 侍婢に 虚言云ひて 大海の 宮を遁ろへ 又更に 龜に乗りつゝ 足引の
 山に至れば 忽ちに 岩根に攀ちて 天聲り 高き梢末を くき傳ひ あゝしやこし(12)と
 指さし 嘲み笑へば 足摺りし 憤れども する由の 龜は無ければ 大海の 宮に歸り
 て 千萬の 魚呼び集へ 海月をし 疎め憎みて 玉きはる 命殺せんと 諸共に 謀らふ
 なべに 弱腰を 老い躑めつゝ 海老の來て 歎き息づき 墨染の 海月が命 賜ばらんと

愁へ申せば(13) 久方の 天つ罪もて 玉鉾の 千坐置戸(14)を 負せつゝ 抜へつ物に(15) し
が(16)骨の 有りのことぐ かき抜きて 放はれにけり。然れこそ 海月の骨は 今も無し
てへれ(17)。

美しき友をこそ持ため海老なくば海月は命死ぬべかりけり

(童話長篇(18)、乙姫(19))

註

(1) 獻ずる。(2) 速に。(3) さにづらふ。眞赤な。(4) 海界。海上。(5) うましの枕詞。(6) 猿のこと。(7) 玉の緒、即ち生命。(8) 取られるの知らずに。(9) 一羽が飛立れば他のもそれに引かれて飛立つをいふ。此處は「引かれて」の序詞。(10) 縦ひ。(11) 赤女。鯛の古語。(12) 嘲笑の詞。(13) 愁訴歎願する。(14) 夥多の贖罪の祓物。神話篇、天岩戸參照。(15) その祓物として。(16) 其が。(17) 「といへれ」の約。(18) 舌切雀・桃太郎・勝々山・猿蟹・花咲爺・乙姫・小便川の七つの童話を各々萬葉風の長歌に作つたもの。作者は國學者黒澤翁滿(19) (原本目録には「詠乙姫長歌并短歌」とある。但し、乙姫の病氣が此の使者派遣の動機をなしてゐるといふだけで、それを乙姫を主役とした童話として取扱はうとしてゐるのは適切でない。

【解説】

印度の寓話的童話を本據とする世界大播布説話の一である。猿に對する水棲動物が、佛典によつて虬(佛本行經)、鼈(六度經)或は前項に引いた本生譚中の鱧といふやうに、それぞれ異つてはゐるが、同一根元の説話たる事は疑無く、これが支那及び



赤本表紙題簽

西藏に播布し、朝鮮では兎と龜の童話に轉化し、我が國では特に動物形態の説明傳説としての意味が附加强調せられてゐる。即ち今昔物語所載のものは、略々印度の原説話の儘であるが、後世童幼の間に行はれてゐるものは 或は使者の龜が失敗した罰として叩かれた故甲羅に龜裂を生じたとする形、或は(附)のやうに使は龜で門番の愚な海月が謀を漏した罰に骨無しにされたとする形もあるが(赤本)猿のいきぎもこの系統に屬するものの一である、海月が使者で、同じく骨無しにされるのを結末とする所謂海月の御使の童話として廣く流布してゐる。斯く東洋に分布してゐるのみならず、一面阿弗利加にも猿と鮫の童話として語られてゐる。

鼠ねずみの嫁よめ入いり

七四

生れ付きたる果報は定まり有りて、轉じ難き事也。今生の果報は、先世の業ごふに應こたふ。當來たうらいの果報は、今生の業ごふに因よるべし。唯、未來無窮の果報目出たかるべき淨土菩提の道みちを希こひひて、既に定まれる貧賤の身、非分ひぶんの果報を望むべからず。鼠ねずみの女むすめをまうけて、天下に雙たがひび無き聲を取らんと、おほけなく思おもひ企こころて、日天子ひてんしこそ、世を照し給ふ徳目出たれと思ひて、朝日あさひの出で給ふに、「女むすめを持ちて候。貌容みかたちなだらかに候。參まゐらせん」と申すに、「我は世間を照らす徳有れども、雲に遭あひぬれば、光も無くなるなり。雲を聲こゑに取れ」と仰せられければ、實まことにと思ひて、黒き雲の見ゆるに逢あひて、この由申すに、「我は日の光をも隠す徳有れども、風に吹き立てられぬれば何にても無し。風を聲こゑにせよ」と云ふ。さもと思ひて、山風の吹けるに向ひて、この由申すに、「我は雲をも吹き、木草をも吹き靡かす徳有れども、築地ついでに遭あひぬれば力無きなり。築地を聲こゑにせよ」といふ。げにと思ひて、築地にこの由を云ふに、「我は風にて動かぬ

徳有れども、鼠ねずみに穿ほらるゝ時、堪へ難きなり」と云ひければ、さては鼠は何にも勝かれたるとて、鼠を聲こゑに取りけり。是も定まれる果報にこそ。

(沙石集させきしふ卷第八下、貧窮ひんくう追出おひだす事)

註 (1)分に過ぎた。(2)不相應に。(3)太陽。(4)土塀。(5)鎌倉時代の佛教説話文學。十卷、弘安二年夏起

筆、同六年秋成つた。作者は無住法師、鎌倉の人で名は一圓、梶原景時の裔。

【解説】

循環型の寓話的童話。本據は印度説話で、パンチャタントラ卷三に見える。支那にも行はれ、朝鮮野談集にも載せてあるから、傳來の徑路を推斷する事が出来る。沙石集に採録せられてある事が、鎌倉中期迄には既に輸入せられてゐた事を示してゐるが、室町末から江戸時代へかけて最も行はれたやうで、寛永十年の中山忠義の醍醐隨筆、寛永二十年の假名草子薬師通夜物語等の文によつても知られる。赤本にも作られてゐる。後の式亭三馬の浮世床中にも變形して猫の名づけの笑話として書かれてゐるが、これは直接には支那説話の猫の命名の話から脱化したのであらうとの松村武雄博士の推定の通りであらう。



これも今は昔、右の顔に大なる瘤ある翁ありけり。大かう山へ行きぬ。雨風はしたなく、て歸るに及ばで、山の中に心にも有らず留りぬ。又樵夫もなかりけり。怖しさすべき方無し。木の空虚の有りけるに這ひ入りて、目も合はず屈まりて居たる程に、遙より人の聲多くして、とどめき來る音す。如何にも山の中に唯獨り居たるに、人の氣はひのしければ、少し生き出づる心地して、見出しければ、大方やうく様々なる物ども、赤き色には青き物を着、犢鼻褌にかき、大方目一つ有るもの有り、口無きものなど、大方如何にも言ふべきに有らぬ物ども、百人ばかり薙き集りて、火を貂の目の如くに燈して、我が居たる空虚木の前にゐまはりぬ。大方いとど物覺えず。主と有ると見ゆる鬼横座に居たり。左右に、二列に居並みたる鬼數を知らず。その姿、各々言ひ盡し難し。酒まゐらせ遊ぶ有様、この世の人のする定なり。度々土器始まりて主との鬼、殊の外に酔ひたる様なり。末より若き鬼一人立ちて、折敷を翳して、何と云ふにか、

口説きくせゝる事云ひて、横座の鬼の前に練り出でて口説くめり。横座の鬼、盃を左の手に持ちて笑みこだれたる様、唯この世の人の如し。舞ひて入りぬ。次第に下より舞ふ。惡しく、善く、舞ふも有り。あさましと見る程に、この横座に居たる鬼の云ふやう、「今宵の御遊こそ何時にも勝れたれ。但し、さも珍らしからん舞奏を見ばや」など云ふに、この翁、物の憑きたりけるにや、又神佛の思はせ給ひけるにや、あはれ走り出でて舞はばやと思ふを、一度は思ひ返しつ。それに何となく、鬼どもが打ちあげたる拍子の善げに聞えければ、さも有れ、唯走り出でて舞ひてん。死なばさて有りなんと思ひ取りて、木の空虚より、烏帽子は鼻に垂れ掛けたる翁の、腰に斧と云ふ木切る物さして、横座の鬼の居たる前に躍り出でたり。この鬼ども跳り上りて、「こは何ぞ」と騒ぎ合へり。翁伸び上り屈まりて、舞ふべき限り、すぢりもぢり（えい）い聲を出して一庭を走り廻り舞ふ。横座の鬼より始めて、集まり居たる鬼ども感歎み興す。横座の鬼の曰く、「多くの年比、この遊をしつれども、未だかゝる者にこそ逢はざりつれ。今よりこの翁、斯様の御遊に必ず參れ」と云ふ。翁申すやう、「沙汰に及び候はず、參り候ふべし。この度俄かにて、をさめの手も忘れ候ひにたり。斯様に御覽に適ひ候はば、靜かに仕う奉り候はん」と云ふ。横座の鬼、「いみじう申したり。必ず參るべきなり」と云ふ。奥の座の三番に居

たる鬼、「この翁は斯くは申し候へども、参らぬ事も候はんすらん。思しし質をや取らるべく候ふらん」と云ふ。横座の鬼の云ふやう、「かの翁が面にある瘡をや取るべき。瘡は福の物なれば、それをや惜しみ思ふらん」と云ふに、翁が云ふやう、「唯目鼻をば召すとも、この瘡は許し給ひ候はん。年比持ちて候ふ物を、故無く召され、條無き事に候ひなん」と云へば、横座の鬼、「かう惜しみ申す物なり。唯それを取るべし」と云へば、鬼寄りて、「さは取るぞ」とて、捻ぢて引くに、大方痛き事無し。さて、「必ずこの度の御遊に参るべし」とて、曉に鳥など鳴きぬれば、鬼ども歸りぬ。

翁顔を探るに、年比有りし瘡跡形無く、搔い拭ひたるやうに、つやく無かりければ、樵らん事も忘れて家に歸りぬ。妻の媪、「こは如何なりつる事ぞ」と問へば、しかく語る。「あさましき事かな」と云ふ。隣にある翁、左の顔に大きな瘡有りけるが、この翁瘡の失せたるを見て、「こは如何にして瘡は失せ給ひたるぞ。何處なる醫師の取り申したるぞ。我に傳へ給へ、この瘡取らん」と云ひければ、「これは醫師の取りたるにも非ず。しかくの事有りて、鬼の取りたるなり」と云ひければ、「我れその定にして取らん」とて、事の次第を細かに問ひければ教へつ。この翁云ふまゝにして、その木の空虚に入りて待ちければ、誠に聞くやうにして鬼ども

出で來たり。居まはりて、酒飲み遊びて、「いづら、翁は参りたるか」と云ひければ、この翁、怖しと思ひながら、ゆるぎ出でたれば、鬼ども、「こゝに翁参りて候」と申せば、横座の鬼、「こち参れ、疾く舞へ」と云へば、前の翁よりは天骨も無く、おろく奏でたりければ、横座の鬼、「この度は悪ろく舞ひたり。かへすくわろし。その取りたりし質の瘡返し賜べ」と云ひければ、末つ方より鬼出で來て、「質の瘡返し賜ぶぞ」とて、今片方の顔に投げ付けたりければ、左右に瘡附きたる翁にこそ成りたりけれ。

物美みはせまじき事なりとか。

(宇治拾遺物語卷第一、鬼に瘡取らるゝ事)

註 (一本には「大よそ」。又異本には「大かうじ(柑子)程なり、人にまじるに及ばねば、薪を取りて世を過ぐるほどに」と有る。(1)甚だしく。(2)はげしく。(3)正座。(4)くぜる(鳥の囀る意味の俗語)か。急がはしく何か分らぬ事をしやべる意であらう。(5)笑み傾く。(6)身をねぢ曲げて。(7)曳聲、えいと力を入れて發する聲。(8)納めの手、即ち奥の手。(9)せん方無い。(10)素質が劣つて拙く。

【解説】

世界大播布説話の一。舌切雀・福富草子等と同じく隣人の幸運を羨むを戒めた所謂物美み話。

朝鮮及び支那に弘布してゐる同型の説話がその本據で、鎌倉初期迄に渡來したものであらう。支那のは明の楊茂謙の笑林評に載つてゐて、嬉遊笑覽の或問附録にも引かれてゐる。朝鮮童話（高橋亨氏著、朝鮮の物語集所収）は舞ふ代りに美聲で歌ふだけの違ひで、宇治拾遺の説話に一層近い。西陽雜俎續集所載、新羅の旁世が金錐子の話も、瘡は無いが恐らく同始源、少くとも類種の説話からの變形に、打出の小槌の形式を採る如意寶モーティフが含まれて來たものかと推考せられ得る。又愛蘭童話の瘡男ラズモアの話（世界童話大系、愛蘭篇のイエイツ童話集中にも收めてある）、並びに獨逸（グリム）・佛蘭西・西班牙等に流布する同種の童話も本邦のに類似し、特に佐々木喜善氏著聽耳草紙に收めてある東北西盤井郡湧津村の口碑は愛蘭のに近接してゐる。又、甲子夜話（卷四）には、八彌といふ農夫が夢に瘡を觀音に取られた靈驗奇話を、事實談として採録してある。

腰折れ雀

今は昔、春つ方、日朗々なりけるに、六十ばかりの女の有りけるが、蟲打取りて居たりけるに、庭に雀のし歩き（いけるを）、童石を取りて打ちたれば、當りて腰を打折られにけり。羽をふためかして惑ふ程に、鳥の翔り歩きければ、「あな心憂、鳥取りてん」とて、この女急ぎて取りて、息しかけなどして物食はず。小桶に入れて夜は藏む。明くれば米食はせ、銅藥に刮（か）けて食はせ（な）などすれば、子ども、孫など、「哀れ女刀自は老いて、雀飼はる」とて憎み笑ふ。かくて月比よく食へば、やうく躍り歩く。雀の心にも、かく養ひ生けたるを、いみじく嬉しくと思ひけり。あからさまに物へ往く（と）ても、人に、「この雀見よ、物食はせよ」など云ひ置きければ、子・孫など、「あはれ、何でふ雀飼はる」とて憎み笑へども、「さばれ、いとほしければ」とて、飼ふ程に、飛ぶ程に成りにけり。「今はよも鳥に取られじ」とて、外に出でて手に据ゑて、「飛びやする、見ん」とて捧げたれば、ふらくと飛びて去ぬ。女「多くの月比日比、

暮るれば藏め、明くれば物食はせ慣ひて、哀れや、飛びて去ぬるよ。又來やする(と見ん)など、徒然に思ひて、云ひければ、人に笑はれけり。

扱二十日ばかり有りて、この女の居たる方に、雀のいたく啼く聲しければ、雀こそいたく啼くなれ。有りし雀の來るにや有らんと思ひて、出でて見ればこの雀なり。「哀れに忘れず來たるこそ哀れなれ」と云ふ程に、女の顔を打見て、口より露ばかりの物を落し置くやうにして、飛びて去ぬ。女「何にか有らん、雀の落して去ぬる物は」とて寄りて見れば、瓢の種を唯一つ落して置きたり。「持ちて來たるやうこそ有らめ」とて取りて持ちたり。「あないみじ、雀の物得て實にし給ふ」とて子ども笑へば、「さばれ植ゑて見ん」とて植ゑたれば、秋になるまゝに、いみじく多く生ひ廣がりて、なべての瓢にも似ず大きに多くなりたり。女悦び興じて、里隣の人に食はせ、取れども取れども盡きもせず多かり。

笑ひし子・孫も、これを明暮食ひてあり。一里配りなどして、果てには、誠に勝れて大きな七つ八つは、杓にせんと思ひて、内に吊り付けて置きたり。扱月比經て、「今は善く成りぬらん」とて見れば、善く成りにけり。取り下して口開けんとするに少し重し。怪しけれども切り開けて見れば、物一はた(入りたり。「何にか有らん」とて、移して見れば、白米の入りたる

なり。思ひ懸けず淺ましと思ひて、大きな物に皆を移したるに、同じ様に入りて有れば、常事には有らざりけり。雀のしたるにこそ」と淺ましく嬉しければ、物に入れて隠し置きて、残りの瓢どもを見れば、同じ様に入りて有り。これを移し／＼使へば、せんかた無く多かり。扱誠に頼もしき人(にぞ成りにける。隣里の人も見あざみ、いみじき事に羨みけり。

この隣に有りける女の子どもの云ふやう、「同じ事なれど、人(は斯くこそ有れ。はか／＼しき事もえし出で給はぬ」など云はれて、隣の女、この女房の許に來りて、「さても／＼、こは如何なりし事ぞ。雀のなどは仄聞けど、能くはえ知らぬは、もと有りけんまゝに宣へ」と云へば、「瓢の種を一つ落したりし、植ゑたりしより有る事なり」とて、細かにも云はぬを、「猶有りの儘に細かに宣へ」と切に問へば、心狭く隠すべき事かと思ひて、「斯う／＼腰折れたる雀の有りしを、飼ひ生したりしを嬉しと思ひけるにや、瓢の種を一つ持ちて來たりしを植ゑたれば、かく成りたるなり」と云へば、「その種唯一つ賜べ」と云へば、「それに入りたる米などは參らせん。種は有るべき事にも有らず。更にえなん散らすまじき」とて取らせねば、我もいかで腰折れたらん雀見付けて飼はんと思ひて、目を立てて見れど、腰折れたる雀更に見えず。つとめて毎に(窺ひ見れば、背戸の方に米の散りたるを食ふとて、雀の躍り歩くを、石取り

て、若しやとて打てば、數多の中に度々打てば、自ら打當てられてえ飛ばぬ有り。悦びて寄りて、腰よく打折りて後に取りて、物食はせ藥食はせなどして置きたり。一つが徳をだにこそ見れ、況して數多ならば、如何に頼もしからん。あの隣の女には勝りて子どもに譽められんと思ひて、籠の内に米撒きて飼ひ居たれば、雀ども集まりて食ひに来れば、又打ち／＼しければ、三つ打ち折りぬ。今は斯ばかりにて有りなんと思ひて、腰折れたる雀、三つばかり桶に取り入れて、銅刮げて食はせなどして、月比經る程に、皆良く成りにたれば、喜びて外に取り出でたれば、ふら／＼と飛びて皆去ぬ。いみじき所爲しつと思ふ。雀は腰打折られて、斯く月比籠め置きたるを、よに妬しと思ひけり。

扱十日ばかり有りて、この雀ども來たれば、悦びて先づ口に物や銜へたと見るに、瓢の種を一つづつ皆落して去ぬ。さればよと嬉しくて、取りて三所に植ゑてけり。例よりもする／＼と生ひ立ちて、いみじく大きに成りたり。これはいと多くも生らす、七つ八つぞ生りたる。女笑みまけて見て、子どもに云ふやう、「はかくしき事し出ですと云ひしかど、我は隣の女には勝りなん」と云へば、實にさも有りなんと思ひたり。これは數の少ければ、米多く取らんとて、人にも食はせず我も食はず。子どもが云ふやう、「隣の女房は里隣の人にも食はせ、我も食ひな

どこせせしか。これは況して三つが種なり。我も人にも食はせらるべきなり」と云へば、さもと思ひて、近き隣の人にも食はせ、我も子どもにも諸共に食はせんとて、おほらかにて食ふに、苦き事物にも似ず、黄蘗などのやうにて心地感ふ。食ひと食ひたる人々も、子どもも我



板本宇治拾遺物語挿繪

も、物を吐きて感ふ程に、隣の人どもも、皆心地を損じて來集まりて、「こは如何なる物を食はせつるぞ。あな恐ろし、露ばかり烟の口に寄りたる者も、物を吐き感ひ合ひて、死ぬべくこそ有れ」と腹立ちて、云ひせためんと思ひて來たれば、主の女をはじめて、子どもも皆物覺えず吐き散らして臥せり

合ひたり。云ふ甲斐無くて共に歸りぬ。

二三日も過ぎぬれば、誰れ／＼も心地直りになり。女思ふやう、皆米に成らんとしけるものを、急ぎて食ひたれば、斯く怪しかりけるなめりと思ひて、残りをば皆吊り付けて置きたり。

扱月比も経て、「今は良く成りぬらん」とて、移し入れん料の桶ども具して部屋に入る。嬉しければ、齒も無き口して耳の元まで一人笑みして、桶を寄せて移しければ、蛇・蜂・蜈蚣・蟻・蠅・蛇など出でて、目鼻と云はず、一身に取り付きて螫せども、女痛さも覺えず、只米の零れ懸るぞと思ひて、「暫し待ち給へ雀よ。少しづつ取らん」と云ふ。七つ八つの瓢より、そこら毒蟲ども出でて、子どもをも螫し食ひ、女をば螫し殺してけり。雀の腰を打折られて、妬しと思ひて、萬づの蟲どもを語らひて入れたりけるなり。隣の雀は、もと腰折れて烏の命取りぬべかりしを養ひ生けたれば、嬉しと思ひけるなり。

されば物羨みはすまじき事なり。

(宇治拾遺物語卷第三、雀報恩事)

註

(1)爲歩く。餌をあさりかく。(2)銅を削つて雀に薬として飲ませ。(3)一寸した用事で外出する。(4)この雀に氣を付けてくれ。(5)又歸つて來はしまいか。(6)一杯。(7)裕福な人。(8)驚歎して。(9)よその人即ち隣の老嫗を指す。(10)毎朝早く。(11)殊の外恨めしい。(12)笑みこぼれて。(13)大勢で。(14)寒國の深山に生ずる樹。その實苦く藥用にする。(15)責め詰らうと。(16)數多。

舌 切 雀

中昔の事なるに、さる田舎にも、彌五太夫といふ者あり。心正直にして慈悲心深く、或時他所より歸る途に、子供數多集り、雀を一羽捕へ打殺さんとする。彌五太夫子供に錢を取らせ、雀を貰ひて我が家に歸る。

彌「子供、その雀をおれに呉れ」子供「爺様、おれにも錢を下さい」彌「みんなに錢やらうぞ」新八供する。

彌五太夫雀を買取り家へ戻り、娘お梅に喜ばする。お梅雀を寵愛しけり。

彌「これ娘、爺がよい土産やらうぞ」娘嬉しがる。婆「爺い殿、つん迷がさつしやい」慳貪婆腹立てる。婆「お八つかな、あんにすすべい。もし」

或時爺の留守に、婆洗濯するとして、糊を煮て冷まし置きける。彼の雀籠より出で、糊を少し甜めければ、慳貪婆大ぶん腹立ち、情なくも雀の舌を切つて放しけり。

腰折れ雀

婆「につくい雀だ。忙しいに折角煮た糊をみんな甜めた。腹が立ち申す」雀「チウ〜〜」
娘「かゝ様、むごい事なされますな」

彌五太夫雀を不憚に思ひ、お梅が手を引き尋ねに出にけり。親雀彌五太夫が心を感じ、菅の

松原迄迎ひに出で、禮を申して伴ひ行き、大分馳走する。

彌「舌切れ雀、チヨツ
〜〜」娘「舌切れ
雀チヨツ〜〜」
下入新八「旦那、向
ひが雀殿の家かな。
さて〜結構な門構
かな。お梅様、雀殿



紙表本赤

に逢ひますぞ。大分草臥
れた」

(雀の隠里門構)

新「白壁造りの雀殿の所
は此處かな」雀家來「彌五
太夫様よろこそ御出でな
されました。この方の娘
子もいかい喜びで御座り
ます」彌「貴様は家來衆



文本同

か」娘「早く雀殿に逢ひたう御座る」

彌五太夫へ馳走に雀の藝者共、瀬川が踊りし一代女の所作事(大でけ〜)。

雀「御爺様、御馳走に踊りを申しつけました。お梅様、よう御覧遊ばしませ」彌「こなたの舌

腰折れ雀

は癒りましたか。これは菊之丞がした槍踊りじやの」

チ、ンテ／＼チンチリ、ツテツンチョン、チリ／＼／＼／＼ツンテン、いよい。様に逢うての朝歸り、景色樂しむ男は伊達に、又とあるまい一代奴、しかし今宵は假寝の枕、戀の中の町、お先で振れ／＼、御供で振れ／＼。

娘面白がる。娘「新八、面白の。ちと褒めやれ」新「いよ／＼、おらが瀬川様め」

雀の家來共、少しの中も彌五太夫に馴染みて、残りおがり、皆々暇乞する。

彌五太夫假初に雀の許へ尋ね來りて、ゆる／＼馳走に逢ひ、土産に葛籠を貰ひて歸る。婆様へも土産にせんとて、重き葛籠を新八に背負はせて歸し、雀名残のところ。

雀「御爺様、御名残惜しや」彌「さて／＼、ちよつと來て久々逗留して、いかい造作になりました。縁もあらばその内逢ひませう、さらば／＼」新「旦那、私が背負つた葛籠は大分重う御座ります」彌「この葛籠は大分軽いぞ／＼。雀殿、さらば／＼」娘「おさらばよ。かゝ様が待つて御座らう、早く参りましたよ」

爺家へ歸り、雀に貰ひし輕き葛籠を開け、これは金銀澤山に、色々結構なる物ばかり出て、

一生榮華に暮しけり。

慳食婆惘然なれば、重き葛籠の蓋開けければ、色々の化物出て、婆に喰ひつく。

化物「もゝんぐわゝ／＼」婆「のう怖や」

(赤本、したきれ雀)

註 (一)何に。(二)初代瀬川菊之丞の一代女の槍踊。九月から京四條の芝居へ登る御名残として元文二年

中村座に大谷廣治・龜谷十次郎及び瀬川菊之丞の三優が「一代奴一代男一代女」の狂言名題で演じた所作事。(三)吉原。(四)槍の大鳥毛を。(五)御厄介。(六)一冊、鱗形屋板。菊之丞の槍踊の事が見えるから、元文二年秋以後、且その上演以後甚だしく隔たらぬ頃の作と推定し得る。

右本文各節に二字下げにして附した部分は、畫面中の散語を適宜一括して添へたので、且、對話者の名を示す彌・娘等の小文字は原文に無いのを、便宜附したものである。又、各節間の一行づつの間隔は、段落に關聯させつゝ原本の改丁或は改頁を示す爲である。花咲爺・猿蟹合戦・桃太郎の三項に掲出した赤本の文も同斷である。

【解説】

同じく物羨み話で、且、動物報恩説話である。五大國民童話の一たる舌切雀の原形が腰折雀

である事は馬琴も燕石襟志(卷四)に考證してゐる。その腰折雀の本據は、朝鮮並びに蒙古に流布する腰折燕の童話と推定せられてゐる。朝鮮では没夫・興夫兄弟の童話(高橋亨氏著、朝鮮の物語集所収)として最も有名で、内地のよりは複雑化してゐる。蒙古のは相隣る家の二人の娘の話(鳥居きみ子女史著、土俗學上より觀たる蒙古所収)で、これは單純で日本のと甚だ近似してゐる。燕石襟志や嬉遊笑覽(卷九)に、搜神記及び續齊諧記に載する、揚寶が黃雀を助けた支那説話を、舌切雀の本據と目してゐるが、類種といふだけのものである。

無盡の米瓢は如意寶で、支那説話では睽車志に見える孝子の米袋。日本でも今昔物語(卷十七)の生江世經(宇治拾遺物語、卷十五にも載す)、宇治拾遺物語(卷六)の叡山の貧僧の傳説に同じモイティフが語られ、俵藤太傳説(英雄譚、怪物退治、俵藤太参照)も同じである。

腰折雀から舌切雀に移つたのは室町末頃か。江戸時代初期の赤本に、前掲「舌切れ雀」の他にも「舌切すゞめ」、又、青本に「舌切すゞめ」、雛豆本に「舌切雀」等の作があるので知られる。嬉遊笑覽に、正徳頃の作の「色芝居」に「ちいとばゞとの昔話に、舌きり雀の舌つきを面白がり」とあるのを(享保三年刊、鱗長作の浮世草子「猿源氏色芝居」)のことで、同書卷一「果報を蒔つける舞子種」の章にこの文は見える)引いてゐるのも、その一證である。

雛豆本「桃太郎」と「舌切雀」

共に實大圖である。

——九三頁及び一八〇頁參看——

である事は馬琴も燕石樓志(巻四)に考證してゐる。その腰折雀の本據は、朝鮮並びに蒙古に流布する腰折雀の童話と推定せられてゐる。朝鮮では、漢夫・興夫兄弟の童話(高橋亨氏著、朝鮮の物語集所収)として最も有名で、内地のよりは複雑化してゐる。蒙古のは相隣る家の二人の娘の話(鳥居さみ子女士著、土俗學上より觀たる蒙古所収)で、これは單純で日本のと甚だ近似してゐる。燕石樓志や嬉遊笑覽(巻九)に、搜神記及び續齊諧記に載する、揚寶が黃雀を助けた支那説話を、古切雀の本據と目してゐるが、朝鮮といふだけの(鳥居さみ子著)頁を參照——

無盡の米袋は如意寶(乳)實大圓(鳥居)は、談車志に見える孝子の米袋。日本でも今昔物語(巻十七)の生江世經(宇治拾遺物語(巻十五)に載す)「古切雀」(宇治拾遺物語(巻六)の飯山の貧僧の傳説に同じ)モティフが語られ、俵太半説(支那)等、怪物退治、俵太半(鳥居)も同じである。

腰折雀から古切雀に移つたのは、(鳥居)時代(鳥居)の事には、(鳥居)「古切雀」の他にも、「古切すゞめ」、又、青本に「古切すゞめ」、(鳥居)本に「古切雀」等の作があるので知られる。嬉遊笑覽に、正徳頃の作の「色芝居」に、「ちいとば」との昔話に、「舌きり雀の舌つきを面白がり」とあるのを(享保三年刊、國長作の浮世草子「猿渡氏色芝居」)のことで、同書卷一「果報を待つける舞子種」の章にこの文は見える)引いてゐるのも、その一證である。



雛豆本の「舌切雀」は卷末に「享保八年かの正月吉日、大傳馬三丁め丸屋九左衛門板」とある最小形の一冊本で(別圖参照)。

こゝに編ふく同おか五や夫ご太ゆふといふ親おや爺ぢ有けるが、むすめ娘おちよ千代をつれ山より路かへる道にて、すゞめ雀を買かいとりて、やど宿へかへるに、此すゞめ雀の綱りを食くいけるとなり。

と書起し、「しん八ほしいは」そのすゞめ雀にしほなめさせろ」したきり雀すゞめちよつ／＼とおむ迎かいに参まいりました」等の散語がある。前掲赤本と關係ある同系のものたることが知られる。但し、これでは婆が別に一人で雀の家へ出かけて蛇や化物の入つた葛籠を貰ふ普通の形になつてゐる點が異なつてゐる。

童話長篇にも作られてゐるが、井上淑蔭はなはけの擬古文「かくれ里」も舌切雀の童話を題材にしたものである。

これもまた雀のこゝろ酌みぞ知る狐の種の言葉ならねど 小山田與清

雀どのお宿はどこか知らねどもちよつちよと御座れさゝの相手に 蜀山人

福 富 長 者

人は身に應ぜぬ果報を羨むまじき事になむ侍る。昔福富の織部とて、長者一人侍りけり。如何なる過去の宿縁にや、身に生れつきたる藝一つ侍ひけるが、習はざるに奇特を現し、はからざるに名を發して、世の人、神の如くにぞ思ひける。その藝淺ましく誇せければ、上中下の人迄も、能く聞き知りて笑ひを催す事なりければ、自ら公方にも聞召し、もて興じ在しませける事斜めならず。されば富めるが上に富み、樂しきが上に樂しみて、棟に棟を争ひ、藏に藏を建てて、五の穀もの(一)耕さずして、庭に充ちくたり。

それが鄰にほくせう(二)の藤太とて、いと貧しきもの侍り。こは織部にひき代へて朝夕の煙も竈に絶え、とつの路草繁りつゝ、築地にあらぬ柴垣や、幔幕ならぬ薦垂れに、夜寒の床を明しかねつゝ、軒も垣をも、この爲に毀ち取りて、餘り寒さの風を入れける。夏はあさましき麻の衣古びて、破れ團扇にて蚊を拂ひ、軒の夕顔の華やかなるを慰めにて、明し暮すめる。幼かり

しより契りし人あり、藤太には十餘り姉にや侍りつらむかし。丈立すくよかに、顔付き荒まじく、口廣ければ、人、鬼姥とぞ申しける。鬼姥或日夫のほくせうに向ひて申しけるは、「士農工商の遊民は、一つ故づける藝の侍りてこそ、名を四方に耀かし、世渡るものにて候へ。あなさまし、そこは如何なる昔の戒行(三)の拙き、高身になす能の在せぬ事よ。いと口惜しとも口惜しや。打讀み走り書き、吹き囃し給ふ事こそならずとも、あの鄰の福富が一藝許りの事は、習はば何とか習はざらむ。さらば彼處に行きて、如何にも打敷きて、心を盡し師匠と仰ぎ、弟子ともなり給ひて習へよ。神變ある世ならば、あれ程にこそ在せずとも、世渡るばかりの方便、などかならざるべき。勝れて興に物し給はば、鄰の實は此方に充ち侍るべけれ。假令生れ付きたりといふとも、なさざる藝の長じ侍るはあらし。玉は研くに光あり、兎にも角にも習ひ給へ。それを承引き給はずば、御名残は惜しく候へども、姥には御暇出されば、顔の艶やかなる程に、如何なる縁も定め侍らむ」と、急かする。

ほくせう理に折れて、鄰に行き慇懃に畏まり、云々の事と云ふ。福富出で合ひて、「ようぞ宣ふものかな。我等も其許の朝夕の友なり。侍らましかりしかど、道は行いて教ふる事なければ、下り立ちて勤め參らせずして、斯う月日過ぎし」など、いと情々しう言添へ、懇に應待すべ

し。ほくせう畏まり、「扱もく有難の御好にぞものし給へ。日頃月頃鬼姥が責め侍りつれど、斯かる大事の御能を、左右なう他の家には傳へ給はじと、推量り思ひ侍りしかば、鬼姥が諫めをも用ぬずして、過ぎこし年月の悔しさよ。斯う憐み在しませしけるを、姥に語り喜ばせ侍らむ」と、手を束ねて居る。織部の心の中には、今更追従やと、憎きものから、可笑さ念じつ、「抑この一藝は、大事の薬の侍りて、服し、扱勤むる事に侍り。これが家の祕密なり。あな畏、人に語り給ふな」とて、何か有らむ、古りたる巻物取出でて、薬のちやうさ様を細々と語る。ほくせう、「さも侍らば、とても御好にその御薬、先一度の藝勤むる程賜はれよ。鬼姥が餘りに、せはしく申し侍るもうるさければ、近き程に一度振り出で、先づ手柄を仕う奉り侍るべし」と頻りに侘びる。福富さらばとて内に入りつゝ、黒く丸めたる薬二つ取り出でて、「これ構へて、空腹にすかせ給ふな。少しお腹をつくろひて、その藝をなさむと思ふ二時許り此方に、鹽湯ぬるぬるとして用の給へ。必ず不思議侍るべし。若し遅くとも、さのみ苛ち給ふな。餘りに藝の遅なはり侍らば、鹽に水汲み入れて、ゐ所を浸し、息を吹き給へ。止めたくば、息を呑み給へ」と教ふ。ほくせう喜びて、彼の薬を額に捧げ、暇乞して歸る。鬼姥待ち兼ねて、「如何に〜、習ひ給へりや。教へ給へりや」と云ふ。ほくせう微笑みして、云々と語りければ、姥喜ぶ事限

り無し。「今日の内に、さしも有るべき上つ方へ行きて、宣ふべきやうは、『福富の織部が師匠に、藤太の某。何とやうにも御好み候へ。御好みに隨ひて出し侍らむ』と高らかに案内し給ふべし。試みにこれにて聞きたう侍れど、僅に二粒の薬なれば、惜しう侍るぞかし。早々出立ち給へ」とせがむ。

斯くて妻戸の隅の皮籠より舊りたる烏帽子、柿の帷子、絹この袴取出して、ほくせうにうち着せつゝ、「露も臆し給ふな。こしうし、首さし仰ぎて云ひ入れ給へ」烏帽子の塵拂ひ、髪撫でつけ、前に立ち、後に廻りて云ふやう、「烏帽子着給ひたれば、初めて姥が親の許へ婿入し給ふやうに覺えて侍るぞや。なう〜、良い殿や〜」ほくせうは教への儘に二粒の薬を服して、道すがら腹筋張り引き吊りて神鳴の如く鳴りけるを、念じつゝ、ゐ所を据ゑて急ぐ。

今出川の中將、若き殿にて興じ給ふとも知りたるにや、彼處に行きて、云々と案内す。中將殿、「いと興ある事かな。この間は鬱氣にて、學問も怠り在しつるに、いとよかむなり」と、彼のほくせう御庭に召させて、鞠のか〜りに、圓座据ゑて、羹大御酒とり〜饗應給ひて、御階近う出で坐して、今やと御耳を傾けておはす。御簾の内には御妹の尙侍、祖母の尼前、御臺所、各々集ひ在しませしける。藤太腹は痛けれど、食物にのみ心入りたる、をかしゃ、さもし

や、餘り腰の引吊り、腹の痛むに堪へずして、立ち出でむとしけるが、取り外して、さとはらし侍れば、水彈の如し。白洲は、さながら山吹の花の散り敷きたるやうにて、井出の築も斯くやあらむと思す。俄に風吹き立ちて、御殿も、御階も、匂ひ満ちて淺ましといふ許りなし。桃尻(9)を据ゑて、走りて逃げむとしけるを、座敷の隨身下り立ちて、笞杖振り上げて打ち伏せつ。いと黒き所を引き開けられて、熟めるを、烏帽子髪引立て、漸々御庭を追出す。(下手のおならこき奴や、斯かる狼藉、打てやく。破れし頭より、御かわくたりに血をあへして、立田川の秋(10)に異ならずかし。九獻にこそ酔ひつらめ。熟柿臭さも増して侍るぞかし。あら臭や臭や(11)平に打引裂かれたる烏帽子、片つぶりに着なし、袖も袂も赤に染みて、はふく歸りぬ。晝中の姿あら恥かしや。道すがら目なしどり、軒の雀追ふ童も、手さし指さして笑ふ。叩かれたる腰の骨も、擦剝けし膝の頭も、堪へ難ければ、町や棚では、尻もかけまほしけれど、淺ましげなれば、人寄せもつけず、腰ひき振ぢく歸る様、何に擬らへむ。(おちほの町より覗きて笑ふ所。あれを見てはこ(12)垂れさせな。ねんくねんね、不思議や。いかう臭きは、若し科戸の風(13)や吹きつらむと思へば、齧き匂ひぞや)

鬼姥斯かる事とも知らず、日も長けぬるまゝに、門に立ち、延び上りく大路を見やりて、

待ち焦るゝに、二町許りの彼方に來るを見つけて、「すはや此處へ人數多具して歸り在せるは、御送りの人々にや。公に如何に興じ在りましたらむ」近づくまゝに、赤き小袖をうち着て歸り給ふよと思へば、いと嬉し。猶待ち焦れて内に走り入りつゝ、云ふやう「あな見苦しきこの程の古小袖よ。今よりは長者になり給ふべければ、斯かる破れ衣よも召さじ。嫂にも孫にも何しに着すべき」と、引落し火吹き立てて、めらめらと焼き棄てつ。孫は惜しやと云へど、聞きも入れず、嫂はさこそと喜べど、猶訝しう鼻は塞ぎて、呆れ居る。藤太は着類焼かれて裸になり、顫ひわなきて、言譯するも聞えず。我と身を抱きて竦み居る。黒くふくつみたれど、ほくせうの名に負へる姿ぞかし。北殿(14)の妙西は、訪らひ來つゝ「云ふ言の葉無や。南無阿彌陀、南無阿彌陀」とて歸るも忌々し。



福富草子繪卷

て、首差延べて待ち居る。(あな煙たく、煙は姥にや惚れつらむ。しつこの煙や、そちへ行けく)ほくせう辛うじて歸りぬ。赤きべかど見しは、頭にあへせし血なりけり。眞黄な袴は、垂れたる物なり。手觸るゝ事ならねば杖にかけ、顔は鞞め

鄰のおこらは、蕭牆だつ物の破れより覗きて、笑止がれど、おろどの邊に目をぞ付くる。斯くてその夜も明くる日も、腹の痛み名残ありて、夕の煙はる所に立ち、野邊の蟲の音は腹に鳴く。降りみ降らずみ、うち時雨れたる空の様にしよんちよ(15)としけり。下腹さしつゝ、こときりく痛む。「あな腹々」と云ふ聲も、息の下なれば、鬼姥は憎けれど、流石にわりなき中なれば、皺多き手を暖めて、腹をさすれば、ほ(16)の内より淺ましき香出でて、何やらむ、にやにやとするもむつかしや。詮方無きに、うつ伏しに伏せて、背中に上り、いかにとり付きて、腰の骨を踏み、負ひたる孫はい振られて、何心なく笑ふ。尿にや涎にや、鬼姥が背中より裾くだり流しかけ、太股しくめく(17)は、ほくせうが腹癢を早宵りつるにやと覺ゆ。猶憤り止まで、川邊に出でて身を清め、麻切り懸けて南に向ひ、「南無歸命頂禮三所權現(18)、夫のほくせうに恥見せし福富の織部を、命のうちに取り給ひて、憂き目を見せさせ在しませ」と、數珠ことくしう押揉みて、呪々しう祈る。その信心神にや通じけむ、熊野の方より嘴太の鳥一つ飛び來て、麻の前に羽を垂れて鳴く。扱は願ひ叶ひたり。姥は歸りけり。

日に添ひ夜に添ひていと弱り、今は廁の通ひさへならざれば、高き足駄を足に着て、庭にもこよひ(19)砧の盤に凭れて、散らすこと夥し。喉乾きて湯水を乞ふ事隙無ければ、「姥賜へ、姥

賜へ」童のやうに甘えて呼ぶ。吞める湯水はその儘下す。斯くていたう寢れ、ふくやかなりつる顔ばせも瘦せくと眉の程いと黒み落ち入りたり。斯くて命も危かりぬべしとて、典藥頭和氣清磨がり行きて、云々と云ひ嘆きければ、「慈悲の家には上下厭はず」とて、聽て出で合ひて、事の様子尋ねて、藥調じて賜びしにぞ、鬼姥も少し息を延べたり。

扱福富が欺罔りけるよと思ひ合はせて、憎さのみ彌増しに増しければ、如何にもして恨みむと、かけて待つ程に、人の情は合ふ中(20)とて、織部うち續き夢見惡しければ、夢解く人に解かするに、「七日の物忌、門閉ぢて人に會ふべからず」と云ふに、「あな窮屈、只斯かる事は、神社の轉じ變へ給ふ」とて、朝疾く物に詣でける。鬼姥聞きつけて人さ(21)の隈くり待ちかけて、織部を見るよりも、犇々と掴み付く。その様魍魎(22)鬼神も斯くやあらむ。いと恐しとも恐しや。福富は流石に男子なれば、姥が手をもぎ放ちて、逃げ延びけれど、追ひ掛けて頬の邊に噛み付くと等し。斯くて歸る様は人嚙犬より凄じ。目は倒まに切れ、口は耳の根まで廣ごりて、息巻く。蛇體にやなりつらむと、道來る人は、鬼の人喰ふこと、あな恐しとて、逃げ侍るもあり、又珍らしとて見る人も侍りけり。

(御伽草子、福富草子)

註 (1)米・麥・黍・粟・豆の五穀。(2)乏少(ばふせう)の轉か。(3)前世の持戒修行。(4)吹笛、即ち音樂

の藝能。(5)臀部。(6)腰伸(の)しの誤か。(7)蹴鞠する場所。(8)山城國の山吹の名所。その玉川に懸けた築に花の散りかゝつた様子。(9)尻の落ちつかぬこと。(10)ちはやぶる神代も聞かず立田川韓紅に水くゝるとは(古今集卷五、秋下、在原業平)。(11)内は原繪卷の散語。(12)糞。(13)風のこと。風神級戸邊命の名から來てゐる。(14)北隣。(15)未詳。悄然の意か。(16)懷中。腹。(17)濕ふ。(18)紀州熊野の本宮新宮・那智の三社。(19)のたくる。(20)俚諺。人の一心は自ら感應するの意。(21)人のざわめき。(22)山川の精靈。

【解説】

これも物美み話である。流布本(新編御伽草子所收)は前掲の通りであるが、別に二卷本の繪卷があつて、それでは藝能者の名が福富ではなくて、隣人の美み手の方が福富と云ふ名になつてゐる。大體は同じ話であるが、その梗概は黒川春村の古物語類字鈔(卷下)に次の如く見える。

福富草紙　こは高向秀武といふ者かうしきし秀武とも見ゆ。何師といふにか可考。年老い貧しかりしに、妻の勤めに随ひて道祖神を祈りたりしに、小柑子許りなる鐵鈴を賜はると靈夢の告を蒙りぬ。扱その妻の合はせて云はく、「身の内より聲の出で來て、それによりて幸を得む」と云へり。然るに可笑しく屁ひる事を習ひて、何某の中將殿に召され、綾錦黄金等を賜り、いみじき

福人となり榮えぬ。是迄は上卷なり。扱この隣に七條の坊長福富と云ふあり。これ將た貧しかりけ

れば、その妻隣をいたく美み、この男に勧めて秀武が弟子とし習はせて出しやりしに、この福富は尿まり散し、打懲されて歸りこしかば、その妻いたく恨み怒りて、秀武を責めさいなむ由を書けり。是迄を下卷としたり。

病的の放屁癖が唯一の能だつた屁ひりの判官代の話が、古今著聞集(卷十六、興言利口)に出てゐるが、これは更にそれを積極的にしたとも云ふべき、放屁の藝能を職業にした男の話といふのが奇抜である。近世にもさういふ職業人が實際居た事は、風來山人の放屁論や菴葭堂雜錄(卷三)でも知られる。安永三年曲屁福平と云ふ者が、兩國や道頓堀で屁の曲撒り興行をしたといふ事實がそれである。

この童話が恐らく花咲爺童話の前身であらう。兩者の類似は燕石襟志(卷四)、嬉遊笑覽(卷九)にも指摘してある。放屁論に、右の福平が昔語花咲男と書いた幟を立てて興行した由を記してある點も、花咲爺への轉化を暗示するものである(次項参照)。

ついでに、放屁癖のある人物を取扱つた假作物語には、佛雛上人といふ聖の傳を綴つた伴林光平の戯文楯の落葉物語がある。

花 咲 爺

中昔の事、或田舎に、正直爺婆と慳貪爺婆と住みけり。正直婆川へ洗濯に出でけるが、折節川上より小狗一匹流れ来る。正直婆不憫に思ひ、彼の小狗を拾ひ歸り、可愛がり育てけり。慳貪婆も川へ洗濯に出でけるが、川上より飯櫃流れ来る。素より貪慾深き婆なる故、飯櫃拾ふ。

小狗大きくなり、爺婆に懐き、或時狗が云ふやう「此處を掘つて見給へ」とて教へけり。狗の教へし處を掘りければ、金銀錢夥しく出でけり。

婆「狗に飯を食はせませう」爺「さて／＼大分な小判かな。これでは眞の狗様だぞ」慳貪爺美ましがる。慳貪爺「己等も狗をちつと借りませう」

慳貪爺狗を借りて、背中に鋤鍬を付け、彼方此方と追廻す。狗草臥れて、蹴躓きし處を、金在りと心得掘りければ、様々の糞出づる。(糞を掘り出す)

小狗「無理な爺さんだ。キヤン／＼」慳貪爺「憎い畜生奴だ、打殺して此處へ埋めるぞ」慳貪婆「爺さんまつと打たつしやい」

慳貪爺大分腹立ちて遂に狗を擲き殺す。

慳貪爺隣の狗を借りて打殺し、標に松の樹を植ゑて置きけり。正直爺悲しがり歎く。

慳貪爺泣く事は御座らぬ。狗を殺した代りに松の樹を遣るから、此方の好きに召されろ

正直爺松の樹を伐り、臼を拵へんと云ふ。

花 咲 爺



爺親せか咲花に木枯 本 赤

正直爺松の樹を伐り白を拵へ、團子を碾き、小狗に手向けむと云ふ。正直爺婆白を碾きける時、不思議や粉に混りて金銀碾き出す。

正直爺「婆や、これにつけても狗の事が思ひ出されて不憫でおじやる」正直婆「さればく、隣の爺殿は苛酷いく」

慳貪爺又隣の白を借りて碾きけるに、黄金は出でずして、種々の糞を碾き出しけり。腹を立ち、打碎き火に燻べる。

慳貪婆「剛腹な、こんな白は薪にしたがよう御座る。幸ひ薪が無かつた」正直爺「せめてこの灰でもよこさつしやい。入ります」慳貪爺「澤山持つて行くまいぞ」

正直爺その灰を箆に入れ、我が家へ歸る。

正直爺彼の灰を持ち枯木に上り、花咲かせんと云ふ。斯かる所へ御大名通らせ給ひ、御所望ありければ、爺種々の花咲かせる。

正直爺「扱唯今咲かせまするは、櫻に霧島・百日紅・茶山花と御目に懸けます」パツくく。家來「いよくをやはないか」大名「扱も不思議な。それ褒美取らせよ」家來「畏りました」

正直爺枯木に花咲かせて、御褒美大分貰ひ、夫婦嬉しがる。

正直婆「此頃にあつと田地を買はつしやい」正直爺「光る小判の」慳貪爺體を見て羨む。慳貪爺「此方衆は二人で旨い話ばかりするの。私も明日から花咲かせに出ませう。花が咲けばよいが。あゝその金が欲しい」正直爺「先づ出て見さつしやい。善い事もあらう」

大名「憎い奴の。花は咲かせいで眼へ灰を入れ居つた」家來一「已大騙奴。何故旦那の眼へ灰を入れ居つた」家來二「其奴絞殺ませう」家來三「赤い着る物着たやうにして歸ませう。泥棒奴が」慳貪爺「御許されませう」慳貪爺打殺さるゝ。

正直爺婆心素直なる故、天道の惠厚く、枯木に花も咲き、何闇からず有徳にて一期榮えけり。正直爺「己は偏に、花の咲いたお蔭で金儲けし申した」正直婆「金がだんく殖えて、二千兩

になりましたの。嬉しや〜」

註 (一) 富裕。(二) 一冊。寶曆頃の刊行か。

(赤本、枯木に花咲かせ親爺)

【解説】

五大國民童話の一。やはり物羨み話。本童話の成形は室町末頃か。江戸時代初期の赤小本に「めいよの翁かれきに花さく、赤本に「花さおい樂の榮華」枯木に花咲かせ親爺」「花さきぢ〜」等の作が續出してゐるに知られる。福富草子との關係は前項に述べた通りである。(特に前掲赤本の、各種の花を咲かせると、「赤い着る物云々」の語とは、福富草子との關係を一層よく示してゐるやうに見える。花のいろ〜を咲かせるのは、曲屁の花咲男と亦全然同斷である)

併しそれは説話の後半だけで、前半犬の報恩譚は今昔物語(卷二十六)所載の參河郡司が妻の飼犬や、古事談(第六)・宇治拾遺物語(卷十四)等所載の御堂關白の白犬の話等の流れをも引くものであらうが、同時に同型の朝鮮童話(三輪環氏著、傳説の朝鮮、「愚兄賢弟」とも必ず交渉あるべく、又酉陽雜俎續集の旁世の童話(童話篇、瘡取解説参照)も種類を爲してゐ、それは又右の今昔の説話とも相通する點もある。

本童話は童話長篇にも作られ、又、武者小路實篤氏の作に童話劇「花咲爺」がある。

如何なれば彼の男、昔言ひ傳へし階子屁・數珠屁は言ふも更なり、碓きなた・すがゞき。

三番叟・三つ地・七草・祇園囃ばやし・犬の吠聲なきごゑ・鶏屁・花火の音は兩國を欺き、水車の

音は淀川に擬す。道成寺・菊慈童はうた・端歌はうた・めりやす・伊勢音頭いせのうた・一中いちゅう・半中はんちゅう・豊後節。

土佐・文彌・半太夫・外記・河東・大薩摩・義太夫節の長き事でも、忠臣藏・矢口

の渡望み次第、一段づつ三絃さんげん・淨瑠璃に合せ、比類なき名人出でたりと、聞くより

も見ぬ事は咄しにならずと、いざ行きて見ばやとて、二三輩打連れて、横山町より

兩國橋の廣小路を渡らずして右へ行けば、昔むかし語がたり花咲男はなさきと、事々しく轎を立てて、

僧俗男女押合ひへし合ふ中より(中略)木戸をはいれば、上に紅白の水引引き渡し、

彼の放屁男は難方と共に小高き所に坐す。その爲人中肉にして色白く、三日月形の

撥鬢はちげん奴やつこ、標はなだの單ひとへに緋縮緬の繻絆、口上爽やかにして憎氣なく、囃ばやしに合せ、先づ最

初が目出度く三番叟屁トツパイヒヨロ〜、ピツ〜と拍子よく、次が鶏

東天紅とうてんこうをブウ〜と放り分け、その後が水車ブウ〜と放りながら、己おのが身を

車返り、さながら車の水勢に迫り、汲みては移す風情あり。

(放屁論)

鉢 か づ き

中昔の事にやありけむ、河内の國交野の邊に備中の守さねたかと云ふ人ましくけり。數の寶を持ち給ふ。飽き満ちて乏しき事も坐さず。詩歌管絃に心を寄せけるが、花の下にては散りなむ事を悲しみ、歌を詠み詩を作り、長閑けき空を眺め暮し給ひける。北の御方は古今・萬葉・伊勢物語、數の艸子を御覽じて、月の前にて夜を明し、入りなむことを悲しみ、明し暮し給ひつゝ、心に残る事も無し。鶯のむすび隔つことも坐さず。思ふ儘なる御中なるに、御子一人も無し。朝夕悲しみ給ひしに、如何なる事にや、姫君一人設け給ひて、父母の御喜び申す許りは無かりけり。斯くていつき傳き給ふ事限り無し。明暮觀音を信じ申されける程に、長谷の觀音に参りては、彼の姫君の末繁昌の果報あらせ給へとぞ祈り給ふ。

斯くて年月を経る程に、姫君十三と申せし年、母上例ならず風の心地と宣ひて、一日二日と申せし程に、今を限りに見えければ、姫君を近づけて、緑の髪さしを撫で上げ、「あら無慙やな、

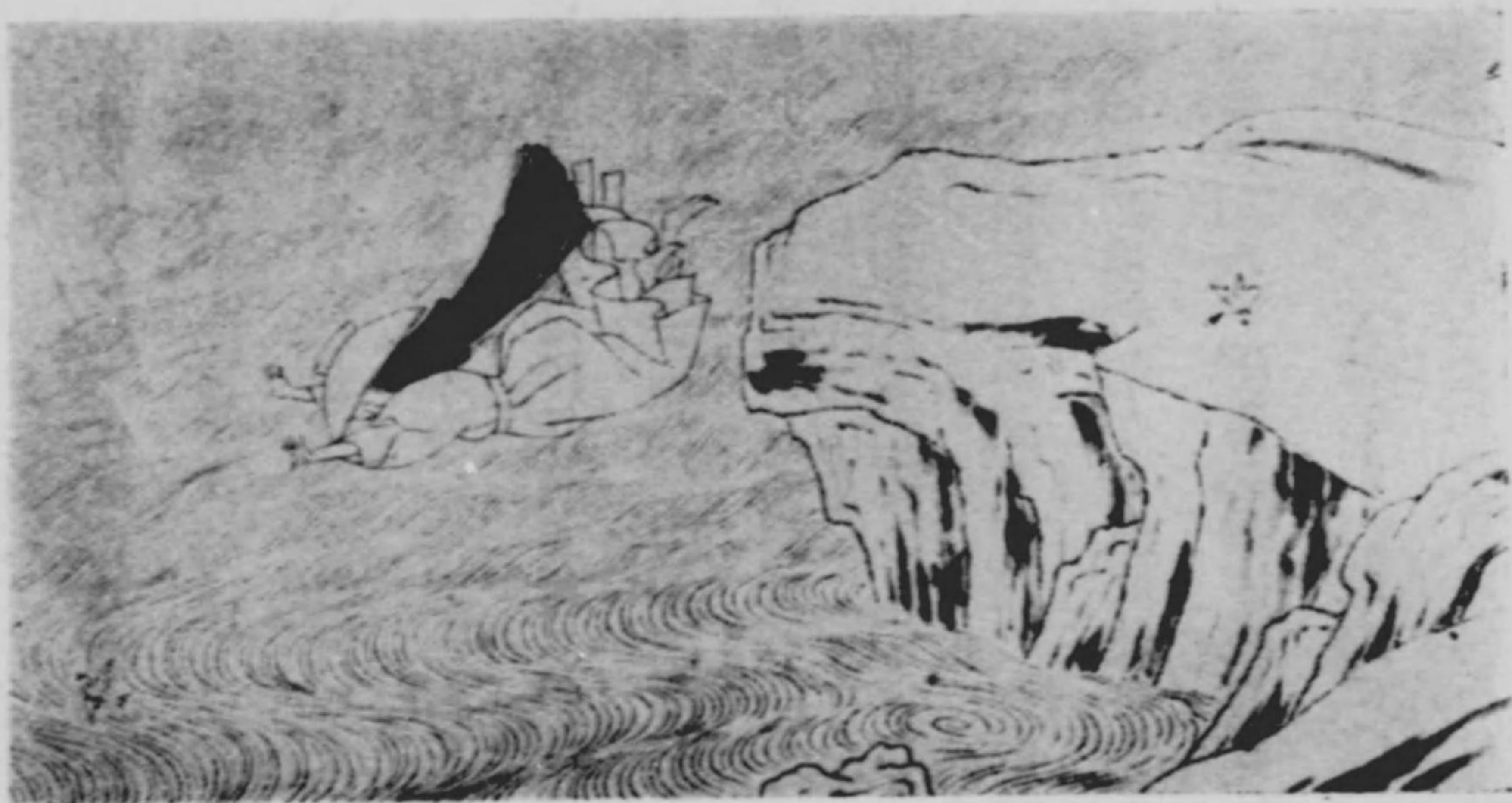
十七八にもなし、如何なる縁にも付け置き、心安く見置き、兎にも角にもならずして、幼き有様を捨て置かむ事淺ましさよ」と涙を流し給ふ。姫君も諸共に涙を流し給ひける。母上は流るゝ涙をおし止め、側なる手筈を取り出し、中には何をか入れられけむ、世に重げなるを姫君の御頭に戴かせ、その上に肩の隠るゝ程の鉢を着せ参らせて、母上斯くこそ詠じ給ひける。

さしも草深くぞ頼む觀世音誓ひの儘に戴かせぬる

斯やうに打詠め給ひて、遂に空しくなり給ふ。父大きに驚き泣き給ひて、「幼き姫をば何とて棄て置き、何處とも知らず斯くなり給ふ」と、泣き給へど甲斐ぞなき。斯くてさしてあるべきならねば、名残盡きせず思へども、空しき野邊に送り捨て、花の姿も煙となる、月の容は風となり、散り果つるこそ痛はしけれ。斯くて父御前姫君を近づけ参らせて、戴き給ひたる鉢取らむとしけれども、吸ひ付きて更に取られず。父大きに驚きて、「如何はせむ、母上にこそは離れ参らせめ、斯かる不具の付きぬる事の淺ましさよ」と、歎き給ふ事限り無し。斯くて月日をたてければ、後の孝養に取行ひ給ふ。思ひは姫君の御前にこそ留まりけれ。春は軒端の梅が枝の、櫻は咲きて梢まばらの青葉とぞ、名残惜しくは思へども、又來む春を待ちて咲く。月は山の端に入りぬれど、今夜の闇と隔つれど、又來む夕に出で給ふ。別れし人の面影、夢路にだにも定かなら

す。何時の日の何時の暮にか別れ路を、如何なる人の踏み初めて、現にも逢ふ事なかるらむ。思ひ廻せば小車の、遣る方もなき風情かなと、他の見る目も哀れなり。

さる程に父御前の一族、親しき人々寄り合ひて、何時迄男子の獨り住み難しと、「この袖枕、歎き口説き給ふとも、その甲斐はよもあらず。如何なる人をも語ひて、憂きに別れし餘波をも慰み給へ」と勧められ、先立つ人は兎に角に、残る憂き身の悲しさよと、思ひ言も由無しとて、「兎も角も御計らひ」とありければ、一門の人々喜びて、さるべき人をと尋ね、元の如く迎ひ取り、移れば變る世の中の、心は花ぞかし。秋の紅葉の散り過ぎて、その面影は姫君ばかりぞ歎かる。斯くて彼の繼母、この姫君を見奉りて、「斯かる不思議の不具者、浮世にはありける事よ」とて、憎み給ふ事限り無し。扱繼母の御腹に、御子一人出で來給へば、いよくこの鉢かづきを見じ聞かじと、なみの起居の事迄も、虚言のみばかり宣ひて、常には父に讒訴申す。鉢かづきは餘り遣る方なき儘に、母の御墓へ詣りて、泣く泣く申させ給ふやう、「さらでだに憂きに數添ふ世の中の、別れを慕ふ涙川、沈みも果てすながらへて、あるに甲斐なき我が身ぞと、思ふにいと不思議なる不具の付きぬることの恨めしさよ。繼母御前の憎み給ふも理なり。親しき母上に捨てられ參らせ、我が身何ともなりての後に、父御前如何御歎きのあるべきと思



鉢かづき

中 村 岳 陵 氏 筆

ふばかりを、心苦しく思ひしに、今の御母に姫君出で來給へば、早思召し置かむ事も無し。繼母御前の憎み給ふ故、頼みし父疎かなり。今は甲斐なき憂き身の命、疾くして迎ひ取り給へ。同じ蓮の縁となり、心安くあるべき」と、流涕焦れて悲しみ給へども、生を隔つる悲しさは、さぞと答へる人も無し。

繼母この由聞き給ひて、「鉢かづきが母の墓へ詣りて、殿をも自ら親子をも呪ふことこそ恐しけれ」と、眞をば一つも言ひ給はず、虚言許りを父に度々言ひければ、男心の敢なきは、眞と思ひ、鉢かづき呼び出し、「不道の者の心やな。あらぬ不具の付きぬるを、よに痛はしく思ひしに、咎も無き母御前、兄弟を呪ふ事こそ不思議なれ。不具者を内に置きては何かせむ。何方へも追ひ出し給へ」と宣へば、繼母これを聞きて、側へうち向きて、さも嬉

しげなる風情ふうせいして笑ひける。扱痛あつはしや鉢はちかづきを引寄せて、召したる物を剥ぎ取りて、淺あましげなる帷子かたびら一つ着せ參らせ、或野の中の四つ辻へ捨てられけるこそ哀れなれ。扱あこは如何なる浮世ぞと、暗に迷ふ心地して、何處いづくへ行くべきやうも無し、泣くより外の事は無し。稍いさ々いさ暫しばしありて斯くなむ、

野の末の路踏み分けて何處いづくとも指して行きなむ身とは思はず
とうち詠なめ、足に任せて迷ひ歩き給ひけるに、大きな河の端はたへうち着き給ふ。此處こゝに立ち止まりて、何處いづくを指して行くともなく迷ひ歩あかむより、この河の水屑みづくづとなり、母上の在まします處へ参りなむと思召して、河の端へ覗のぞき給へば、流石たぎら幼なき心の敢あなさは、岸打つ浪も恐しや。瀬の白浪烈はしくて、そこはかとなき水の面おも、凄あじければ如何あらむと思へども、これを心の種たねとして、既に思ひ切り、河へ身を投げむとし給ふ時、斯くこそ一首連ねけり。

河岸の柳の絲の一筋に思ひ切る身を神も助けよ

斯な様に打詠なめ、御身を投げ沈めけれども、鉢はちに引かれて御顔ばかり差し出でて流れける程に、獵れする船の通りけるが、「此處こゝに鉢はちの流れける、何物ぞ」と言ひて上げて見れば、頭かしらは鉢はちにて下は人なり。舟人これを見て、「あら面白や、如何なる者やらむ」とて、河の岸へ投げ上ぐる。稍いさ々いさ

暫しばらくありて、起き直りつくくと案あじ、斯くばかり、

河波の底にこの身の留とまれかしなど再びは浮き上りけむ

などと打詠なめ、あるにあらぬ風情して、辿り兼ねてぞ立ち給ふ。扱ああるべきにあらざれば、足に任せて行く程に、或人里に出で給ふ。里人これを見て、「これは如何なる者やらむ。頭かしらは鉢はち下は人なり。如何なる山の奥よりか、久しき鉢はちが變へん化げして、鉢はちかづいて化けけるぞ。如何さま人間にては無し」とて、指をさして恐しがりて笑ひける。或人申しける様は、「假令化物にてもあれ、手足の外ほかれの美しさよ」と、とりくくに申しける。

さる程に、その處の國司くわんじにて坐ます人の、御名をば山蔭の三位中將とこそ申しける、折節せんせつ縁えん行道だうして四方よもの梢を眺めつゝ、霞あに遠里とほざの賤せが蚊遣火さしも草、そこひひに薰くる薄煙うすけぶり、上の空にてたち靡なき、面白かりける夕暮は、戀する人に見せばやと、眺め出して立ち給ふ處に、彼かの鉢はちかづき歩み寄る。中將殿は御覽じて、「あれ呼び寄せよ」と宣へば、若侍共二三人走り出で、彼の鉢はちかづきを連れて参る。「何處いづくの浦如何なる者ぞ」と宣へば、鉢はちかづき申すやう、「我は交野かたのの邊へんの者にて候。母に程なく後れ、思ひの餘りに斯かかる不具ふぐさへ付きて候へば、憐あむ者も無き儘に、難波の浦に由無しと、足に任せて迷ひ歩あき候」と申しければ、扱あ々あ不憫ふみんと思召し、「戴かき

たる鉢を取り除けて取らせよ」とて、皆々寄りて取りけれども、しかと吸ひ付きてなかく取るべきやうもなし。これを人々御覽じて、「如何なる曲者ぞや」とて笑ひける。

中將殿は御覽じて、「鉢かづきは何處へぞ」と宣へば、「何處とも指して行くべき方も無し。母に離れて結句斯かる不具さへ付き候へば、見る人毎におぢ恐れ、憎がる人は候へども、憐む人は無し」と申しければ、中將殿聞召して、「人の許には不思議なる物の有るもよきものにて候」と宣へば、仰せに従ひて置かれける。「扱身の能は何ぞ」と宣ひければ、「何と申すべきやうも無し。母に傳かれし時は、琴・琵琶・和琴・笙・箏・筆・筆・古今・萬葉・伊勢物語・法華經八卷、數の御經共讀みしより外の能も無し」と扱は能も無くば、湯殿に置け」とありければ、未だ習はぬ事なれど、時に従ふ世の中なれば、湯殿の火をこそ焚かれけれ。明けぬれば見る人笑ひ廻り、憎がる人多けれども、情をかくる人は無し。明暮、「御行水よ、鉢かづき」とて、三更四更も過ぎざるに、五更の天も明けざるに、責め起されて、痛はしや、ふし馴れぬ篠竹の、己れと雪に埋れて、伏し倒れたる風情して、もの敢なげに起き直る。思ひを柴の夕煙、立つ名をも苦しと打眺め、「行水は沸き參らせ候。早取り給へ」と催促する。暮るれば、「御足の湯沸かせや、鉢かづき」と下知をする。憂き身ながらも起き上り、亂れた柴を引き寄せながら、斯くこそ連ね給ひける。

苦しきは折り焚く柴の夕煙憂き身と共に立ちや消えまし⁽¹⁰⁾

と、斯様に打詠め、如何なる因果の報にや、斯かる浮世に住み初めて、何時迄命ながらへ、斯程に物を思ひねの、昔を思ひ井出の里、胸は駿河の富士の岳⁽¹¹⁾、袖は清見が關なれや、何時迄命ながらへて、憂きには絶えぬ涙川、流れて末も頼まれず、菊の裏葉に置く露の、何となり行くこの身ぞと、獨り口説きて、斯くばかり、

松風の空吹き拂ふよに出でてさやけき月を何時か眺めむ

斯様に詠じ、足の湯をぞ沸かしける。

さる程にこの中將殿は御子四人持ち給ふ。三人は皆々ありつき⁽¹²⁾給ふ。四番目の御子、宰相殿御曹司と申すは、眉容世に勝れ、優にやさしき御姿、昔を申せば源氏の大將・在原の業平かとぞ申す許りなり。春は花の下に日を暮し、散りなむ事を悲しみ、夏は涼しき泉の底、玉藻に心を入れ、秋は紅葉落葉の散り敷く庭の紅葉を眺め、月の前にて夜を明し、冬は蘆間の薄氷、池の端に羽を閉ちて鴛鴦の浮寝も物淋し。重ぬるつまもあらばこそ、獨りすさみて立ち給ふ。御兄達も、殿上⁽¹³⁾も御湯殿へ入らせ給へども、彼の御曹司ばかり残らせ給ひ、小夜更けて遙かになりて、獨り湯殿へ入らせ給ふ。彼の鉢かづき、「御湯移し候」と申す聲優しく聞えける。御行

水とて差出す手足の美しさ、尋常げに見えければ、世に不思議に思召し、「やあ鉢かづき、人も無きに何かは苦しかるべき。御湯殿して参らせよ」と宣へば、今更昔を思ひ出して、人にこそ湯殿させつれ、人の湯殿をば如何するやらむと思へども、主命なれば力無し、御湯殿へこそ参りける。御曹司は御覧じて、河内の國は狭しと雖も、いか程の人をも見てあれども、斯程に物弱く愛敬世に勝れ、美しき人は未だ見ず。一年花の都へ上りし時、御室の院(14)の花見の有りし時、貴賤羣集して門前に市をなすつれども、その時にもこの鉢かづき程の人は無し。如何に思ふとも、この人を見捨て難しと思はれける。「如何に鉢かづき、思ひ初めにし紅(15)の、色は移るふことなりと、君と我が中變らじ」と、千秋の松に契りを遙かに懸け、松の浦の龜に久しく結ばれける。今より後は彼の鉢かづきは、軒端の梅に鶯の、又離れ得ぬ風情して、兎角返事をも宣はず。

重ねて御曹司は、「これやこの龍田にはあらねども、くちなし色に譬へつゝ、物をいはねの松やらむ、引き捨てられし琴の音の、他に引く手もあるやらむ。若し文重なる方もあらば、逢はで空しく消ゆるとも、君故ならばなかく、恨みと更に思ふまじ。如何に」と宣へば、野飼ひの駒の人馴れで、心は猛く思へども、妹背の川の中だちに、よしやあしやを知らざれば、何と申さむ言も無し。他に引く手もあるやらむと、宣ふ事の恥かしさに、「調べの絲皆切れて、

他に引く手も候はず。波の起居(16)に悲しきは、空しく別れし母の事、扱はこの身の冴えやらで何時迄命ながらへて、あらぬ浮世に墨染の、色にもならぬ怨めしさを、歎き侍りける」と申しければ、宰相の君は聞召し、實にも理なりと思召して、重ねて仰せあるやうは、「さればとよ、有爲轉變の世の中に生れあひぬる敢無さよ。憂きは報と知らずして、神や佛を怨みつゝ、明し暮して過すなり。御身も先の世に、野邊の若木の枝を折り、思ひし中をおし隔て、人に歎きをせさせつる報の程の事ありて、親にも早く後れつゝ、未だ幼き心に物を思ひ寝の、涙床(17)暖く風情なり。自ら二十の境界迄、定むる妻は未だ無し。獨り片敷く轉寢の、枕淋しく住む事も、先の世に御身と契り深くして、その業因の盡きねばこそ、廻り／＼て兎に角に、今此處に在すらむ。世に美しき人なれど、縁無き方へは目も行かず、御身に縁があればこそ、斯く迄深く思はるれ。思ひ初めにし昔より、今逢ふ迄の言の葉こそ、末頼もしく思はるれ。鯨の寄る島、虎伏す野邊、千尋の底、五道輪廻(18)の彼方なる、六道(17)四生(18)の此方なる、妹背の川の水上の、涅槃の岸は變るとも、君と我が中變らじ」と、深く契りを籠め給ふ。

扱鉢かづきは漕ぐ舟の居る風情して、君の仰せの強きまゝ、思はぬながら靡き初め、その夜は此處にふし竹の、世々の契りも鐵の、末如何ならむ我が思ひ、知られぬその先に、何處へ

も足に任せて出でばやと、かき昏し思はれける。哀れなれば、宰相殿は、「如何に鉢かづき、さ程何を敷かせ給ふぞよ。見初め馴れにしよりも、露塵程も疎かに思ふまじ。暮れなばやがて参りなむ」と、晝も折々通ひ、「これを見て慰み給へ」とて、黄楊の枕と横笛を取り添へてぞ置かれける。その時いと恥かしさは、遣る方も無し。「我が人の様にもあらばこそ、人の心は飛鳥川(19)夜(20)の間に變る習ひのある迄も、頼まむとも思ひなむ。あるに甲斐なき有様にて、見えぬる事の恥かしさよ」と、かき昏し泣き給ふ。御曹司は御覽じて、この鉢かづきの風情を、物に能く々々譬ふれば、楊梅桃李の花の香に、雲間の月のさし出でて、二月半ばの絲柳の、風に亂る粧ひも、籬の内の撫子の露重げに物弱く、恥かしげにて側みたる、顔の愛敬の美しく、楊貴妃・李夫人もいかでか是れに勝るべきと、不思議に思召しける。同じくはこの鉢を取り除けて十五夜の月の如くに見る由もがなとぞ思はれける。扱若君は湯殿の傍の柴つむ臥戸を立出でて、我が御方へ歸りつゝ、軒端の梅を御覽じて、何時しか鉢かづき如何に淋しく思ふらむ。今日の暮るゝを待つ程は、住吉の根ざし初めにし姫小松、千代待つよりも尙久しくぞ思はれける。鉢かづきは黄楊の枕と、御笛を置くべき處のあらざれば、持ち煩ひて居たりける。斯くて漸々東雲も明るると告ぐる關路の鳥(21)まだ横雲も引かざるに、「御行水よ。鉢かづき」

と責められて、「御湯は沸き候。取らせ給へ」と答へつゝ、鬱せき柴を折りくべて、斯くこそ詠じけれ、

苦しきは折り焚く柴の夕煙戀しき方へなど靡くらむ(22)

と打詠めければ、湯殿の奉行聞きつけて、かの鉢かづきは頭こそ人には似ず、物言ふ聲色笑ひ口、手足の外れの美しさは、これに疾くから住ませ給ふ御女房衆も、究めてこれには劣りなり。近づきて彼の人と契らばやとは思へども、頭を見れば濛々として、口より下は見ゆれども、鼻より上は見えもせず。朋輩衆にも笑はれ、なか／＼恥かしやと、思ひも寄らぬぞ理なる。さる程に春の日永しと思へども、その日も漸々紅の、黄昏時や夕顔の、人の心は花ぞかし。彼の宰相の君、何時よりも華やかに装束して、湯殿の傍の柴の臥戸に佇み給ふ。鉢かづきこれを知らずして、暮はと契りし契言の、早宵の間も打過ぎぬ。人を咎むる里の犬、聲する程になりにけり。來む迄との形見の枕と笛竹を、取添へ持ちて斯くなむ、

君來むとつげの枕や笛竹のなど節多き契りなるらむ

と打詠めければ、御曹司とりあへず、

幾千代と臥し添ひて見む吳竹の契りは絶えじ黄楊の枕に

扱宰相殿は比翼連理と淺からず契らせ給ふ。包むとすれど紅の、洩れてや人の知りぬらむ。「宰相殿こそ、鉢かづきが許へ通はせ給ふ淺ましきよ。もとより高きも賤しきも、男はある習ひ、立寄り給ふとも、あの鉢かづきが近づき参らせむと思ふ心の不得心さよ」と、悪まぬ人は無かりけり。或時外より客人來り、夜更け方迄暇入り、遅く入らせ給ひければ、鉢かづき覺束なく思ひて、斯くばかり、

人待ちてうはの空のみ眺むれば露けき袖に月ぞ宿れる

と、斯様に打詠めければ、いよ／＼優しく思召し、契り深くはなりけれども、捨つべきやうは坐さず。昔が今に至る迄、我が身にかゝらぬ事迄も、人の言ふ習ひにて、「宰相殿は世にも人無きやうに、斯かる御振舞かな。可笑しき御心かな」と笑ひける程に、母上聞召し、「皆々僻言をや申すらむに、乳母見せよ」と宣へば、乳母見て「眞にて候」と申しける。父母呆れ暫し物をも宣はず。稍々あつて、「如何に乳母聞け。兎角宰相の君を諫め、鉢かづきに近づかぬやうに計らへ」と宣へば、乳母若君の御前に参り、何となく御物語申し慰めて「如何に若君様、眞しくは候はねども、湯殿の湯沸し鉢かづきが許へ通はせ給ふ由、母上聞召して、よもさやうには有るまじけれども、若し眞ならば、父の耳に入らぬ先に、鉢かづきを出すべしとの仰せにて候」

と申しければ、若君宣ふやうは、「思ひ設けたる仰せかな。一樹の蔭、一河の流れを汲む事も、他生の縁(縁)とこそ聞け。古もさる事あればこそ、主の勘當蒙り、千尋の底に沈むとも、妹背の中はさもあらず。親の御不寐蒙りて、忽ち無間(無間)に沈むとも、想ふ夫婦の中ならば、何か苦しかるべきぞ。殿上の御耳に入り、忽ち御手にかゝるとも、かの鉢かづき故ならば、捨つる命は露塵程も惜しからず。彼の人を棄てむと思ひも寄らず。この事用ひ申さぬとて、鉢かづき諸共に追ひ出し給ひなば、如何なる野の末、山の奥に住むとても、思ふ人に添ふならば、ゆめゆめ悲しかるまじ」とて、我が御方を御出でありて、柴積む樞に入り給ふ。日頃は人目を裏ませ給ひしが、乳母参りて申してより後は、終日鉢かづきが許にぞ居給ひける。

さる程に御兄達も、一門座敷に叶ふまじとありけれども、厭ふ氣色も坐さず、いよ／＼人目も憚らず、朝夕通はせ給ひける。母上仰せけるやうは、「さもあれ鉢かづきは、如何様變化の者にて、若君を失はむと思ふやらむ。如何せむ、冷泉」と仰せける。冷泉申されけるは、「彼の君はさならぬ事さへ、色深く物恥ぢをし給ひて、臙げ事迄もつゝましげなる御性質にて渡らせ候へども、この事に於ては恥ぢ給ふ氣色も候はず。さあらば公達の嫁比べをし給ひて御覽候へ。さやうに候はば、彼の鉢かづき恥かしく思ひて、何處へも出で行く事候はむ」と申されければ、

實にもと思召し、「何日々々公達の嫁比べあるべし」と、口々に觸れさせける。さる程に宰相殿鉢かづきが許へ御入りありて、「あれ聞き給へ、我々を追ひ失はむ爲に、嫁比べといふ事申し出して觸れ候へば、如何せむ」と涙を流し給ひければ、鉢かづきも共に涙を流し申すやう、「我故に君を徒らになし申すべきか。我々何處へも行かむ」と申しければ、宰相殿仰せけるは、「御身に離れては片時も居られ候まじ。何方へなりとも共に出でむ」と宣へば、鉢かづき何と思ひ分けたる方も無く、涙を流し居たりけり。

扱兎角過ぎ行く程に、嫁合はせの日にもなりぬれば、宰相殿鉢かづきと二人、何處へも立ち出でむと思召しけるこそ哀れなり。さる程に夜も明方になりぬれば、召しも習はぬ草鞋締め穿き給ひて、流石父母住み馴れ給ふ事なれば、御名残惜しく思召し、落つる涙に搔曇り、今一度父母を見奉りて、何處とも知らず出でむ事こそ悲しけれと思召せども、遂に一度は離れ參らせむものと思ひ切り給ふ。鉢かづきこの由見奉り、「我一人何方へも出で參らせむ。契り深く候はば、又廻り合ひ候はむ」と宣へば、「恨めしき事を仰せられ候ものかな。何處迄も御供申し候はむ」とて、斯くなむ、

君思ふ心の内は湧き返る岩間の水に比へても見よ

と、斯様に遊ばし立ち出でむとし給ふ時、鉢かづき斯くばかり、

我が思ふ心の内も湧き返る岩間の水を見るにつけても

などと打詠め、又鉢かづき斯くなむ、

よしさらば野邊の草ともなりもせて君を露とも共に消えなむ

と遊ばしければ、又宰相殿斯くばかり、

路の邊の萩の末葉の露程も契りて知るぞ我れもたまらむ

と遊ばして、既に出でむとし給ふが、流石御名残惜しく、悲しく思ひ給ひて、左右なく出でやらず、唯御涙堰きあへず。斯くて留まるべきにもあらざれば、夜も漸々明方になりぬれば、急ぎ出でむとて涙と共に、二人ながら出でむとし給ふ時に、戴き給ふ鉢かつばと前に落ちにけり。宰相殿驚き給ひて、姫君の御顔をつくぐと見給へば、十五夜の月の雲間を出づるに異ならず。髪のかゝり、姿容何に譬へむ方も無し。若君嬉しく思召し、落ちたる鉢を開けて見給へば、二つかけご(25)のその下に、金の丸かせ(26)・金の杯・銀の小提子・砂金にて作りたる三つなりの橋・銀にて作りたるけんぼのなし(27)・十二單衣の御小袖・紅の千入の袴(28)、數の寶物を入れられたり。姫君これを見給ひて、我が母長谷の觀音を信じ給ひし御利生と思召して、嬉しきにも悲

しきにも、先立つものは涙なり。扱宰相殿これを見給ひて、「これ程いみじき果報にて坐す事の嬉しさよ。今は何處へも行くべきにあらず」とて、嫁合はせの座敷へ出でむとこしらへ給ふ。

既に早夜も明けければ、世間さどめきける。人々言ひけるは、「これ程の御座敷へあの鉢かづきが出でむと思ひ、何處へも行かぬ事の不得心さよ」と笑ひける。さる程に疾くくと觸れければ、嫡子の御嫁御前は尋常なる御装束にて、御年の程二十三許りとうち見えて、頃は九月半ばの事なれば、肌には白き御小袖、上には色々の御小袖召し、紅の袴ふみくゝみ、御髪は丈に餘り、邊も耀く許りなり。御引出物には唐綾十疋・小袖十重、廣蓋に入れ參らせ給ふ。次男の嫁御は御年二十許りにて、尋常にして氣高く、人に勝れて見え給ふ。御髪は丈と等しく、御装束は肌には生絹の御袴、上には摺箔の御小袖、紅梅の縫物の御袴ふみくゝみ、扱引出物には小袖三十重參らせ給ふ。三男の嫁御前最も御年十八許りとうち見え、御髪丈には足らねども、月に嫉まれ花に猜まれさせ給ふ程の御風情なり。御装束は肌には紅梅の御小袖、上には唐綾着給へり。御引出物には染物三十反參らせ給ふ。三人の嫁御前、何れも劣らぬ御姿なり。扱遙かに下りたる處に、破れたる疊を敷かせ、鉢かづき置かむと拵へける。人々申し合ひけるは、「三人の嫁御前は見奉りぬ。鉢かづきが淺ましき體にて出でむを見て笑はむ」とて、軒端の鳥にはあ

らねども、羽繕ひして待ちゐたり。扱三人の嫁御前等も、今やくと待ち給ふ。又姑御前仰せけるは、「何處へも行かずして、只今恥を搔くべき事の悲しさよ。何しに嫁合はせなどと言はずとも、善きも悪しきも知らぬ體にて、置くべきものを」と仰せける。

さる程に鉢かづき遅しと度々使立ちければ、宰相殿聞召し、「只今それへ參る」と仰せければ、人々見て笑はむとぞじどめきける。出でさせ給ふ有様、物によく々々驚ふれば、仄かに出でむとする月に、雲のかゝる風情にて、御容顔氣高く美しく、御姿は春の初めの絲櫻の、露の隙よりも仄見えて、朝日の映る風情に異ならず。霞の黛ほのくと、嬋妍たる兩鬢は、秋の蟬の羽に比へ、婉轉たる御容顔は、春は花に嫉まれ、秋は月に猜まれ給ふ御風情なり。御年の齡十五六程に見えさせ給ふ。御装束には、肌には白き練の絹、上には唐綾、紅梅・紫、色々の御小袖、紅の千入の御袴ふみくゝみ、翡翠の髪ざしゆり懸けて歩ませ給ふ御姿、偏に天人の影向も斯くやと思ひ知られけり。待ち受けて見給ふ人々、皆々目を驚かし、興醒めてぞ在しける。宰相殿の御心の中の嬉しさ限り無し。さる程に御座敷一段下りて、拵へたる處に直らむとし給ふ時に、舅三位の中將殿、「いかで天人の影向を下座に置くべき」とて請じさせ給ふ。餘りのいとほしさに、母御前の左の膝元へ呼び參らせ給ひける。扱舅殿への御引出物には、銀の臺に黄

金の杯据ゑ、黄金にて作りたる三つなりの橋・黄金十兩、唐綾・織物の御小袖三十重・唐錦十反・卷絹五十疋、廣蓋に積ませ参らせらる。姑御前への御引出物には、染物百端・黄金のまゝるかせ、銀にて作りたるけんぼの梨の枝折り、黄金の臺に据ゑて参らせらる。人々見て、眉容、衣裳・御引出物に至るまで、勝りはすれども人に劣らずと、目を驚かさばかりなり。三人の兄嫁御前達をも、初めは美しく思召しけれども、この姫君に合はすれば、佛の御前に惡魔外道が居たるに異ならず。兄御達仰せけるは、「いざや覗きて見む」とて、覗き見給へば、邊も耀く程の美人なり。皆々不思議に思召して、何と申すべき言の葉も無し。楊貴妃・李夫人もこれには如何優るべき。とても人間に生れなば、斯様の人こそ一夜なりとも契りおかまほしけれと、人々美み給ひけり。

三位の中將殿思召しけるは、「この程宰相の君絶え入り(30)思ひつる事こそ理なれ」と思召しける。扱御杯参りければ、姑御前聞食し、やがて姫君に獻し給ふ。その後獻々廻りければ、三人の兄嫁御前達談合あるやうは、「眉は下蔭に因らぬなり。管絃を初め、和琴を調べさすべし。和琴は殊にその源を知らせざれば、左右なく弾かれぬものなり。宰相殿はその源を明らか給へば、後には教へ給ふとも、今夜の中には教へ給ふ事なるまじ。いざや始めむ」とて、兄嫁御前は琵琶

の役、次郎嫁御は笙を吹き給ふ。殿上は鼓打ち、「姫君は和琴御調べ候へ」と責められける。その時姫君仰せける様は、「斯様の事は未だ聞き初めにて候へば、少しも存ぜず候」と御辭退あり。宰相殿御覽じて我が身を姫君と見よかし。行きて弾かむものをも思召しける。その時姫君御心の内に思すやうは、我を賤しき者と思ひ、斯様にして笑はむ爲と思召し、我も昔母に傳かれし時には、朝夕手馴れし樂の道なれば、弾かうすものと思召し、「さらば弾きてみ申し候はむ」とて、側なる和琴引寄せ、三返調べ給ひける。宰相殿御覽じて、嬉しき事限り無し。御前達御覽じて、「歌を詠み、手書く事も、後には宰相殿御教へあるべし。只今の中には教ふる事もなるまじ。さらば歌を詠ませ笑はむ」と談合なされ、「これ御覽ぜよ姫君、櫻が枝に藤の花、春と夏とは鄰なり。秋は殊更菊の花、これにつき姫君一首遊ばし候へ」と仰せければ、姫君聞召し、「あらむつかしの事を仰せ候ものかな。我々が能には、この程湯殿に侍ひて、朝夕手馴れし水車、汲み上げしより外の事は無し。歌といふ事は如何やうなる物やらむ、少しも存ぜず候。先づ御前達遊ばされ候へ。その後は兎も角も申して見む」とありければ、御前達仰せけるは、「姫君は今日の御客も(31)にて坐せば、先づ一首遊ばし候へ」と責められける。その時姫君一首とりあへず、